
神創兵器 エレクシエスト

鯖味噌汁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神創兵器 エレクシエスト

【Nコード】

N5487C

【作者名】

鯖味噌汁

【あらすじ】

1986年 突如NYに現れた第一型死生物デルはアメリカに壊滅的被害を与え睡眠状態となった。それから14年後の2000年 日本の死生物撃退用組織、防衛庁時間管理局はある少年を死生物重要参考人として保護し、監視下に置こうとしていた・・・

第一話

第一話 白

「起立」

今日も一日が終わる。

「さようなら」

「さようなら」

途端に教室が騒がしくなる。

「またあのセンコー、チャイムきっかりに終わしやがったぜ」

「卒業まで続くかもな」

一人だけ立ち上がっていない者がいた。

「神崎君」

彼に女子が話しかけている。

「神崎君？」

女子が彼を覗き込む。

「神崎君！」

「な、なに？」

実に寝ぼけた声が返ってきた。

「やっぱり寝てた。」

そこの席いいよね。前が大原君だから何してても見えなくて」

「僕にとつちや、本当に天国だよ」

「志隆！」

後ろからきた男子が彼の椅子を思い切り蹴る。

彼の腹に机がめり込む。

「ちよつと・・・やばかったんじゃない？」

「志隆！おい志隆！」

男子が彼の頭を覗き込んで見ると、口から涎を垂らし、半分白目になっていた。

「ひいつ!？」

「か、神崎君!」

女子が彼の頬を連続ビンタする。

「……い………」

「神崎……君?」

「……痛い………」

二人が安堵する。

「よかった………」

「何が?」

「人生つていうのはな、語らなくていいこともあるんだ」

「同級生に言われても迫力ないけどな。ましてや小暮だし」

そう言つて彼はまた倒れるように寝始めた。

小暮と呼ばれる男子が無理矢理夢の世界から引きずり出す。

「なんだよ小暮」

「これから四人で飯食いに行こうと思つてな」

彼は少し首を動かして辺りを見回す。

「篠崎は?」

小暮が彼の視界の上を指差す。

彼が少しずつ椅子を倒していく。

「やっぱり」

案の定

「あーあ」

後ろに派手に倒れた。

「痛つてー………」

「だ、大丈夫? 志隆君?」

「なんとか……ね」

また夢の世界へと誘われる彼を引きずりながらなんとか四人は教室を後にした。

「またここ?」

「安くて近くてみんなで楽しめる。」

「これこそ最高だろうが」

「それを言うなら、安くて速くてうまい、じゃないの？」

店中にソースの匂いと焦げる麺の匂いがしていた。

「ご注文はお決まりになりましたか？」

「ええっと・・・チーズとキムチのもんじゃで」

「わかりました」

全員が同時に部屋の壁に倒れこむ。

「しかし、部活無い高校がこんなに暇な物だとは思わなかったな」

「それだけがこのとりえだからね」

全員が照明と換気扇を見上げる。

「テスト終わってから一ヶ月、ずっとこれかぁ・・・」

「そろそろ次のやつもはじまるよね・・・」

「進路決まってるやっ拳手」

四人全員が手を挙げる。

「だるだるだな・・・」

「いいじゃん。それだけがこのグループのとりえなんだから」

「否定したいところだけど、否定できないんだよねえ・・・」

「そうだよねえ・・・」

笑い声が聞こえてくる。

「これから僕達、どうなってくんだろうねえ・・・」

「なるようになってくдар。どうせ一般市民Aで終わるさ」

「主役級がここから生まれるわけないよねえ・・・」

足音が近づいてくると共に全員が一時的に座りなおす。

品物が置かれると共に誰ということも無く、四人が分担して野菜

を切り始める

「この作業するの、一体何回目だろうね」

「百回は軽く超えてるだろ」

四人は手際よく野菜を切り終わると一つにしてドーナツ型に中をくり抜く。

くり抜いた直後に汁を入れ始める。

「ここのもんじゃうまいけど、さすがに百回も食べるとなあ……」

「メニューも全部制覇したしなあ……」

特に意識する事も無く、揃ってため息をつく。

「次からはどつか喫茶店にでも行ってみるか」

「喫茶店って、最近できたメイド喫茶しか知らないけど」

「パス」

「パス」

「パス」

汁の表面に膜が張ってくる。

「じゃあ他に喫茶店知ってる人は？」

沈黙。

数秒後に揃ってまたため息をつく。

「このグループ内に情報通に通じてそうなやつ、いないからなあ……」

「ゲーセンなら暇潰せそうじゃない？」

「四人共通でできるやつ、ないだろ？ 別々にやっただんじゃ意味無いしな」

また誰とでも言うことなく、土手を崩してかき混ぜる。

そして突き出された三つの皿に篠崎が出来上がった物に乗っけていく。

きれいに四等分されており、鉄板には屑さえ残らなかった。

「これ食い終わったらゲーセン、行くのか？」

「そつえば買いたいものあったから、みんなでデパート行かない？」

「私もあった」

志隆と小暮が女子二人に向かって右手を突き出す。

あっけなく平手で返された。

差し出した手が鉄板に直撃する。

「あちっ！」

「何も手出したただけだろうが！」

「わかった。五百円で勘弁してあげるからこれ食べたら行く。デパート」

「あー、手疲れた」

「でも自給五百円のバイトだから別に悪くないかも」

「月十二万だぞ？」

「わかんないよ。そういうの」

夕日の十字路を一人と三人に分かれて進んでいく。

「じゃ、ここで」

「バイバイ」

「じゃあな」

「じゃあね」

何気なく、空を見上げる。

一番星が輝いていた。

しかし、辺りを見回せばすでに別の星が光っていた。

カバンからウォークマンを取り出す。

聞きなれているクラシックが流れてきた。

誰もいないのをいいことに、指揮を振りながら歩く。

音量を調節しようとした瞬間、

体中に振動が伝わった。

横を向いた瞬間に驚愕する。

目をこする。

驚愕する。

こする。

驚愕する。

何度こすってもその光景に変わりはないかった。

深紅の眼球。

白黒の巨人。

距離と大きさなどを考えても身長百メートルはあるだろうか。

白黒の体には少し不似合いな深紅の目が彼をしっかりと見つめていた。

「な、なに？」

なんの予告も無しに彼の脇五メートルほどを光線が駆け抜けた。

舗装されている道路が土まで丸見えになっている。

粉碎している、というよりは削り取られていた。

第二射が放たれようと思った瞬間、

第二の振動が体に伝わった。

巨人が見た先を追いかけると

銀色の装甲板。

四脚。

尾。

足と同じ太さの腕。

細い青目。

そしてその青目も彼を捉えていた。

それも身長は百メートルありそうだった。

「アニメの展開とかから予想すると、赤目巨人が敵で青目巨人が味方？」

巨人から先程と同じものがもう一方に照射された。

胸部に命中すると当たった方の巨人が倒れる。

土煙のような物と共にビルが倒壊する。

倒れたその場所から何かが放たれた。

投槍が巨人へと命中し、激しく出血をした。

赤い空がさらに真っ赤に染まる。

しかし、全く動じていない。

巨人は二射目をもう一方の巨人へと照射する。

立ち上がった巨人は装甲板が剥げて、白い中身が剥き出しになっていた。

巨人はその四脚で跳び上がり、襲い掛かる。

しかし、もう一方の巨人は瞬きをした瞬間に消えていた。
巨人は動かない。

目がこちらを捉えた。

ゆっくりと歩きながら近づいてくる。

ようやく事態を把握したのか、志隆は全速力で駆け出した。
何が起きているのかもわからない状態で。

志隆の足が止まった。

目の前には今、後ろにいたはずの巨人が立っていた。
思わず腰を抜かしてしまう。

涙が零れ落ちる。

巨人の胸部が中から引き裂かれる。

中から筒状の物が飛び出す。

巨人の手が志隆を優しく掴む。

「や、やめてよ！」

ちょうど胸の高さほどまで腕が上がったとき、志隆は筒の中へ放り込まれた。

何回も前転を繰り返してようやく志隆は止まった。

「いつてててて」

「お前が死生物の激戦に耐えられたとは思えないな」

中にはすでに先客がいた。

「シセイブツってなに？」

「俺の名前よりもまずは死生物か。その好奇心は認めてやるか。

まあ、後ろに座れ。またあいつが来る」

彼が座っている物の後ろには確かに座席があった。

「これ？」

「それ以外に無いだろ？」

仕方なくそれに座ると腰の部分が拘束具のようなもので覆われた。
体が自由に動かせなくなる。

「何・・・これ・・・」

「黙れ。来る」

出口が閉じられ、筒の中にまわりの景色が写る。

「目標確保」

「やったわね」

「こんなもの、お前にだってできるさ」

「そりやどうも」

景色が動き、さっきの巨人が姿を現す。

内部が激しく揺れる。

「よこせ！」

巨人の両脇に双剣が現れる。

ゆっくりながらも走って敵に近づいていく。

中は激しい揺れに苛まれる。

「うわああああああ！」

「少し黙ってる！」

前の巨人からまた光線が発射される。

巨人がまたもや倒れる。

中は重力が横にかかる。

「レオムは！」

「私がやってるんだから、声かけないでよ！」

視界上部に身長二十五メートルほどの人型兵器が写る。

両手には何か太い電線に繋がれた長い銃が握られている。

それを巨人に向かって構えると強烈な光と共に何かが発射され、人型兵器が反動で吹き飛ぶ。

それをくらった瞬間に巨人は光の中に包まれた。

「どうなってるの？」

「相手の爆風に巻き込まれてるだけだ。勝ったんだ」

光が止んだ後の景色はただの廃墟となっていた。

「町・・・は？」

「消えたさ」

「・・・え？」

もう一度、頭上に広がっている廃墟を眺める。

「みんなは？」

「さあな。避難勧告が出ていたはずだから、逃げてると思うぞ」

「こんなところに防空壕みたいなのところって、あるの？」

「ある。防時局ならそれぐらい用意できる」

聞いたことも無いところだ。

「死生物って何？レオムって何？これって何？あれって何だったの？防時局って」

「聞きたいことがあつたら着いてから聞け」

筒がまた外へ出される。

「平塚清輝、神崎志隆の生存を確認」

外にいたのは自衛隊のような人達だった。

第二話

第二話 赤

志隆が連れてこられたのは廃墟だった。

「まさかこんなところで拷問！？そっいえばなんで連れて来られるんだろう？」

言っておくけど、金ならあんまり期待しないほうがいいと思うよ

「お前を使って金なんかせびるわけがあるか。」

防時局は民間人から金をせびるほど貧乏じゃねえよ

自衛隊のような人達が去っていく。

「では、私達はこれで」

「ああ。きっかり消させてもらう」

「承知しています」

ヘリが飛び立っていった。

「消すって何を？まさか人を？」

「記憶だ」

「記憶！？」

「つべこべいわずにそこに乗り込め」

「おかえりなさい。そしていらっしやい」

そこにいたのは身長百四十ほどのかわいらしい女の子だった。

「滝網美月指揮官。ただ今帰還しました」

「指揮官！？こんな女の子が！？」

美月と呼ばれた指揮官に怒りの表情が浮かぶ。

「私、二十二歳なんですけど」

「ええっ！？」

志隆が美月に顔を近づけてまじまじと見る。

「年齢なんて詐欺したって限度っていうものがあると思うよ」

美月がポケットから何かを取り出す。

「免許証です」

志隆が指折り数える。

「本当だ」

「信じてくれたかしら？」

「無理」

さらに怒りが募る。

「やっぱりもろもろの紹介とか、レナに任せることにしたわ」

「それが妥当かと思います」

今度はまともそうな女子が近づいてきた。

「こんにちは。志隆」

聞いたことのある声が響く。

「い、いきなり呼び捨て！？」

女子が志隆を改めて眺める。

「そういうこと考えるタイプに見えないけど……」

ま、いいわ。私、レナ・ウィルター・スミス。レナでいいわ」

「が、外人！？」

「正確に言えば日本籍の外国人だから、日本人ね」

「結局外国人じゃん」

「まあ、どうでもいいわ。

じゃ、行きましょうか」

レナが歩き出す。

「どうしたの？色々知りたいんじゃないの？」

「あ、そうだね。うん」

志隆が歩き出す。

「寝ぼけてた？」

「……うん」

「まず、防時局って何？」

二人は周りを金属のようなもので覆われた通路を歩いていた。

「防衛庁時間管理局の略。このこと。」

民間人に普通の生活を送らせるために死生物を倒しているの」

「さつきも聞いた、シセイブツって何？」

間髪を入れずに志隆がまた聞く。

「知りたがりやなのね」

「多分ね」

「死生物はその名の通り、死んでいる生物」

志隆は考え込む。

「矛盾してない？」

「そう矛盾してるの。」

心臓と血管、骨、筋肉、皮、それと通常の人間の頭部にある器官はあるけど他は何も無い。

どこからエネルギーを得ているのかも、どうやって生きているのかも不明。

だから、死んでいる生物なの」

「あいつの他にもいるの？」

「十一型のこと？」

「多分、そうだと思う」

レナは手すりを叩きながら歩き始めた。

「現在確認されているだけです。十一体。多分、かなりの数いるわ。」

でも、どんなに姿形が違ってても構成されている細胞は同じなの」

「構成されている細胞が・・・同じ？」

「んーっとね・・・」

水っているいろいろな型に合わせて形を変えて、硬くなったり、見えなくなったりするでしょ？そういうこと」

「形と強度が変わっても元は同じ、ってこと？」

「正解」

頭上の蛍光灯が点滅した。

「他には？」

「死生物の十一型？が出したあれって何？レーザーとか、どういう類？」

レナは枝毛を見つけたようで髪をいじくりながら歩いている。

「AST粒子砲のことね。」

残念だけど、レーザーとは全く別物。

数京個の剃刀型の粒子が原子レベルで削っていくの。

だから、地球に現存するどんな強度の物を使っても無意味。

耐え切れるのは死生物の皮膚しかないわ。

それでも一分あれば貫通するけど」

「じゃあ僕が乗ってたあれはなんで大丈夫だったの？」

「死生物だからよ」

志隆の足が止まる。

「敵は、死生物だよね」

「そうよ」

レナも足を止める。

「死生物を倒すために死生物を使ってるの？」

「皮肉な話だけどそういうこと。それ以外に死生物に対抗できるものは無いわ」

「あの少しちっちゃいのは？倒したよね？」

レナが再び歩みを始める。

それにつられて志隆も歩き始める。

「レオムのことね。」

どうせ聞くと聞くから言うておくけど、レオムはREOM。

Railgun Equipment Only Machine
eの略」

「発音いいね」

「ありがと。」

レールガン装備専用機よ」

志隆の声がひっくり返る。

「レールガンってあの、数億ボルトの電圧を圧縮して弾を撃ち出す、ゲームの!？」

「何もそんなに緊張しなくてもいいわよ。

よく知ってるわね。その通り。

その代わり、ゲームみたいに簡単にリロードとか出来ないから。

射程範囲も限られてるし、全速で逆噴射しても反動で数百メートル吹き飛ぶから、実用的じゃないわ」

志隆が声の調子を整える。

「あれ、最後自爆したけど大丈夫なの？」

「死生物は核を攻撃されると危機と感知して自らの秘密を守るために自壊するの。」

町の復旧には一週間かな。完全な復旧は一年以上ね」

「い、一年!？」

志隆が飛び退く。

「大丈夫。あなたには引越してもらってから」

「ひ、引越し!？」

さらに飛び退く。

「そう。本部がある吉良風市、もとい死生物専用防衛都市、キラカゼに」

「いきなり言われても困るし、それにそんなところ行きたくないよ。この町、あいつらがいるから」

「案外、友達想いなだね。」

大丈夫。その気があるなら、友達も一緒に引越させてあげるから」

「そんなことできるの？」

「防時局を甘く見ないでよね」

一際大きな扉の前に到着した。

「そうそう、一番聞きたかったんだけど……」

「これでしょ？」

扉がゆっくりと左右に開く。

「人類最終終焉兵器、改造生物エレクシエスト」

それには見るものを圧巻させる、オーラがあった。

「死生物第一型、デルを改造して作った死生物に対する人類最後の砦。」

まあもつとも、真価を発揮させることはまだ出来ないんだけどね」

「真価が発揮できない？」

「これ、中から神経とかを操って操縦しているように見えるけど、実は外側のフレームが本体を動かしてるだけ。

戦力的には、同じ体長の機動兵器とほとんど変わらないわ。

ただ、コスト的にいいって言うだけ」

「偉そうなところなのに経費は少ないの？」

志隆がエレクシエストに視線を移したまま質問する。

「実はそう。」

機動兵器だと、死生物を倒した瞬間に爆発に巻き込まれて何もなくなっちゃうから、

外側のフレームを作るだけで済むからコスト的にいいの。

それに、AST粒子砲が思いっきり貫通しちゃうからね。

相手を倒した数だけパイロットの数が減ることになるし」

「遠隔操縦にすれば？」

「それだと、現場の状況に即座に対応することができなくなるから」

「大変なんだね」

「そういうこと」

志隆は手すりから降りた。

「ここに来的时候、自衛隊っぽい人達に清輝君？が記憶を消すとか何とか言ってたけど、あれって本当？」

「そう。防時局、及びエレクシエスト、死生物に関する記憶はここに属している人以外、全て消されるわ。

世界を混乱させないために」

「じゃあ、僕がいろいろ聞いても無意味ってこと？」

「いいえ。多分すぐにここに属することになると思うから、無意味

じゃないわ」

思わず志隆がレナを向く。

「えっ。ここに属する、って僕高校生だよ？」

「私達だってほとんど同じ年よ。」

他の人もみんなそう」

「でも、そうなると高校、やめなきゃならなくなるんだよね？」

「いいえ。あなたは死生物観察員として普通の生活を続けてもらうわ。」

存在的には居ても意味無いけど」

「意味無いならなんでそんなことさせるの？僕に」

レナが志隆に向かって歩き出した。

「あなたが、死生物に対する重要参考人の可能性があるから」

「重要・・・参考人？」

「あなたが死生物一型から十一型まで目視していて、現存している唯一の民間人だから」

「覚えてないけど？そんなこと」

「さっき言ったでしょ？民間人の防時局、エレクシエスト、死生物に関する記憶はすべて消されるって」

「あ、そうか。」

でも、それだけだったら、たまたまんじゃないかな？」

エレクシエストの胸部装甲換装作業がはじまる。

「いいえ。死生物が出現したときは必ず最初にあなたを見るの。」

それが何を示すのか、または本当にたまたまなのかはわからないけど。

とりあえず、あなたは選ばれた、ってこと」

「選ばれた・・・んだ」

「そういうこと」

レナが出て行くこうとする。

「どこ行くの？」

「ある程度終わったから仕事に戻るの」

「いいなあ。仕事か」

レナが扉の溝を越えて立ち止まる。

「あ、そうそう、そういえばあなたのこと一目惚れしたから、そのつもりでいてね」

レナが志隆に向かって銃を撃つ真似をすると、扉が閉まった。

「一・・・目惚れ？」

あまりに唐突なその言葉に志隆はその場に立ち尽くしていた。

第三話

第三話 水

「あ~~~~」

何事も無く日常は過ぎていく。

「まさか自身で避難所逝きとはな」

先日のごとはどうやら地震、ということ片付けられているらしい。

「でも、避難所でももんじゃがあるとは思わなかったよ」

もんじゃ屋・・・というわけではなかったが、簡易屋台のような物が出来ていた。

・・・謎である

「俺達のために用意されてるような気がするんだが」

「んなこたあない、んなこたあない」

材料が運ばれてくると共にいつもの作業がはじまる。

「でも、本当にあれ、地震だったのか？」

「だよ。何か大地震を体験したっ！っていう気がしないし」

「少し気になって航空写真調べてみたんだけどね」

「まっじめ」

小暮がすかさず茶化す。

「やめてよ小暮」

「で、調べたらどうだったんだ？」

「どう考えても私達と志隆が分かれる辺りのところを爆心地にして爆発があったように見えるの。」

「持ってきたから、見る？」

「うん」

篠崎が他の高校生と比べたらシンプルなカバンの中からアクリル製のフォルダを取り出す。

二人が同時にそれを覗き込む。

「ほお、確かに」

「でしょ？」

「神崎くんは見ないの？」

志隆は意識的に飛び跳ねた。

「え？」

「見ないの？」

「う、うん……」

「どうしたのよ。いつもはこういつのがあると思つて自分を忘れて見るくせに」

「そついう日だつてあるよ」

「……今日はクジラが戦艦を食べるかもね」

「雪とか雨じゃないの？普通」

なんだかんだ言いながら、志隆が航空写真を覗き込む。

見事なクレーターが、そこに出来ていた。

「……」

「感想は？」

「うん……すごい」

「薄いなあ」

篠崎が航空写真をカバンの中にした。

「もし……あくまで『もし』の話だけど、これがもし、誰かの隠ぺい工作だったら……どうする？」

「まっさかー」

一人、二人とは違うリアクションをとつた者がいた。

「でも、地震だとこんなことにはならないと思うけど？」

「それは確かに事実だとは思ふ。しかし！理想と現実というものはかけ離れているものだ」

「……かつこいこと言つたつもり？」

「……はい」

膜がだいぶ張り始めた。

「そもそも、隠ぺい工作をする必要がなんである？」

「そ、そうだよ。なんのために爆発を地震に偽装するの？」

「これもまた『もし』だけど、人類の混乱を避けるため・・・とか」
「爆発ごときで人類は混乱しないだろ？」

四人は土手を崩し始めた。

「人類以外の巨大生物がいつちやったりとか」

しばらくの間、焼ける音だけが耳に響き渡った。

「まあ、SF読み過ぎってことで」

「はいはい。現実をよく見ましょ～ね」

「・・・大丈夫？神崎くん？」

志隆は本人から考えても異常といえる汗をかいていた。

「い、委員長に心配されるようじゃ、本当にだめかもね」

「委員長呼ばわりしないでよ。どうせ強制なんだから」

「わかったよ。鈴木」

「大丈夫でしょ」

志隆は防時局支部の中にいた。

入らせてもらえるようになったらしい。

「でも、半分気づいてるようなものだと思うけど・・・」

「一応上官なんだから。私だって。」

ま、無理に直せないというなら直さなくても・・・」

「最後の方よく聞き取れなかったから、もう一度言ってくれない？」
「とにかく！」

美月が勢いよく机を叩く。

「そんな心配はしなくても大丈夫。ましてや事情を知ってる志隆くんがいるんだとしたらなおさら。」

死生物、エレクシエスト、防時局。

この三つのワードが一つでも出てきたら言っで。対処するから」
「わ、わかったよ・・・」

部屋の明かりが全て赤に変わった。

「太平洋沿岸10kmにて自衛隊海軍空母艦二隻が謎の消失！
リーダーには体長5kmを超える巨大生物！

体内にAST反応あり！死生物第十二型、ヨギ！」

「つい一週間前に来たばかりだっというのに・・・急にせっかち
になっちゃって・・・」

「涼白かりんはエレクシエストに搭乗し、待機！」

美月がそばにあったマイクを手に取った。

「ヨギは絶対領海内に侵入させないで！

ゲートで南極に飛ばして！」

「了解！」

「エレクシエストは脚部を水中戦用に換装！換装が終了しだいヨギ
より1kmに飛ばして！」

「了解！」

美月がマイクから手を離れた。

「ゲートってどういう・・・」

「いいから来て！」

「は、はいっ！」

「状況知らせて！」

「エレクシエスト、脚部換装終了！これより投下です！

ヨギは以前、活動を止めません！」

「地下ゲート開放完了！」

「四次元ゲート完了！」

「合図を！」

「エレクシエスト、投下！」

モニターに写っているエレクシエストの下の床が開き、成す術も
なく地球に引かれていく。

突如、消えた。

「消えた！？」

「エレクシエスト、南極へ到着！ヨギ、エレクシエストへ向かって

いきます！」

「ちょうどーい」

空気に似合わないマイペースな声が響いた。

「、投下！」

大剣が投下され、また消えた。

「エレクシエスト、ヨギと近接戦闘を開始！」

「衛星映像、モニターに出します！」

比較するものが無いためわからないが、相当大きいことは文脈からわかる。

エレクシエストの姿は見えなかった。

「エレクシエスト確認不可能の為、モニター終了します。

レーダーに切り替え」

赤い点と異形の魚のような物が写った。

「ヨギ、エレクシエストに急速接近！」

その体から考えてもありえない速さで点に近づいていく。そして。

「エレクシエスト、ヨギに取り込まれましたっ！」

「操縦者とエレクシエストの生存確認急いで！」

「生存確認中。意識がある場合は何か言葉を発してください」
しばしの沈黙が続く。

一秒一秒をおうごとに焦りがつのる。

「肉マン食べたーい」

多少の笑いと共に指揮室が安堵に包まれた。

「ヨギのAST反応拡大！」

「操縦者は衝撃に備えて！オペレーターはゲート準備！」

「了解！」

「エレクシエスト前部装甲板、及び起動部融解中！20！43！57！88！」

モニター隅にあるゲージが見る間に減っていく。

「ヨギ体内に四次元ゲート展開！」

「エレクシエストの可動状況確認！」

「両腕起動部、可動可能！両前脚部、完璧に損壊！」

「AST反応、正常に戻りました！」

「四次元ゲート、収束」

「くっっ！」

突如指揮室にかりんの声が響いた。

「どうしたの！？」

「ヨギが戦艦・・・を・・・」

足が・・・折れま

砂嵐。

「ヨギ、消滅！」

「すごかったよ」

「どうも」

しばしの沈黙が流れる

「・・・何も言わないんだね」

「あきらめたわ。」

それにその口調で・・・い・・・」

語尾が小さくて聞こえなかった。

「聞こえないよ」

「とにかく！」

また美月が机を叩いた。

「四次元ゲートのことは聞かなくていいの？」

「うん、じゃあ、お願い」

美月がパソコンを起動し始めた。

「一次元とか二次元って知ってる？」

「一次元はなんだか分からないけど、二次元ってアニメとかのこと
でしょ？」

「まあ、そんなところでいいわね。」

で、三次元がここの世界。四次元が

「ドラえっ？」

美月が慌てて机ごと志隆を押し倒した。

「いやっ、あのっ、そのっ……」

「ああ……ごめん。誤解しないで」

「誤解するってそりゃあ」

志隆が軽くホコリを払いながら立ち上がる。

「しかもこの部屋、許可がないと入れないんでしょ？」

「うん」

「うん!？」

美月が途端にどきまぎし始める。

「いや、その、あの、あ、えっと……」

「無理……してるの？」

美月が顔を真っ赤にしながらかうなづいた。

「だ、だけど……その……私だって……指揮官だから……」

「……」

「一人ぐらい、その言葉で話してもいいんじゃないかな？」

せつかく、かわいいんだから」

美月が後ろを向いたところで硬直した。

「今、何て言った？」

「?……一人ぐらい、その言葉で話」

「その後!」

「せつかく、かわいいん……だから？」

後ろ姿だけでも、顔がどうなっているのかはわかった。

「……」

「……どうしたの？」

「初恋の相手……誰だと思う？」

「同級生……とかじゃないの？」

美月が首を横に振る。

水色の髪が少し揺れる。

そして、振り返って真摯な目で志隆を見つめた。

「私をはじめて誉めてくれた人・・・それはもちろん、あなた」
優しい・・・笑顔だった。

「え・・・そんな・・・困りますよ・・・」
だって・・・そんな・・・はじめて誉めたからって・・・そんな
ことで・・・」

「私はがんばって、がんばって、がんばって、がんばっても、友達
にも先生にも親にも誉められたことがなかったの。

親がすごかったから、それがあたりまえだと思われてて・・・
本当にただの子供だったのに・・・」

いくら努力しても親にも何にも言われなかったんです。

だから、小学生のことからずっと、はじめて誉めてくれた人を初
恋の人にするんだ、って決めてました。

だから今日、報われました」

ほんの少しの沈黙の後、志隆が続ける。

「いや・・・それだからって・・・」

「私のこと嫌・・・い？」

「そういうことでも・・・」

「じゃあ、キスしていい？」

是非を問わずに美月が志隆へと近づいていく。

「で、ででっ、でで、でも、それは後・・・に・・・」

志隆を壁によりかからせて自分の身長へとあわせながら、目を閉
じて近づいていく。

「・・・」

自分から言っておきながら、当の本人より頬が赤らまっているこ
とがよくわかった。

「・・・」

「・・・」

端から見ても、両方初心者なのがよくわかった。

「・・・」

「・・・!」

「・・・・・・・・?」

志隆の顔が青ざめていく。

ついに自分を支えきれなくなり、その場に倒れた。

「し、志隆!」

呼吸困難。

第四話

第四話 金

数百もある膨大な数のベッドの一つで、志隆は起きた。

「志隆、起きた？」

残念ながら美月ではなかった。

「聞いたことのある声」

「だれっかな？」

たいして数のない引出しの中から名前を見つけ出した。

「パイロットの人？」

「正解」

やる気の無さが心から伝わってくる。

「じゃあ、せつかくベッドがあるから」

かりんが上着を脱ぎ始めた。

「ちょ、ちよつと待ってよ！」

「ああ、そうだね。脱がせたいよね。男なんだし」

ベッドに身を投げた。

「いや、そういうことじゃなくて……」

「着たまま？それはちよつと勘弁してほしいなあ」

「それじゃあ、着替えてくる」

「だから！」

志隆がかりんの腕を引っ張って無理やり座らせた。

「もしかして、したくないの？高校生でしょ？」

「はつきり言っていたい気持ちは……存分にあります……が、

いきなり初対面の人には……引く」

「自分が満足すればそれでいいじゃない」

初対面だろうが、嫌いな人であろうが、友達であろうが」

……

「他の男はそうかもしれないけど、とりあえず僕は違つよ」

「そんなこといつちやつて」

「一応、僕を好きになつてしまつてゐる人が二人もいるんだし・・・

・・・」

「三人よ。さ・ん・に・ん」

思わず志隆はカリンを見つめる。

「まさか・・・」

「ア・タ・シ」

志隆は反射的にベッドぎりぎりまで後ずさりした。

「いや、あの、その、あ、え、あの・・・」

「だから、い・い・で・しょ？」

志隆は一日の内に二回も「初」を経験してしまふのであろうか。

「かりん！」

救世主。

今の彼は彼女のことをそういいたいであろう。

「何、人様の物に手をつけてるのよ！」

志隆は売約済みなんだからねっ！」

「いや、何もまだOKとは」

「物でもなんでも、使つたもの勝ちじゃない」

・・・聞いている。

「あなたたち！」

こうなつてしまえば、彼女も火に薪をくべるようなものである。

「美月指揮官！」

「さつさと仕事に戻りなさい！」

し、志隆は・・・も、もう私のものだから！」

「指揮官まで・・・こうなつたら徹底抗戦です！」

「あの・・・人の話を」

「あなたたちはまだ言論に過ぎないでしょうけど・・・実行したから！」

本人そつちの気である。

「手、速っ!」

「いや・・・さすがにまだそっちまでは・・・いつてないけど・・・」

「じゃあ、同じようなものじゃないですか」

「な、何を!」

「しちやえばいいんでしょう?それぐらいなら」

レナが志隆に覆い被さる。

「これで・・・おあいこですよ?」

「じゃあ、私も」

されるがまま。

三対一とはいえ、女にされるがままになっている志隆の身も考え
てやってほしいものである。

「次はお先にいかせてもらいまゝす」

「し、しっ、しっ、しっ・・・」

「くっ・・・そこまでやるか・・・」

「どう?」

「やけくそ!」

・・・

「くはあ・・・」

「指揮官に先を越されるわけにはい、いきません!」

・・・

「・・・」

「それじゃあ、次のステップへ、っと・・・」

かりんが少しずつ手をのばす。

「や・・・」

「っ・・・」

美月が少しずつ手をのばす。

「やめ・・・」

「く・・・」

レナが少しずつ手をのばす。

「やめてくれ~~~~~!!!!!!」

三人の動きが止まった。

「ありがとうございます神様。」

今度からは500円玉投げさせていただきます。」

泣きながら手を合わせていた。

「・・・時計が止まってる?」

秒針が止まっていた。

電池切れではない。

「とりあえず出よう。ここから」

茶髪の男子を見つけた。

「清輝」

動かない。

「清輝?」

動かない。

「動いてよ」

動かない。

「これならどうだっ!」

・・・

「・・・やらなきゃよかった・・・・」

元に戻す。

「他の人たちも止まってる・・・・」

瞬き一つしない。

「やっぱりあなたも私達の仲間だったのね」

「だ、誰!」

黒い長髪をした青目の女子が立っていた。

「私の名前は時野神子。私はそれしか知らないわ」

「それしか・・・知らない?」

「いいから黙ってついてきて」

「何これ？」

「時間制御装置。時間を止めるための機械。」

「これで時間を止めている間に人間の記憶を消す」

「へ、へ」

「次はこつち」

「まだあるの？」

「戻りたくないわよね」

「ま、まあね……」

「ここつて入っちゃいけない場所なんじゃ……」

「時間を止めていれば誰にも気が付かれないわ。」

あなたにはこれを操縦する技術が必要になるの。

だから私が教えなければいけない」

「どうして？」

「わからない」

「わからないのに、こんなことやって大丈夫なの？」

「知らない」

エレクシエストの体から搭乗室が出てきた。

「入って」

「うん」

中は見たことがあったとおりだった。

「起動させるにはそのレバーを全て上げればいい。」

歩かせるには足元にある台。両方前に踏み込めば前進。後ろに踏

み込めば後退。

腕を動かすにはわきにある穴に手を突っ込んでほしいように動かす。

とりあえず、これだけ覚えておけば戦えないことはないわ」

「わ、わかった」

「詳しい部分はこれから死生物が来るたびにやるわ。」

復習だけは怠らないで」

「わかった」

神子は搭乗室から出て行った。

「と、時野！」

「何」

「す、好きな人とかいる？」

「いても邪魔なだけだわ」

時野はさっさと行ってしまった。

「何なんだろう・・・あいつ。」

知らない、とかわからない、とか。

気になるなあ・・・」

「戻りたくなくても元の場所にいたほうがいいわ」

いないと思っていたのにいたら、驚くことは間違いない。

「あなたが動けるといふ事実が伝わったら、それはそれでやっかいなことになる。」

元の場所にて。1mmも変わらずに」

「1mmも!？」

「そうよ」

「無茶言わないでよ・・・」

「やられるとわかっていながら何も出来ないっていうのも、嫌だなあ」

仕方がなく元の位置に寝転ぶ。

時がはじまった。

その時。

「防時局第三支部より西北西5km地点にAST反応！」

死生物第十三型、ムボです！」

四人のいざこざが終わる。

「烈那英子はエレクシエストに搭乗し、待機！」

指揮室外にいるオペレーター、及び美月指揮官は戻ってきてくださいー！」

「じゃ、私当番じゃないから」

「あんたも来なさいよ！」

レナがかりんを引きずっていった。

「来たかったら、来てね」

美月が走っていった。

「・・・行こうかな。じゃあ」

「状況確認！」

「現在ムボは第三支部に約時速60kmで向かっています！」

「いきなり根元を叩こうってわけね。いいじゃないの」

「地下ゲート開放完了！」

「四次元ゲート完了！」

「合図を！」

「エレクシエスト、投下！」

エレクシエストが急降下し、また消えた。

「結局、四次元ゲートのこと教えてもらってなかったっけ……………」

「志隆ったら、そんなこともまだ知らなかったの？」

四次元ゲートってというのは簡単に言えばワープゲートのことで、

三次元から四次元へ移動させた後に、四次元の空間を磁力で移

動させて、

無理やりくつつけて三次元に出してやるってこと」

「・・・薄々わかったよ」

日常から非日常へとまた戻される。

「ください！」

「、投下！」

線の無いレールガンが投下された。

「出力80%！・・・発射！」

ムボがその10倍はあるつかという爆風に飲み込まれた。

「す・・・すごい……………」

「これはまずそゝな展開」

「何がまずいの？」

かりんがモニターを見つめたまま答える。

「にあんなに火力は無いわよ。っていうことは、

ムボの皮膚かゝ、体全体が爆薬っぽいものでできてるかもね」

「もしかして……」

かりんが志隆を見つめた。

「この付近に来たら自爆してここを一斉排除するつもりね」

「……死ぬの？」

「さあね」

「ください！」

「、投下！」

ロケットランチャーが投下される。

「ロックオン！……発射！」

さらに凄まじい爆風が起こる。

「英子ったら、ここで全部燃やし尽くすつもりなのね」

「燃やし……尽くす？」

「危険な爆弾を処理する一番簡単な方法……」

人のいない安全な場所で爆発させればいいのよ」

「ください！」

「、投下！」

肩に担ぐタイプのガトリングガンが投下される。

「ずいぶんいろいろ使うな」

「英子は遠距離専門だから」

リボルバーが回転をはじめる。

「発射！」

爆煙でムボの姿が消える。

「もうちょっとよく考えなさいよ」

A S T粒子砲が爆煙を切り裂く。

「頭部直撃！損壊率50%！」

エレクシエストの顔面がたたれたようになっていた。

「可動に問題はありません！」

「ムボ、第三支部到達まであと3km！」

「ください！」

「、投下！」

清輝が十一型に放った投げ槍が投下された。

「いきます！」

は顔の無い首に直撃した。

「ください！」

「、投下！」

柄の長い斧が投下された。

「ていやああああ！」

エレクシエストはその四脚で高々と跳躍するとムボに向かってを振り下ろした。

「いけえええええええ！」

血しぶきが空を染める。

柄は折れていた。

「、、ムボに取り込まれます！」

埋め込まれるように と が吸い込まれていく。

「切れた部分を修復していきます！」

ムボの顔の無い口が開かれた。

と がエレクシエストに放たれた。

「左肘部、完全に切断！」

「あと2km！」

「ください！」

「、投下！」

銀色のマグナムが投下される。

エレクシエストが を再び投げつける。

「どうしようって………」

「なるほど。でも、うまくいかなかったらお終いね」

再び口が開かれる。

右手で
を構える。

「当たれ！」

モニターが砂嵐で見えなくなる。

「ムボ、消滅！」

「搭乗員の回収を自衛隊に頼んで。お疲れ様」

「一体、武器ってどのくらいあるの？」

「レオムのレールガンも含めれば25種類」

「すごいんだね！」

「全部見たい？」

「うん！」

何十メートルもあるような武器が整然と並べられていた。

「左から、
でこっちは遠距離用武器で右から
μ。

作られた順番にギリシャ語で並べただけなんだけどね」

「全部使うの？」

「戦況とパイロットの好み次第だからわからない。」

「ちなみにはまだ一度も使われてないわ」

「こんなに短いんじゃないね」

せいぜい二人の身長を足したほどしかない刃渡りを見て志隆が言う。

「もし、パイロットになったら使ってあげてね」

「同じ、小さいもの同士？」

美月がむっとする。

「どうぞ小さいですよ」だ

「怒つた怒つた」

「おこつてまうせうん」

「やっぱり怒ったところもかわいいや」

一気に美月の顔が赤くなる。

「い、いきなりそ、そんなこと、い、言わないでよね！」

「照れてるんだ」

多少むすつとしながら美月が言い放った。

「ほ、ほら、志隆もう帰んなきゃいけないでしょ！ほらほら！」
「はいはい」

第五話

第五話 青

「誰かドッキリ看板出してくれないかな」

「これのことか？」

「なんであるんだよ」

しかたなく小暮が看板をカバンにしまった。

今日は珍しく、二人だけである。

「篠崎と委員長は？」

「風邪だつてさ。久々にゲーセンでも行くか？」

「行く行く。最近格ゲーやってないし」

「なあ」

「何？」

二人はドリンクコーナーに二人だけで座っていた。

「何でドッキリ看板、出して欲しかったんだ？」

テストで最下位取ったときもそんなこと言わなかったくせに」

「なんか、嘘みたいになんか、っていうのかな。」

そいうのみたいだから、落ちる前に思い出で終わって欲しいな
なんてさ」

「似合わないセリフなんか使っちゃって」

氷が鳴った。

「風流だねえ」

「どこがだよ」

小暮が残っていたコーラを飲み干した。

「で、嘘みたいに幸せなこと、って何だよ」

「外人の女子高生美少女と、年上で年下の美少女と、欲求不満そうな美少女に告られた」

「はぁ~~~~~!？」

思わず小暮がのけぞる。

「ついにお前の脳もそこまで」

「そっちかよ。ってか小暮も人のこと言えない？」

「確かに」

「納得、いてっ！」

小暮が志隆の頬をつねる。

しかも爪で。

「爪はないだろ爪は」

「志隆クラスだとこれくらいしなないと」

「一体何のクラスだよ」

志隆は頬をさすりながら話す。

「ほんとにほんとなんだって」

「じゃあ、連れてこいよ。そいつら」

「それは・・・」

「やっぱりな」

「それはそうと・・・」

志隆がポケットをまさぐる。

「金百円しか無いのわかって何で来たんだろ」

「条件反射・・・と言つとくか」

「ごめん・・・それは無理」

「やっぱり・・・」

「防衛庁にも実際は存在していないはずの防時局の人間が民間人と接触することは禁止されているの。」

もちろん、志隆は大丈夫だけど」

「そうだよね・・・」

「でも、二つだけ方法があるわ」

美月が志隆の方を見る。

「一つはこのパイロットまたは」

「無理」

「でしようね。多分。」

もう一つは死生物が来た直後に私達とその人を引き合わせることに
反応だけは見ることができると、その後本人は当たり前前だけ
覚えていないわ」

志隆が考え込む。

「別に無理して引き合わせなくてもいいか」

「それが懸命ね」

「そういえば僕、転校しなきゃならないってレナに言われたんだけ
ど……………」

「ああ」

美月がパソコンを起動させた。

「どの高校がいい？」

「……偏差値って、どのくらい？」

「大丈夫。52くらいだから」

志隆の顎が外れた。

「無理……なの？」

静かにうなづく。

美月がため息をつく。

「正直言ってそこまで無いとは思わなかったわ。」

「……わかった。」

あんまりやりたくないけど試験の監督官、私がやるから。
寝ているふりをしているうちにカンニングしまくって」

「ほんとに助かるよ……でも……………」

「でも？」

「あいつらはどうするの？」

美月が静かに志隆に視線を移した。

「まさか……………」

「二人は大丈夫だけど……残りの一人がちよっと……………」
美月が頭を抱え込む。

「その人、カンニングに動じないタイプ？」

「・・・多分」

「なら、志隆を見せてあげるか他の二人を見させるかどっちかさせて」

「わかった」

美月が再びため息をつく。

「いろんなところに根回ししなきゃならないわね・・・」

「・・・がんば」

「とにかくおとう・・・おじさんとおばさんに出来るだけ早く理由をつけて。」

他の三人は親に転勤なりなんなりさせるから」

「え？ああ、わかった」

「あ、あのさ・・・おじさん。おばさん」

「何だい？」

「一人暮らし・・・はじめていい？」

二人の動きが止まる。

「どこでだ？」

「吉良風市・・・っていうところ」

「知らないわねえ」

「何のためにだ？」

志隆のおじさんと思わしき人が少し厳しい口調で言った。

「いつまでも、おじさんとおばさんに甘えてられないなあ・・・って思っ」

「何もまだいいのに。志隆くん、まだ十七でしょ？二十歳にもなっ」
てないのに」

「まあ、話を聞いてみようじゃないか。で、高校はどうするんだ？」
「今通つてるところはやめる。でも、そっちの方で編入試験受けるよ」

二人の顔色が変わる。

「・・・志隆が行けるところなのか？」

「・・・うん。行かなくちゃならないんだ」

「・・・そうか。お前は本当に隆弘とそっくりなんだな。行っていいぞ。お前が決めたなら」

「ありがとう。おじさん」

「おじさん、優しいのね」

「うん。兄弟だからね」

「三人の都合はついたわ。編入試験の根回しも完了。

そういえば住むところって、まだ考えてないわよね？」

美月が少し遠慮がちに言った。

「そういえば、そうだね」

「なら、本部に空き部屋が一つあるんだけどそこ使わない？」

今は物置になってるけど、片付ければ一人暮らしには十分のスペースになるはずだから。

もちろん、地下だから日当たりはよくないけど」

「うん。そこでいいよ。」

・・・そういえば気になったんだけど、引越しか転校とか、僕が断ったらどうするつもりだったの？」

少し美月が応答に困る。

「本当に無理な場合は気絶させてでも運ぶわ」

「怖っ」

「そういうところだから。」

で、荷物は一回ここに全部運んできてもらった後に、四次元ゲートで本部の引越しと一緒にするから。

本部の引越しは明日だから、荷物は今日中にまとめておいて」

志隆が飛び退く。

「あ、明日！？」

「やっぱり急よね」

「大丈夫。何とか間に合わせるよ。」

「じゃあ、早速帰って支度しなきゃね」
「がんばってね」

「こんっちは！」

「ご苦勞様、早速持ってって」

「はいっ！」

志隆が宅配員に説明をする。

「これが一番気をつけて運んでください。いろいろCDとか・・・」

その宅配員の顔には見覚えがあった。

「清輝！かりん！」

二人が慌てて志隆の口をおさえる。

「どうかしたの？」

「いいえ、何でもないです。お客様が荷物につまづきそうだったので」

「志隆くん、しっかりしなさいよ」

二人が志隆の口を解放した。

「俺達は今、赤の他人なんだからな」

「う、うん。わかったよ。」

「じゃあ、これを一箱気をつけて運んでください。後は一回ぐらい落としても構いません」

「はいっ！」

「しばらくおじさんたちともお別れか」

「何しめじめしてんだよ」

志隆は窓を全開にしていた。

「いいんじゃないの」。これからかなり長い間会えなくなるんだし」

「それにしても二人とも、免許取ってるの？」

「そ、そんなわけないだろ！なあ！」

「う、うん。そうよね」

「・・・・・・・・」

「あはははははははははは」

「・・・・・・・・」

「はははははは・・・・は・・・・」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・

「どうするの一体！」

「だ、大丈夫だって！今まで一回も事故ったこと無いから」

「何回運転して？」

「い、一回・・・・・・・・」

清輝を揺らし始める。

「降ろしてよ！今すぐ降ろしてよ！」

「そ、そんなにやったらお前！あっ！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「で、誰が原因なの？一体？」

美月の眉はつりあがっていた。

「清輝」

「志隆です」

「清輝です」

三人がほぼ同時に言い放った。

「多数決の結果、清輝に決定」

二人がまばらな拍手をする。

「荷物、ここから第三支部まで全部一人で運びなさい！」

「そ、そんな・・・・・・・・」

「こんなことになるなら、私が最初から運転すればよかった」

「大丈夫だよ。木にぶつかったただけなんだし」

「そうよね〜。木にぶつかった『だけ』よね〜」

「……………」

「わかったよ。ほんとに僕が悪いんだから。」

本部の引越しの手伝いと物置の整理、僕がやるよ」

「その一言を待つ・て・た・の」

美月がスキップしながら部屋を出て行った。

「は、はめられた……………」

「あ……………」

志隆はダンボールの谷の中で布団もしかずに寝転がっていた。

「第三支部から本部まで地下音速移動機で一時間立ちっぱなし、本部に届いたコンテナから荷物を出すのに一時間、

物置の整理に三時間……………」

誰かが部屋の中に入ってきた。

「これ…………神崎さんが食べなかったケーキ、持って来ました」
長い青髪の子だった。

「あゝ、立ち上がるのもめんどくさいから口移しで食べさせて」
年甲斐もなく口を限界にあける。

入った。

むせた。

「げほっ、げほっ、げほっ……………」

「み、水です」

一気に飲み干す。

「は……………」

それにしても、冗談ぐらい分かってよ」

「冗…………談？」

「そ。冗談。本当に口移しするなんて思わなかった」
軽く、よく飛ぶ音が部屋に響いた。

「最低です。そんなことして人を使って……………」

女子は一気に走り出した。

「ちょ、ちよつと！」

ドアが閉まった。

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・

「初めて・・・・・・・・ぶたれた」

第六話

第六話 茶

「英子をキレさせたの!？」

志隆はレナと部屋で話していた。

「ああ。パイロットの人だったんだ」

「パイロットの人だったんだ、じゃなくて英子をどうやってキレさせたの？」

方法がわからないんだけど」

「そっちかよ」

思わず志隆がツツコム。

「えーっと、冗談で、口移しでケーキ食べさせて、みたいなこと言ったらほんとに実行しちゃって」

「へー、口移・・・は!？」

レナが志隆の襟首をつかむ。

顔が近い。

「ほんと？」

「ほんと」

「ほんとにほんと？」

「ほんとにほんと」

「ほんとのほんとにほんとでほんと？」

「ほんとのほんとにほんとでほんと」

疑いの色が消えない。

「信じてよー。自分が好きな男なんだか」

「あ~~~~~!」

レナが志隆を勢いよく揺さぶりはじめた。

「なんで英子まで参戦してくるのよバカ~~~~~!」

「そおんなあにいふうったあらあくうびいがあ!」

「ああごめん。勢いで」

「そおんなあことおいいいうなあああはあやあくうやあめえてえ
！」

星が飛んでいた。

「ひいどおいしいよぉ」

「大丈夫!？」

「みいてえわあかあらあなあい?」

「・・・?」

人が動いていない。

「やけに誰も声かけてこないと思ったら・・・」
そのまま格納庫へと歩き出した。

「遅い」

時野はやはり、無表情で立っていた。

「みんなが止まってるのに気が付かなくてさ」

「鈍感」

何も感情を含めずに放たれる言葉ほど重いものは無い。

「乗って」

「そつえば、今日は止めるの遅いんだね」

「まずは前回の復習から。」

前進、後退、それと腕を動かすにはどうすればいいか

「聞いてないし」

「早くやって」

前回やった動作を行った。

「こうだね」

「今回は動力源について。」

エレクシエストの動力源は背部にある主電源と、それぞれの足の
ふくらはぎの裏にある予備電源。

主電源は連続1時間の操作が可能。破壊、または故障すると予備

電源に切り替えられるわ。

予備電源は連続1分の操作が可能。主電源を破壊されたらほぼ終わりと考えていいわ。

あまり使われることは無いけど、主電源の出力を最大にして操作することも可能。そのレバーでね」

そう言つて、一番隅にあるレバーを指差した。

「動きはデルのときとほぼ変わりなくなるわ。5分しかもたないけど」

「デルのときとほぼ変わらない・・・？」

相変わらず、志隆と目を合わせないまましゃべった。

「第一型死生物、デル。」

14年前に突如ニューヨークへ出現。

米軍戦車の砲撃約1万発、ミサイル3千発、核兵器12発によってニューヨークの町と共に睡眠状態に入る。

そのせいでアメリカは今でも昔の面影も無いほどすたれているわ」

「ちよつと待つて！14年前つて！」

「あなたの家族はデルとアメリカに殺されたわ」

僕の14年前は無いほうがよかった。

14年前のアメリカ旅行のときに起きた大地震。

僕をのぞく全員が、死亡。

それから僕はおじさんとおばさんに引き取られることになった。

・・・涙は出なかった。

ただ忘れたかった。

現実から逃げた。

手首を切った。

腹を刺した。

学校から飛び下りた。

痛かった。

ものすごく痛かった。

でも、死ななかった。

死ねなかった。

忘れられなかった。

何も・・・変わらなかった。

現実が変わらないなら、自分を変えようと思った。

最初は大変だった。

自分を作るということが何より大変だった。

そして僕は「俺」から「僕」になった。

そしたらまともになった。

みんなは昔を忘れてくれたし、僕も昔を忘れた。

楽しかった。

嬉しかった。

おじさんとおばさんがあの二人に見えた。

でも、全てが自分でない気がした。

何か重要な部分が欠けていた。

そのうち、自分がわからなくなった。

僕は「僕」なのか「俺」なのか。

今は多分、「俺」には帰れない。

帰らない。

そして、そんなことをしているうちに現実がいきなり追いついた。

「俺」が目覚めてしまった。

あんなことにはなりたくない。

「僕」に戻りたい。

「キラカゼ上空1000mにAST反応！

第十四型死生物、ノトです！」

そうか、ここ、指揮室なんだ。

「平塚清輝はエレクシエストに搭乗し、待機！」

「空中・・・か」

「対空ミサイル発射開始！」

「敵の外的損壊0！」

「対空ミサイル発射停止！」

「地下ゲート開放完了！」

「四次元ゲート完了！」

「合図を！」

「エレクシエスト、投下！」

どうでもいいや。

「ノト、エレクシエストへ突撃！」

「音速、超えています！」

「ぐあつ！」

「頭部直撃！損壊率76%！」

「よしせ!」

「投下！」

エレクシエストなんて。

「ノト、音速滑空開始！」

「でいあああああああ！」

「頭部接続部完璧に損壊！頭部信号無し！」

デルなんて。

「ノト、音速滑空開始！」

「このやろつこのやろつこのやろつこのやろつこのやろお
おお おおお！」

「搭乘室1m上直撃！危険です！」

「撤退！」

7
 •
 •
 •
 •
 •
 •
 8

「撤退して！」

「・・・やなこつた」

お父さんなんて。

「エレクシエスト、ノトを素手で拘束！」

「肘部、耐久限界つ！」

「きえろおおおおおおおおお！」

お母さんなんて。

「ノト、消滅」

お姉ちゃんなんて。

「お疲れさん」

「そりやどうも。おかげでこっぴどく叱られたけどな」

清輝がレナから渡された飲み物を飲んだ。

「・・・ぶっ！」

清輝が飲み物を吹き出すと共にレナの顔がにやける。

「なんだよ・・・これ」

「黒ゴマ粉末ジュース」

見ると、下に少量の沈殿があつた。

「健康に良さそうなもの作りやがって」

「ツツコムのはそこ?!」

「もちろん。外道万歳だ」

清輝は結局渡された黒ゴマ粉末ジュースを飲み干した。

「ところで、志隆はどうしたんだ? いきなり」

「全然」

「お前、好きなんだろ? あいつのこと」

「近すぎるからわからないこともあるかもね」

「・・・どうだか」

エレクシエストはまだ首から上が無い状態だった。

「それよりこれ、見たことある?」

レナは清輝に「報告書」と書かれたものを手渡した。

「・・・死生物の報告書・・・!!」

清輝の目が一気に開いた。

「どう思う?」

「どう思うも何も・・・ありえないだろ?」

明らかに動揺している。

「国と防衛庁が決めた話。私達にはどうにも手出しできないわ」

「それにしたってこれ・・・防時局はまだやる必要があるっていう

のに」

「決めたものは決めたもの。逆らえないわ。上には清輝がわざと視線をずらして言った。」

「お前・・・そういう風に変なところだけ冷静になるのやめろよな。お前が嫌いになる」

「・・・そう」

「乗らない」

「なぜ」

「乗らない。乗りたくない」

「今さら家族を殺した犯人の中に乗れないって言うの」
搭乗室へと続くブリッジに二人はいた。

「そうだよ。当たり前だろ？」

「当たり前でも、嫌でも、憎くても乗って。」

「この技術はあなたにいずれ必要になることなの」

「前から思ってたんだけどさ、何のためにこんなことするの？」

「あなたに必要なだから」

「なんでわかるんだよ」

「徐々に声があらがっていく。」

「知っているから」

「なんで知ってるんだよ」

「知らないわ」

「なんで知ってるのかを知らない？」

「そうよ」

「何言ってるんだよテメェ！！」

時野が胸倉をつかまれて壁に叩きつけられた。

「そんなことあるわけねえだろうがよ！！」

「・・・」

顔の色一つ変えずに志隆を見ている。

「なんとかいえよこのクソ女！！」

「元の自分に・・・戻っていいの」

志隆が思わず手を離れた。

「そんな・・・こんなこと・・・いやだ・・・戻りたくない・・・」

志隆が震えていた。

「大丈夫。まだ一時的なはずだから」

「何で知ってるの？」

「・・・知らないわ。
乗って」

時野は何事も無かったかのように振舞う。

時を戻したかのように。

「・・・うん」

志隆はゆっくりと深呼吸をした。

「これは今、デルじゃない。これは今、デルじゃない。これは今、デルじゃない・・・」

静かに、腰掛けた。

「主電源、予備電源の継続時間と出力増幅方法は言ったわね」

「うん」

「次は四次元ゲートについて。

知っているとと思うけど、四次元ゲートは遠ければ遠いほど世界最速の移動手段であり、防御の要としても使えるわ。

今現在には指揮室からの制御でしか開くことが出来ないけど、搭乗員が直接すぐに開いたり閉じたりする技術も開発中。

多分、一年後ぐらいには出来ていると思うわ。

四次元ゲートに入って出てこられる唯一の物体は死生物と、死生物と密着している物体のみ。

ちなみに、無限に広がる空間だからゴミ捨て場としても利用できるわ」

「ゴミ捨て場？」

「将来的にね。」

今日はここまでにしておくわ」

時野が搭乗室から出て行く。

「・・・これだけ？」

「はつきり言って一言で立ち直るとは思ってなかったから、考えて無かったわ」

「見直した？」

「知らないわ」

第七話

第七話 桃

「なあ、これわかるか？」

「さっそく来ましたか」

四人は空き教室で転入試験を受けていた。

「でも、よく受ける気になったね」

「俺がいなくなるとお前らが」

「一人だけ仲間外れが嫌なだけでしょ？」

篠崎が痛いところをつく。

「これ使えばわかるよ」

「さすがだ心の友よ。誰かとは違い」

小暮が教科書をぶん取った。

「そういうことやっちゃっていいの？」

鈴木が後ろを振り向く。

「いいんだいいんだ。」

こんなチビを監督として選んだ高校が悪いんだからな
わずかに目がつりあがった。

「い、一応、寝てても悪口はいけないと思う・・・よ？」

「・・・お前の口から出る言葉じゃないな。」

「知り合いか？」

「違う・・・よ」

小暮はわずかに疑いの色を漂わせた後に再び作業に入った。

「むっっ」

「そんなに怒らなくてもいいじゃん」

二人は防時局の無機質な廊下を歩いていた。

「だってチビ呼ばわりされたのよ？」

「いや、それはじじ・・・・・・・・・・」

美月がにらみつけた。

「まあ、四歳年上の寛大な心で許してあげなよ」

「・・・それもそうね。私は寛大なんだから」

志隆は次に言いたい一言をなんとか我慢した。

「そういえば、時野って一体何者？」

「何で名前知ってるの!？」

美月が即座に聞き返した。

「いや・・・本人に聞いたか」

「本人に聞いた!?!まさか!?!」

美月はいきなり先ほどより素早く言い放った。

「ありえない・・・・・・・・いやでも・・・・・・・・まさか・・・・・・・・・・」

「聞こえないよ」

美月が上目遣いで志隆を見た。

「あの娘、話したとき一度も無いの」

「いや・・・それってわざわざその秘技を使って言うことじゃ・・・・・・・・・・」

・・・・・・・・

美月はいかにも「?」と言うように首をかしげた。

「秘技?」

「卑怯。ものすごい卑怯」

「何が?」

志隆が思わず後ずさりする。

それに合わせて美月が前に出る。

「その・・・さ、幼すぎ」

「・・・言わなくてもわかるはずだ。

「いや!あの・・・・・・・・そういうことじゃなくてさ・・・・・・・・・・」

別にロリコン・・・・・・・・とかそういうのは一切関係無しに、そういう

ことされるとさ・・・・・・・・あの・・・・・・・・・・

かわいすぎて・・・・・・・・死ぬ」

「くうあああああ！もう何言っちゃってんだよお前！憎いぜ！憎すぎるぜ！！」

「・・・何やってんの？天井なんかに叫んで」

清輝はその体勢のまま首だけ横を向いてレナを見た。

「・・・バカらしい」

そのまま後ろを向いて歩いていった。

「でもさ、お前それで大丈夫だと思ってるかもしれないけどさ、あいつ、傾きかけてるぞ」

「ウソ！！」

レナが清輝の上から廊下を覗き込んだ。

「な？」

あの後、何があったかは知らないが、二人の顔は双方共に赤くなっていた。

「ヤ、ヤバイ・・・」

「お前もそろそろ本格的に攻めに行ったらどうよ？新参者も現れたんだしさ」

無言でその顔のままそっぽを向いている。

「私も本格的に・・・」

つばを飲み込む音が異様に大きく聞こえた。

「・・・体でもやる気か？」

「・・・覚悟は無いとね・・・」

「・・・マジかよ」

二人が話しながら部屋に入っていた。

「あの先は美月指揮官の私室・・・」

「チビの権限がないと入れない、ってことか」

レナが目を見開いて清輝を見た。

「バカ！何言ってるのよ！聞かれたらどうする気！？」

「んなもん、全員が黙認してることだろ？」

言ったところで俺達をクビにはできないからな」

「それはそう・・・ん？」

体（特に腕の付け根辺りが）年上そうなポニーテールの女性が部屋に入っていった。

「新藤由佳里さん？」

「なんであいつが許可無しで？」

「・・・あ」

由佳里は顔を真っ赤にしながら出てきた。

「あちゃー・・・」

「まずい！」

由佳里がこちらを向きかけたのに反応してレナが清輝の襟首を掴んで後ろに引っ張る。

後ろから攻撃されたのに反応して清輝が後ろを振り向く。

勢い余って清輝の全体重がレナにかかる。

そして。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「お前達・・・いつから・・・そんな関係になったんだ？」

二人が由佳里の一言に反応した。

「事故です！！断じて事故です！！」

由佳里が手で待ったをかける。

どこか誇らしげに見えた。

「いや、若いことはいいいことだ。

交通規制はしいておく。安心して楽しみなまえ。はっはっは」

高笑いをしながら由佳里は去っていった。

「・・・なさいよ」

「は？」

「どきなさいよ！手！」

清輝の両手はレナの両腕の付け根から10cmほど下にあった。

「わりいわりい。いろいろあったせいで気が付かなかった、ということにしておいてくれ」

「そんなこと言う暇あったらさっさとどかしなさいよ！」

「一応イチモツだから」

清輝の両足を結んだ線の中点に、レナの靴がめりこんでいた。
そのまま清輝がレナの上に倒れた。

「くそ重！！どきなさいよこの～～～！！」

「・・・はあ」

青春のため息・・・だろうか。

「考えてみれば、僕が一つ返事をするだけで手に入っちゃうんだよな。」

『おにいちゃんっ！』とか『先輩っ！』とか呼ばせることも可能になるんだよなあ。」

場合によっては『ごしゅじ・・・・・・・・・・』

・・・何考えてるんだ。僕」

人は案外、見かけと違うことを考えているものである。

「このままじゃ、芯の芯までロリコンの一単語で埋め尽くされちゃうじゃないかあ～～～！」

・・・鬱だ・・・・・・・・・・」

照明の色が変わった。

「来た！」

「キラカゼ上空約750m付近にAST反応！」

第十五型死生物、キロ！」

簡易折りたたみベッドから飛び下りる。

「涼白かりんはエレクシエストに搭乗し、待機！」

「かりん・・・か！」

志隆がようやく指揮室にたどり着いた。

「対空ミサイル停止！」

「レオム、出撃可能です！」

「レオム、出撃！」

一ヶ月前の懐かしい機体だった。

「レナ、任せたわ」

「わかりました！」

レナの声が上から聞こえてきた。

「キ口の近距離戦闘以降と共に二機で叩くわ！

、投下して！」

「、投下！」

三連のリボルバーショットガンがあらわれた。

「珍しいですね。作戦展開するなんて」

「たまには、ね」

「キ口、以前上空を旋回中！」

モニターの衛星映像には胴体と首が抜け落ちたような不思議な白い鳥が飛んでいた。

あごが異常に大きい。

「エレクシエスト、を装備しながらで攻撃して！

、投下！」

「、投下っ！」

片腕を覆うほど巨大な銃があらわれた。

「いつけ！」

衛星映像からキ口の姿が消えた。

「レーザーを見切っています！」

「あの距離で、撃つてから！？」

「高度、下げ始めました！690！640！580！510！440！350！250！140！来ます！」

エレクシエストの映像にモニターが切り替わった。

巨大な顎がをとらえている。

「機体損壊無し！」

「レナ！」

「充電完了！冷却装置準備完了！いけっ！」

レールガンは見事にキ口の翼の付け根をとらえた。

「キロ、戦闘続行中！」

「ちっ……」

レールガン収容後、戦闘に移ります！」

「作戦変更！接近戦に移るわ！」

「くださーい」

「、投下！」

薙刀があらわれた。

「出現に伴い、キロ再び上空へ引き返します！」

「での攻撃はじめて！」

衛星映像には残像しか写っていなかった。

「レールガン収容完了！」

「ロアフで空中戦闘に入って！」

「了解！」

レールガンを収容したビルの地下から下がりぬかれた飛行機が出てきた。

ビルの屋上に立っていたレオムがそれに固定されて飛んでいく。

「空中戦闘用武器、装備！」

「キロ、レオムに向かっています！」

「応戦後、無理なら取り付いて自爆して」

「了解！」

「えっ！」

志隆が発した一言は誰の耳にも受け流され、意味も無く反響した。レオムが持った二丁のマシンガンから弾が発射されるが、それに見向きもせずに進んでくる。

レオムがキロの尾に取り付いた。

「自爆装置作動！」

「ええっ！！」

リーダー上から一つの点が消えた。

「……」

「キロ、以前旋回中！」

「、弾切れした」

「落として！回収するわ！」

「、回収！」

レナが入ってきた。

「あれ？死んだんじゃ・・・」

志隆に見向きもせず空いていた席に座った。

「キロ、高度下げ始めました！560！440！310！170！
来ます！」

エレクシエストがキロに身構える。

「前右脚部直撃！エレクシエスト、起立不能！」

「あたしを怒らせちゃって・・・どう料理してあげようかなあ？」

「キロ、来ます！」

エレクシエストは後ろから来ていたキロに対し、後左脚を軸にした豪快なフルスイングを行った。

「キロ、消滅！」

「なんで生きてたの！？」

「死んでたほうがよかった？」

二人は格納庫にいた。

「そうじゃなくて、自爆したんじゃ・・・」

「あれ？言わなかったっけ？レオムは遠隔操縦だ、ってこと」

志隆はその場に力無く座り込んだ。

「なんだよもう・・・」

「心配・・・してくれてたの？」

「当たり前じゃん」

レナは驚きの表情で楽な正座のようなものをしている志隆を見た。
「指揮室に向かっているとところは子供みたいだったけど？」

「・・・子供だもん」

まるで美月のようにすねた。

「うわぁ、そっくり!」

何の前ぶりもなく、志隆とレナの唇の距離は無くなった。

「・・・え?」

「早く満塁にしたかったから。もちろん三番はセンターフライってことで」

「何言ってるの?」

「さぁ〜ね」

第八話

第八話 橙

「やっぱりここでも、もんじゃなんだね」

前に来ていたところとは違う匂いが漂っていた。

「しかし、今月二回も震度六強の地震があつたくせに被害少ないよな」

「予測施設でもあるんじゃないの？」

「ここでも、やはり同じような物を頼んでいた。」

「日本には、まだ無いはずだけど？」

「地震大国のくせに・・・か」

もんじゃの中に入っていたキャベツを小暮がつまみ食いした。

「そういえば、みんなは何でこっちに來たの？」

「親の転勤」

「親の転勤」

「高飛び」

「・・・は？」

リズムを乱すようなことをよく言えたものだ。

「お前ら知らないと思うけどさ、俺んち一年ぐらい全部止められてたんだよ。」

で、何かどうこうやってるうちに、キラキラ荘とかっていうところの家賃二千元だ、っていう理由だけで來た。」

「キラキラって・・・しかも二千元・・・かなり怪しいわね」

「家賃払うのに諭吉さん出さなくて済むなんて、すごいね。そこ」
篠崎が野菜を切ろうとした瞬間にありえない音がした。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

何回切ろうとしても、結果は同じだった。

「凍ってる・・・これ」

「あ、うん。そう」

「やっぱり・・・・・・・・」

二人はまた格納庫で話していた。

「家賃が五桁いかないって聞いたから、そうだと思った」

「五桁いつてないの？いいなあ。あたしも住みたいなあ」

レナが手すりにつかまりながら足を上下に揺らす。

どこか、あどけなさの残る仕草だった。

「そつえば、レナってどこに住んでるの？」

「夜這いでもするつもり？」

「ち、違うよ！」

志隆が全力で否定した。

「どうせここに住んでるから、しようと思えばできるんだけどね。もちろん逆も」

「逆って・・・・・・・・」

しばらく格納庫の中が主電源換装作業の音のみになった。

志隆の目の中に知人が映った。

「清輝？」

そこには汗を流しながら、しきりに何かをいじくっている清輝の姿があった。

「パイロットじゃなかったっけ？」

「あいつはパイロット兼整備員。あれはあれで、結構大変だったりするのよね」

清輝に由佳里が話しかけていた。

「あるとき入ってきた人だ。名前、何ていうの？」

「新藤由佳里さん。見てわかるとおり、ここで一番女性な大人」

志隆がレナを見る。

「は、量らないでよ……」
恥ずかしそうにレナが隠す。

「いや、そんな気全然無いよ」

「……あたしは眼中に無いってことか……」

「あ、あるよ！ありまくりだよ！」

勢いで放ってしまったことは、レナを見た志隆の顔でわかった。

「じゃあ、一ヶ月越しでOKってこと?!」

「いや、そ、そういうわけじゃ……」

レナが再び肩を落とした。

「やっぱり、あの体型には勝てないか……」

「あの、ってどの?」

レナは格納庫から出ていった。

「傷つけちゃった……かな?」

「どうした志隆」

清輝はコーラと缶コーヒーをお手玉しながら向かってきた。

「それ、大丈夫?開けたとき」

「……やべえ」

清輝が意味も無く一回転してかつこよくコーラを取る。

そして、腫れ物に触るように静かに床に置いた。

「大佐、どうしましょうか」

「ここは無難に開けて、液体が触れる前に手を引く。

これぞベストだ」

「……Mission Impossibleを私に?

無理です大佐」

志隆は少し力をこめて清輝の肩を叩いた。

「大丈夫だ。お前なら出来る。

自分を信じるんだ。お前に出来ないことは、私との縁を切ること
だけだ」

「大佐……」

二人は固く抱き合った。

「さあ、やるんだ！今こそ！」

「イエッサー！」

プルタブを引いた瞬間。

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

余りに振りすぎたせいなのか、志隆の顔面に見事に全液命中した。

「大・・・佐・・・」

「わかった。だがよかったじゃないか。

お前にはできることが一つ増えた」

「大佐 ！！」

「目、しみる」

志隆は目をかなりの速度でまたたかせながら清輝と廊下を歩いていた。

「ま、おごつてもらったと思えばそれで済む話だ」

「あんまり味わえなかったけどなあ」

志隆は口のまわりを舐めた。

「無し・・・か」

「まあ、それでも飲んで元気出せって」

志隆は渡された飲み物を外装も見ずに飲み始めた。

そして、嘔いた。

「なんでブラックなんて買ってるの？」

「ああ。あいつが頼んできたやつだったからな」

「あいつって？」

「巨乳」

「ああ」

志隆は嘔きだしたものをしばらく見たあと、また歩きだした。

「で、なにしてたんだ？あんなところで」

「レナと話してたんだけどさ、何か傷つけちゃったかなあ・・・って」

「女心は秋の空・・・ってか？」

清輝は天井をながめながら歩きだした。

「他にもガラスでできてる、とかあるけどさ、そんなロマンチックなものなわけねえじゃねえかよ。」

せいぜい、紙だろ？一滴垂らせばすぐ染まっちまうような、さ」

「レナの心も、英子さんの心もそんなののかなあ」

「英子？あのメガネ？」

少し清輝が関心を示す。

「うん」

「そいつまで参戦してきたのかよ。初耳だな」

「参戦はしてないと思う。口移しでケーキ食べさせられただけだし」

「それ・・・2よりやばくないか？絶対」

志隆は三十年も前の記憶をたどるようにして話し始める。

「最初は本当に冗談半分で言ったことだったんだけどさあ」。

なんか真に受けちゃったみたいで。

しかも、『なによ！人のこともてあそんで！』みたいなことで怒らせちゃったし」

「まあ・・・簡単に言つと原因は勘違い、ということだな？」

「そういうこと」

「まあ、謝っておいたほうがいいと思うぞ」

「でも、なかなか会えなくて・・・さ」

飲みかけのコーヒをまわしながら言った。

「部屋、案内してやるか？中がどんなことになつてても知らないけどさ」

「着替えてたちするとんでもないことになりそうな気がするから、やめとく」

「そうか」

ここはカモフラージュ用の廃墟ビルの屋上・・・だろうか。
由佳里が階段をのぼってきた。

「先輩っ！」

美月が少しべそをかきながら由佳里に飛び込んだ。

「その一言を聞いたら、他のやつらはどう思うだろうな」

少しずつ、美月がしゃくりはじめた。

「先輩につ．．．言われて．．．作戦立てたら．．．失敗しちゃって．．．結局かりんに．．．まかせつきりになって．．．」

「初めから全て成功していたら、お前は神だ。いつも言っていることだろうが。」

それに、最近どうした？来るたびに呼んでいるじゃないか。

もう一回言っておくが、今、お前は私の上に立つ身分になっているんだぞ？」

美月が顔を由佳里の胸に押し付ける。

薄く、色がにじんだ。

「だって．．．だって．．．」

「わかっていても泣きたくなる．．．か。」

確かに、いつも気張っていては疲れるからな」

由佳里が静かに美月の頭をなでる。

「．．．子供扱いしないでください．．．」

「強情張りは泣き目も変わらず．．．か」

「志隆とはどうだ？進展はあったか？」

美月はとうの昔に泣き止み、二人は手すりのない屋上から足を出していた。

「何も無し．．．です」

「正直なやつだな。お前も」

兵装ビル群が夕日を浴びて黒く染まっていた。

「ライバルが一人か、二人か、三人になっているのに．．．か？」

「一人？」

「レナが清輝との仲を築き始めたからな。廊下で押し倒されていた」

「廊下．．．ですか！？」

どうやら、本当にそう思っているらしい。

「事故かもしれないが、あれはあれでなかなかお似合いだからな」

「そうですかね？」

「大丈夫だ。互いが互いを嫌い、という共通点がある」

美月が含み笑いをした。

「意味無いじゃないですか。それ」

「いや。嫌い、ということはそれだけで相手を意識している、ということだ。」

「ということは、きっかけはものすごく簡単かもしれないからな」

「そうですかねえ」

わずかに聞こえる風以外は何も聞こえなかった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………静かですね」

「……………そうだな」

美月が由佳里の肩によりかかった。

「……………どうした？」

「なんとなくです」

「私を男に見立てて妄想か？」

「いくら私でも、失礼にもほどがありますよ」

「キラカゼ内にAST反応！

第十六型死生物、ルエです！」

「……………え？」

「烈那英子はエレクシエストに搭乗し、待機！」

気づけば夜になっていた。

「やばい！」

「行く前に敵の確認をしておけ」

「・・・え？」

クジラのような白に黒の模様が刻まれた体。体に生える八枚の翼。

口から突き出している牙。

そして、体中についている真紅の眼。

美月がイヤホンマイクを取り出した。

「キラカゼ全兵器使用許可！」

エレクシエスト射出許可！」

「了解！」

「・・・フン」

「状況教えて！」

「キラカゼ全兵器停止中！エレクシエストはキラカゼ内にて待機中！」

「待機・・・？」

「詳しくはこれです。モニターに出します」

モニターにルエの姿が写る。

映像だけのためなのか、音も無くミサイルとバルカンが発射される。

エルの眼から何かが噴き出し、白い壁を作る。

爆発もせずに吸収された。

「AST粒子による防御壁・・・」

人間不可侵区域を死生物が・・・か。

ついには神にも成りえたのね。あなたたち」

「では、神を殺す私達は一体何なのですか？」

「殺神を犯す死神・・・かしらね」

「ルエ、再びAST反応拡大！」

ルエの下方にAST粒子砲が放たれる。

「まずいです！ルエの直下は地下音速移動機です！」

「なんですって！」

ルエの下方にぎりぎり入れるほどの穴があいた。

「本部を捨てて、支部に移動しますか？」

「人の代わりはいるけど、本部に代わりは無いわ。」

エレクシエスト、レオム数機によるレールガンでの同時一点射撃による攻撃を試みます」

オペレーター全員の椅子が半回転した。

「しかし！！そ」

美月が手で待ったをかけた。

「今回は1%でも、0・1%でも、0が一億桁続いても作戦を実行する必要があるわ。」

責任なら・・・私が持つわ」

「・・・了解！」

「ルエ、本部侵入まであと1km！」

「目標地点到達まであと500m！以前時速約10kmにて航行中！」

美月はちゃんと組めていない足を組みなおした。

「前方はレオム一機とエレクシエスト、後方はレオム一機・・・」

地下電力施設の見直しをする必要があるわね。

申請できるかどうかは知らないけど」

「レオムって一機じゃなかったんだ」

「あたりまえだろうが」

清輝が出現した。

「いつの間にいたの！？」

「最初からだ。まったく・・・」

それにしても、前代未聞の作戦だな」

「前代未聞？」

清輝は少し唇をかんた。

「レオムを二機以上出撃させる、レールガンを何機も使う・・・」

・
そして何より、確率の低さだ」

「確率？」

「後方からの射撃に惑わせ、前方からの一撃目でなるべくシールドを突き破り、

0・001秒後の二撃目で核を狙う。

レールガンが核に命中する確率、誤差なく射撃できる確率、シールドが50cm以下の確率……

全てを合計したところで天文学的数字に匹敵するだろうな。

それでもやろうとするのも信じられない。

ま、一番現実的なところがそれだな」

「……………」

「もつとも、それまでにあいつがじつとしていてくれるかも不明だが」

「目標地点到達まであと300m！」

指揮室にはいつも以上の緊張感に包まれていた。

頼むからそのままできてね。いい子だから……………」

美月が目を閉じ、手を組んで祈る。

「ルエ、時速20kmに速力上昇っ！」

「まだ誤差範囲内です」

美月の手を握る握力が強くなる。

「時速30！」

「誤差、超えました！」

美月が軽く舌うちをした。

「速度40→70で再計算始めて！」

「了解！」

一気に指揮室がキーボードの音で騒がしくなる。

「時速40！」

「あと200m！」

何も言わずにただキーボードの音が響く。

「時速50!」

「あと100m!」

「時速60!」

「計算完了!転送!」

静かになる。

「転送完了!あと3秒で作戦開始です!」

3秒にも及ぶわずかなる沈黙。

「作戦開始!」

「後方レオム、始動!」

「了解!」

「前方二機、始動!」

「了解!」

「了解!」

床からせり出したレオムのレールガンが発射される。

それに続いて前方から同時にレールガンが発射される。

「AST粒子により、防御!」

「消滅していません!」

「本部まであと400m!」

「回避時間、間に合いません!」

「時速70kmに上昇!」

美月がその場に泣き崩れた。

「そんな・・・そんな・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

何も言えない。

言えるわけも無い。

死が迫っている。

あと、300m先に。

「・・・エ、エレキシエスト、前進!」

「搭乗員！はやまるのはやめなさい！」

「な・・・何もやってないです！！」

「！！」

「！！」

「！！」

不可解なことが、起こりつつあった。

「エレクシエスト、脳波上昇！」

「血圧130まで上昇！」

「催眠状態から覚醒状態になりました！」

「デルが・・・目覚めたんだ・・・」

デルの眼色が青から紫へと変わっていく。

覚醒の証だった。

「ルエ、AST反応拡大！」

ルエが不可侵区域を作り出す。

「逃げなさい！」

「無理っ・・・です・・・開きません！」

音声しか伝わってこなくても、顔が恐怖に歪んでいるのがわかる。

「顎部装甲、内部圧力により損壊！」

デルが口を開けた。

「エレクシエストのAST反応拡大！」

デルから、AST粒子砲が放たれる。

覚醒の喜びか、絶望の象徴か、希望の光か。

何なのかさえわからないものだった。

「エレクシエスト、ルエのAST粒子による壁をこじ開けました！」

デルが不可侵区域に侵入した。

「映像、リーダーでは確認できません！」

何も無い数十秒間が続く。

「ル、ルエのAST反応がなくなりました！」

不可侵区域がなくなっていく。

そこには核を啜えたデルの姿があった。

そのまま体内へと飲み込む。

それだけをするとその場に倒れる。

眼色は元に戻っていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「デルなんかに、倒させられた・・・・・・・・」

第九話

第九話 緑

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

四人はただ学校の屋上に寝そべっていた。

「・・・暇くせー」

「結局、ここでも帰宅部になっちゃったけど、暇なのは相変わらずねー」

「いい部活が無さそうだからだろ？」

「そうだ！」

篠崎がいきなり飛び起きた。

「無いなら作ればいいのよ！部活！」

「無理無理」

あつさりと否定された。

「なんでー」

「部活申請もろもろをやって部を立ち上げたとして、何するんだよ。一体」

「心霊、UFO、UMA・・・・・・・・」

「勝手に一人でやつとれ」

篠崎が再び寝そべった。

「暇だから、志隆とでも付き合っちゃおうかな」

「は！？」

二人が勢いよく開眼した。

「でも、まんざらでも無くない？ルックス、性格もろもろ」

「ありえない跳ねまくりの白髪、顔は・・・まあまあ？」

としても、性格はどう考えてもよくないと思うけど」

「もしかして、志隆と二人きりになったこと無いでしょ」

「そんな機会、無いからね」

篠崎はわざとらしく両手を広げ、やれやれといった仕草をした。

「二人きりになるとね、案外優しかったりするんだよねー。あれで」

「『あれ』呼ばわりはこの際置いておくとして、

志隆が優しい、だと!？」

かれこれ10年間腐れ縁として連れ添ってきた俺でも知らないぞ。

そんなこと」

「それは、相手が男だからでしょ？」

小暮が起き上がる。

「もしや・・・いや待て・・・それは・・・」

「どうかしたの？」

小暮が自分の顎を左手の人差し指と親指ではさんだ。

似合わない仕草である。

「ここに越す前のことだったが、何でも三人の美少女から声がかかったそうで」

「「脳内妄想でしょ」」

「いや、それでもまんざらじゃなさそうだ。あいつ、遅刻することはあるが、センコー以外にウソはつかないからな。

これは腐れ縁という名の絆を信じてみたほうがいいかもしれない」

「そうかなあ」

いびきもたてずに静かに眠っている志隆の口からは、何も語られることはもちろんなかった。

「どう説明するのだ？美月指揮官殿」

美月は防衛庁本庁舎へとやってきていた。

他の長官達も来ている。

「あれは突発的な事故であり、私達には何の説明もできません。不可能です」

「乗っていたパイロットなら少しはわかるのではないのかね？」

「現在気絶しています」

室内に嘲笑が飛び交う。

「そんな肝っ玉の者が世界を救うためのパイロットなどとは、いささか信じがたいものだな？美月指揮官」

「初めて肉体をえぐり出される場面を見てしまえば、そうやってしまうのもいたしかたありません」

「そろそろ、アメリカへと返したほうがいいのではないかね？」

「もともと送りつけてきたのはあちらのほうだ。責任も少しはあるだろうからな」

賛成の声があがる。

「左様。もともと送りつけてきたあちらが悪い。送り返すべきだ」

「しかし、現在死生物は日本にしか出現しておらず、返してしまえばこちらは大変なことに」

「こちらにはレオムがあるではないか。十分であろう」

美月は拳を強く握りしめた。

「しかし、レールガンでの攻撃はもともと倒せる可能性の低い物であり、かと言って多用すると衛星軌道上の物を撃ち落してしまうような自体にも」

「ならば今回、死生物様がわざわざ残してくれた死生物を使えばいいではないか」

「現在、その死生物の収容は完了していますが、腐敗がひどく、現在も進行中で」

目の前にいた一人が机を叩いた。

「我々が欲しいのはエレクシエストをこの国にとどめておく言い訳ではない。」

「そもそも、いつ、また覚醒してこの国を、世界を襲うようなことはなんとしても避けたいのだ」

「ですが、その間まではエレクシエストが死生物を倒すことになり」

「もういい。下がれ。らちがあかない。

あと一回。

あと一回同じようなことがあれば、即返す。わかったか」

「・・・はい」

美月は唇を噛みながら、乾燥している皮膚を歯で剥がした。

「覚醒は準覚醒だった!？」

志隆が格納庫で驚いていた。

「まあ、よくよく考えてみると、エレクシエストが勝手に動いたのと同じくらいの速度だったからな。

A S T粒子砲以外は」

「じゃあもし、本当に覚醒した・・・ら？」

「レールガンで仕留められなかったら、キラカゼ、日本どころか、生物が全て絶滅し、死生物だけの世界になる」

「・・・」

志隆が目目の前のエレクシエストを見る。

何も無いことがあった。

「英子さん・・・気絶してるんだよね」

「本人が知らぬ間にやらかす気か？」

「謝りたいだけ」

「冗談を無視してそう言い放った。

「そうか・・・」

二人が足元を見つめる。

「一体、どんなのを見たんだろうね。

見て一週間も気絶するようなのって」

「出てきた後のことを考えてみると、内臓及びその他の光景。もしくは、想像もできないような何かが起きたんだろうな。

だが、内臓及びその他だとしたら、一週間はほぼありえないな」

「ということは、想像もできないような何か・・・」

「外見からは一切見えるわけのない核を啜っていたんだからな」

再び二人がエレキシエストを見る。

「この中にルエがいるのか……」

「核を傷つけずに飲み込んだとしたなら、そうなるだろうな」
一体二心。

「そういえば、エレキシエストに核はあるの？」

普通に頭とか、飛んだりしてるけど」

「核の探知は不可能だ。」

レナから聞いたと思うが、死生物の構成物質はどの部位でも、どの型でも同じ。

第一、それができたらレオムしかいらないだろうが。

わざわざ、暴走するようなやつを置く必要は無いからな」

「そうだよ。考えてみると」

志隆が飽きもせずエレキシエストを見る。

あごが動いた。

「う、動いた!!」

「それぐらいは動くさ。」

一つも動かないで爆睡することなんて、そうそうないだろう？」

「そうだよ。寝てる……んだからね」

寝ている、ということ意識してみても、安らかな寝顔にはとても見えなかった。

また二人が屋上で足を下におろしていた。

「防衛庁からの召集……」

八年間で一回あっただけのものを一年で……か」

「どんなことだったんですか？」

「覚醒だ」

美月が目を見開く。

「前にもあったんですか!？」

「あったにはあった。」

が、今回のものよりはしごく簡単なものだ。

ただ、パイロットが命令した動きより、2 m前に足を突き出しただけだ」

「理由はどう言っただんですか？」

「理由・・・というより単なる言い訳だが、誤作動、で済ませた。その頃は長官どもも馬鹿勢揃いだったからな。」

ただ・・・。」

そこで、言い出しづらそうに言葉を区切る。

「ただ・・・？」

「その時に、エレキシエストは志隆を飛び越えたんだ。」

そして、自らの足を犠牲にして守った。

一般人なら、ありえないことだ」

「・・・志隆は一般人ではない、とおっしゃりたいのですか？」

「簡単に言えばそういうことだ」

美月が勢いよく立ち上がる。

目には怒りが見えた。

「そんなわけがないじゃないですか!!」

「そうだ。そんなわけはない・・・と信じたい。」

だが、事実は事実だ。お前も冷静に受け止める。情が入りすぎている。

滝綱美月という一人の人間には必要だが、滝綱美月指揮官には必要無い」

「・・・すみません・・・。」

「昔の私にはよくあったものだ。気にするな」

美月がまた屋上へと腰を下ろす。

「死生物の存在意義は、あると思うか？」

いきなり出た大きな質問に美月はたじろいだ。

だが、しっかりと答えた。

「あると思います」

「具体的に、どんな存在意義だ？」

「人間を絶滅させる、という存在意義です」

何も聞こえず、何も響かない。

「人間は、地球・・・いえ、世界中で強力な存在であるにも関わらず、自分達が木から降りてしまったがために、自然から隔離されました。」

自然から隔離されたのなら、生物ではない。

生物でないのなら、殺しても問題は無い。逆に殺してしまったほうが、都合がよいと思います。

死生物は、環境に生まれた意思なのかもしれません」

「死生物は環境が生み出した意思・・・」

つまり、神の遣わし者、使徒、といったところか」

「はい」

一陣の風。

「くしゅ・・・」

「・・・まったく」

由佳里が美月に上着を優しくかけた。

「・・・ありがとうございます」

「夏ももうすぐ終わる。そろそろ気をつけろよ」

「はい」

最後の残された蝉が、静かに鳴いて響いた。

ただ白く広い病室。

「・・・」

青髪の少女が横たわっていた。

「・・・英子さん」

小さくつぶやいてみても、聞こえるわけは無かった。

「・・・」

何百もあるベッドの中に一人だけ。

プライバシーよりも効率を優先したいらしい。

志隆がそばにあった丸イスに腰掛ける。

まだ少し、温かった。

「誰かいたのかな……」

志隆が携帯電話を取り出す。

メールをしている気配は無い。

「そういえばここ、ケータイ駄目だったりするのかな」

辺りを見渡しても、それらしき表示は無かった。

「ま、いつか」

「駄目です」

いるはずのない声に過剰反応する。

「だ、だれ!？」

「私です」

英子は眼鏡をかけ直している最中だった。

「もう起きていますよ」

「いつから？」

「神崎さんが携帯電話をいじっているときから」

志隆が英子に顔を近づける。

かなり近い。

「な、何ですか？」

「寝てるときぐらいしか眼鏡外さないとと思うから、どんなのだったかなあ、って」

「でしたら……」

英子が眼鏡に手をかける。

「待って」

「え？」

「外さないで」

英子は眼鏡をかけたまま困惑した。

「ですが、私が眼鏡を外した顔を見たい、と……」

「いや、そこで取っちゃ駄目なんだよ」。

眼鏡っ娘、っていうのは、常に眼鏡をかけているくせに、取っても可愛い、というのであって、『取れ』と言って取ったら、もうその人は眼鏡っ娘ではないのであって、つまりは取ってしまったら眼

鏡っ娘としての存在価値、意味、そして可愛さがまったく無くなってしまふのであり、逆に『取れ』と言っても『絶対無理ですっ!』って答えて、意地で外そうとしても取れない、または取るのを阻止するもの。しかも、この『絶対無理ですっ!』の『っ』が重要であり、『絶対無理です!』と『絶対無理ですっ!』では可愛さが十倍、百倍・・・いや、一千万倍違うわけだ。であつて

「つまり、外せと言われれも外さずに『絶対無理ですっ!』と断ればいいのですね?」

半永久的に続きそうな熱弁を英子がなんとか止めた。

「そういうこと。それとありがとう」

「二人揃つて、眼鏡っ娘談議?」

志隆にとつてはあまり歓迎できない人物が入ってきた。

「何で入つて・・・うわっ!」

かりんが志隆に後ろから思い切り抱きついた。

「志隆に会うためと、ついでの見舞いに決まつてるでしょ?」

「いや・・・あの・・・当たつて・・・」

「え?サービスよ。サ・・・ビス」

そう言つてより強く押し付けるように抱きしめた。

「あふやあ!」

「それとも、直に触りたい?」

かりんが静かに志隆の右手と右手を合わせて自分のほうへ近づける。

「や、やややや、や」

「やめてくださいかりん!私の目の前でそんなにはしたないことをしないでください!」

英子は当の二人よりも息を荒げ、顔を真っ赤にしていた。

「も、耐性無いんだから」

しかたなくかりんが志隆の手を離した。

「まったく・・・」

「ところで、英子は志隆に魅力みたいなのを感じないの?」

「魅力？」

英子は志隆全体を一往復する。

そして、

「無いです」

男子としてはあまりに愕然とする言葉を言った。

「み、見かけによらず、厳しいわね」

「・・・神崎さん、もしかして傷つきました？」

志隆の頭は中と外が共に同じ色で染まっていた。

「す、すみません！何でもするので許してください！

・・・も、もちろん、私が許可できる範囲内でお願ひします・・・

・・・」

「その付け足しが出てくるってことは、内心もしかして・・・

・・・」

「わ、私とかりんを一緒にしないでください！」

病室のほとんどが白のまま、意味も無い一日がまた過ぎた。

第十話

第十話 朱

志隆・・・・・・・・

何も無い、宇宙のような捻じ曲がった空間の中に見知らぬ声が響く。

「・・・誰？どこにいるの？」

志隆の後ろに女性が現れた。

「私の名前はルヴィエシス。あなたと会ったことのある者です」

「ルビエシス？」

「ルビエシスではありません。ルヴィエシスです」

志隆が軽くため息をつく。

「ルヴィエシスさん」

「ヴィ」を強調しながら志隆が言った。

「なんですか？」

「まず、どうして僕のことを知ってるの？」

「あなたを知らない人が私達の中にいるわけはありません」

「私達？」

志隆が辺りを見渡す。

しかし、そこには虚無の空間しか存在していなかった。

「じゃあ次に、ここはどこ？」

「あなた方の言う、四次元世界です」

「ははあ、つまりここは僕の夢の中か」

ルヴィエシスが少し困惑気味に表情を変えた。

「そうであるとも言えますし、そうでないとも言えます」

「まあ、夢の中なんだから好きなことと言えるよね。誰だって」

ルヴィエシスはさらに困惑気味の顔をした。

「ここは夢の中ですが、私は好きなことはいえませんが」

例えば、私があたと一生、自分の欲が欲するがままに一緒にいたい、ということとは、とてもではありませんが言えませんが、無論、実行も出来ません」

「それは僕でもお断りだよ」

突如、周りの空間が瓦礫のように崩れ落ちていく。

ルヴィエシスが遠ざかっていく。

「待って！」

つかめないとはい知りながら、必死につかもうとする。

「もうすぐ朝です。あなたは起きなければなりません。」

そして、私は私達が来たときにまた会えます。それに、私はいつもあなたのそばにいられるはずです」

「ルヴィエシス」

「さんっ！」

志隆は折りたたみ簡易ベッドの上で、無駄な汗をかいていた。

「夢・・・じゃないはずだね」

志隆はゆっくりと自分の右手を握り締める。

「もしかして！」

志隆が自分の額に手を当てる。

あの時と同じ、思いつめた表情になる。

「無意識の内に・・・ルヴィエシスのこと・・・好きになってる」

「「「あちゃー・・・」」」

「そんなにおかしいことかな？」

ほぼまっすぐに夕日が当たる放課後の教室で三人は頭をかかえていた。

「あのな・・・美少女の次はこれかよ・・・夢の中の夢とはまさにこれだな」

「「「うんうん」」」

志隆が反論を開始させる。

「だって、一度くらいない？夢の中にとどまりたいっていつときとかそういうの」

「いや、もちろんあるさ。あのときはさいこ」

志隆の無表情顔面ナツクルが炸裂した。

容赦なく後頭部が机にヒットする。

「お、久しぶりに出た無表情顔面ナツクル！」

「でもさ、何にしる夢の中の女に惚れるのはどうかと思うよ？」

第一、それが夢ならもう多分二度と会えないわよ？」

「でも、同じ夢何度も見るこつてあるじゃん。

それに『私は私達が来たときにまた会えます』つて言つてたし」

二人が近くにあつた机にへばりつく。

「だって夢でしょ？何とでも言えるじゃない」

「それはそうだけど・・・」

校舎内がいきなりの揺れに襲われた。

「じ、地震！？」

「全吉良風市民へとお伝えします。

すみやかに近くのフィルターへとお逃げください」

どの先生でもない声が校内放送で流れる。

「な、何、フィルターって！？」

志隆のみが状況を察知した。

「とにかく急いで逃げて！ほら！小暮！」

「なんだよ寝させといて・・・」

「とにかく行くんだよ！」

志隆が小暮の肩を担いで走り出す。

町中が混乱の渦と化していた。

「一番近いのは東フィルターのはずだからそこに急いで！」

「わ、わかった！」

少し違った眼差しを志隆に向けながら二人は走っていった。

志隆が小暮を下ろす。

「ほら、小暮も！」

「まったく・・・マラソン大会に参加する気はねえぞ？」

「いいから！」

志隆が無理やり小暮の背中を押し出す。

人の波へと見事に飲み込まれた。

「とにかく防時局に・・・！！」

中央交差点から何かが出てくる。

白い包帯をまかれたような細長いレモン状の体。

中央より少し上の部分にある一つの赤目。

こちらを向いた。

「・・・・・・・・」

何も言わずにただ立ち尽くす。

死生物がこちらへと近づいてくる。

「・・・・・・・・」

志隆が腰を抜き、その場に動けなくなる。

じよじよに目の角度が大きくなっていく。

あと数十メートルと迫ったとき、横からエレキシエストが飛び出

してきた。

そのまま体当たりをくらわせてビルもろとも倒れこむ。

エレキシエストの腕に白い包帯が巻きつく。

そのまま天高く掲げられ、志隆からは見えないところに放り投げられる。

死生物はそれを追って見えなくなった。

「・・・・・・・・！！」

志隆が我に返る。

すでに辺りに人の姿は無かった。

代わりに何か別の物体が近づいてくる。

「車・・・？」

時速100kmは軽く超えている。

志隆までの距離が100m以内になってもブレーキをかける気配

が無い。

「・・・やば」

死生物がいるにも関わらず、逆方向へと走り出す。

「死生物に食われるより、轢かれたほうが最悪だよ」

もちろん、勝てるわけもない。

エンジン音が近づいてくる。

轢かれる。

死ぬ。

急ブレーキ音が聞こえる。

・・・止まった。

「おい志隆！」

「せ、清輝？」

息を切らせながら志隆が後ろを振り向いた。

青色のどちらかといえばカッコいい車が止まっていた。

「乗れ！」

「だって一回しか運転したことないって・・・」

「あのときは冗談だ！何言ってたんだ！」

清輝が運転席の窓を閉める。

エンジンをかけると共に志隆が乗り込んだ。

「ちゃんと締めとけよ！」

「えっ何」

質問をする間もなく清輝がアクセルをベタ踏みする。

嫌な焦げ臭いにおいと共に勢いよく急発進した。

「締めろって言ったら普通シートベルトだろうがよ！」

「言っの遅いよ」

志隆が左手で額をさすりながらなんとか締めた。

締め終わったのを確認した直後、再び額に痛みが襲う。

前を見てみると、倒壊したビルによって道がふさがっている。

「もうちよっとゆっくり走ったら」

「半径55m内にゲアがいるって言うのにか？」

バックしながら左へハンドルを切る。

清輝がギアをバックからドライブへ変え、急発進する。

「かつこいいね」

「お世辞をどうも」

ほぼ無事に危険地帯を抜ける。

「くそっ！かりんのやつ、どこに吹っ飛ばされてやがんだよ！」

目の前の交差点にエレクシエストが煙とともにどこから飛ばされてきた。

清輝がギアをバックに入れ、右へと切る。

半反転したところでドライブへと戻し、左へ切る。

ウインカーを上げもせずに路地裏へと入る。

「それってやって」

「こんなときまで律儀に守るやつがいたら教えてほしいもんだね！」
路地裏を抜ける。

と、予想もしない事態が起きていた。

「好きなやつが足下にいるくせに戦闘続けてんじゃねえよ！」

足を一本かわし、二本目をぎりぎりで避けた。

「・・・天井すつたな・・・」

そのまま直線道路を走る。

「ジェットコースターよりはるかにすごいや」

「それなら、あいつは乗れないな」

志隆が考え込む。

「そんなに低かつ」

「くそやろうがつ！」

道路が一面影で覆われる。

急いでまた路地裏へと逃げ込む。

車体の後ろのほうが大きく揺れた。

「しよゝ」

「・・・お車ごっちはここで終わりだな。少し残念だが」

清輝が地下駅へと一気に突入した。

「ちょ、ちょちょ、ちょつと!」

「我慢しろ!俺だつてぎりぎりなんだぞ!」

なんとか階段を下りると、改札口が地面に埋め込まれていた。

「すご………」

「防時局にできないことはないからな」

ホームに入ると台だけのものが線路の上に乗っていた。

それをわざわざドリフトでつける。

「任務完了。出せ」

「了解」

「活動限界まであと30分!」

「思った以上の長期戦ね」

双方共に、投げたり投げ返されたりが繰り返されていた。

「レールガンは使用不可能、武器投下も腕を掴まれているせいで不可能………」

英子がどうにかしない限り、現状打破は不可能………」

再びエレキシエストがゲアの腕を掴む。

しかし、自分の方へと引き寄せた。

間に右前足をはさみ、ゲアと密着させる。

「エレキシエスト、リミッターブレイク!」

「活動限界、残り30秒!」

「やっぱりね………」

エレキシエストがゲアの腕を無理やり引きちぎる。

落ちた腕が道路を真紅に染めた。

「ちょうだしい」

「、投下!」

大鎌が投下された。

「一気に決めちゃおうと!」

今までより想像できない速度でエレキシエストがゲアに接近していく。

「残り10秒！」

「スリルスリルスリルう！！」

ようやくゲアが起き上がる。

「7！6！5！4！3！2！1！」

「ゲア、消滅！」

「・・・くさいね」

「我慢しろ。防護服は一応着ている」

二人はルエの収容場へと来ていた。

すでに3分の1はなくなっていた。

「これが俺達を絶望の淵に落としかけたやつだとはな」

「少し、かわいそうだね」

見たことも無い数百人の研究者がこぞって群がっている。

「あと1週間もしたら全部消えるそうだ」

「消える？腐ってるだけじゃないの？」

翼についている目が落ちた。

「腐ってることは腐ってるが、厳密に言えば死生物の体がAST粒子に分解されてるだけだ。

ここに来ているやつらは、ほとんど兵器関係の研究者らしい」

「AST粒子を兵器化することなんてできるの？」

「無理だ。AST粒子はあるだけでまわりにあるものを分解していく。

この部屋ぐらい広い場所だとあまり効果は持たないが、AST粒子は密着していれば密着しているほど効果を発揮する。

銃弾にこめたりしたら、銃が分解するさ」

肉片が一気に落ち、灰色の心臓があらわになった。

「うわっ・・・・・・」

「気持ち悪いか？」

「うん・・・・・・」

でも、死生物の構成物質は同じのはずじゃ・・・・・・」

図太い注射器を刺し、血を採取している。

「確かに同じだ。」

だが、死生物の皮膚の色が黒と白ではっきりわかれているように、構成物質が同じなのにも関わらず、部位によって硬さや強度が違う。ま、骨がなかったら軟体生物と同じようなやつらしかできないだろうからな。

「ところでお前、なんでルエなんか見ようと思ったんだ？」

「多分・・・なんとなく」

「物好きなやつだな。」

ま、後は好きなだけ見てけ。中から外へ出るのにはパスワードも網膜認識もいらなからな。

こんなところにいたら、鼻が折れる」

清輝は少し千鳥足になりながらなんとか出ていった。

「・・・・・・・・」

目の前に広がる黒と白の体。

指揮室のモニターからでしか見ていないルエが今、目の前に横たわっている。

近づく、一目で見渡せないほどの大きさだった。

志隆がルエの体に触れる。

防護服を通じて、わずかに体温が感じられた。

「まだあったかいんだ・・・・・・・・」

抱きついてみる。

全体に温かさが伝わってくる。

「優しい・・・・・・・・」

「こら、触るんじゃない。君も高校生なら、それぐらいわかるだろうが」

「すみません」

ゆつくりと、名残惜しそうに体を離す。
体温がわずかに残っていた。

「出来たー！」

英子ではない青髪でセミロングの髪の子がつぶやく。

「どれどれ？」

「今度こそうまくいったと思う」

レナが数万行にもおよぶ0と1の列を見ていく。

「ふーん。うまくいきそうね。これなら」

「やったあ、レナからOKもらったなら多分大丈夫だよな」

背もたれに思いきりのしかかる。

「私以外にも見てもらったらいいじゃない。

優越感にも浸れるしね」

「わかった」

「美月指揮官」

「入っていいわ。今開けるから」

美月がパソコンを軽くいじるとドアが左へ開いた。

「失礼します」

「どうぞ」

美月へとパソコン用の記憶媒体のようなものを差し出す。

「四次元フィールド簡易発生装置・・・ついにできたのね」

「はい。他の9人にも確認してもらいました。完璧です」

美月がそれを照明にかざして眺める。

「あとはエレクトロニクス転送後に本人達が使いこなせるかどうか、
ね。

ま、彼らなら大丈夫でしょうけど。

許可は出すから、転送しておいて」

「わかりました」

「転送完了」

彼女の膝にあるノートパソコンにはその文字が出ていた。

「ん？出来たか」

「ゆ、由佳里指揮官！」

急いで身なりを整えだす。

「まあ、そう慌てるな。それに私はもう指揮官ではない」

「そ、そうでした・・・すみません」

しかし、手は止めなかった。

「6年越しの大成だな。ちなみに何号なんだ？それは」

「79号・・・ですね」

「がんばったな。ずいぶんと」

「その一言をもらうために今までやってきましたから」

由佳里が彼女の肩に手を乗せる。

「どうする？一仕事終わったが」

「続けます。この仕事。生きがいなんです」

「年下に命令されてもか？」

「はい」

由佳里は鼻で軽く笑った。

しかし、嫌味な心はまったく含まれていなかった。

「ま、がんばれ生きがいなんだからな」

「了解！」

第十一話

第十一話 鉛

虚無の空間の中に人間が一人。

「ルヴィエシスさん？」

響きもせずにとだどこまでも飛んでいくだけだった。

「おい」

「何ですか？志隆」

ルヴィエシスは志隆の後ろにいた。

「前から出てきてよ」

顔が急にこわばる。

「・・・志隆。あなたは私に好意を持つてはいけません。
最低限、恋人のような感情は捨てるべきです」

「いいじゃん。好きなんだから」

二人の心が離れていく。

「だめです。あなたは夢の中にいる人を本気で好きになるつもりですか？

どう考えても異端です。やめなさい」

「夢だからこそ好きになれるんだよ」

志隆がルヴィエシスへと流れていく。

それ以上の速さでルヴィエシスは遠ざかっていった。

「・・・わかりました。無理にでもあきらめさせる必要があります
ね。」

志隆。後ろを向いていてください」

「どうする気かしらないけど、まあいいや」

志隆が後ろを向いてからものの数秒もかからなかった。

「いいです」

志隆が向いた先には、

クジラのような白に黒の模様が刻まれた体。
体に生える八枚の翼。

口から突き出している牙。

そして、体中についている真紅の眼。

まぎれもない、ルエだった。

「く、来るな！来るなよ！」

「事実です。受け入れなさい。」

それに、私はあなたから出て行くことはできません」

志隆は鳥よりはるかに速く離れていく。

「私の名前はルヴィエシス、人間界では第十六型死生物ルエ、ですね。」

偶然にも、その他全ての死生物の名前が人間界での呼び名に似ているようです。

ルブエボシス、ラジュギシス、ルマジエシス、チギエウシス、ダジギユシス、マジユタシス、ロサギユシス、セウイムシス、クルイロシス、イジュアシス、ヨルギアシス、ムリイボシス、ノジュトシス、キイウロシス、ゲルイアシス。

そして、インラアシス、エリンシス、ジヴェルシス、リヴィタシス、モラギユシス、ロングイシス、レクイドシス、オヴィルシス。オヴィルシスの出方によってはいくらでも作られます」

「つ、作られる？」

混乱しながら志隆がなんとか答える。

「あなたがたが言っている死生物は、あなたが考えるような人間を絶滅させるための神の使徒、ではありません。」

もちろん、あなたがたから見れば神の使い、とでもいうような生物です。」

最初の目的はあなたを取り戻すことでした」

「最初？それに僕？」

志隆が止まると共にルエも止まる。

「そうです。あなたは本当に偶然落ちてしまったデギウルシスの核

が人間化した姿。

つまり、あなたは第一型死生物デルの一部です」

「・・・・・・」

「そして偶然にも出てしまい、人間界に落ちてしまったがためにそのような姿に」

「あはははははは」

半分狂気した笑い声がルエにのみ聞こえる。

「そんなわけないじゃん。僕、お母さんから生まれてきたんだよ？
そんなわけないじゃん。そんなわけ」

「現実を見つめなければ何にもなりません」

「うるせえ！何もかもいらねえんだよ！」

その時。

志隆の背中から虫の足のようなものが生えてきた。

無数に生えたそれはルエを何重にも突き刺した。

「死ねよ！そのまま死ねよ！」

止まらずに生えてくるものがルエを無数に突き刺し、そして中身を次々と抉り出していく。

「や、やめ」

「言うなクソアマ！ルエが！忌々しい死生物なんかになって誰がたまるもんか！！」

志隆がルエの顔らしき前面へと近づいていく。

最後に残った目が志隆を見ている。

「・・・・ふっ」

ゆっくりと右手をのばしたとき、志隆は視界の右に映ったものに愕然とした。

今まで何十回と見てきた、デルの手。

他の死生物とは違い、全くの白色でそれぞれの指についた爪がずるどくとかつている。

そしてその手の付け根は、見事に自分へとつながっていた。

「・・・・いやだ・・・・なんだよこれ・・・・・・」

自分の右手を左手で引きちぎる。

痛みよりもその左手さえもデルへと変わっている。

手の先端から口の中へと押し込む。

そして自分の体もデルに変わっていることに気づく。

「いやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだいやだ！」

消えろ！！消えろ！！全部消えろ！！僕なんて消えろ！！」

全ての生えた何かが自らの体を突き刺した。

•

手を確認する。

•

背中を確認する。

•

顔を確認する。

•

夢の中。

そう、夢の中。

そのことはわかっていながらも関わらず、有り得ないほど現実味を帯びたその体験に縛られていた。

全く動いていなかった。

目を閉じたらまた眠ってしまいそうで怖い。

眠ってしまったら、また会ってしまいそうで怖い。

また化けてしまいそうで怖い。

息をすることさえ恐怖に感じた。

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

苦しい。

苦しいのも怖い。

息をするのも怖い。

何も出来ない。

何もかも怖い。

廊下で何か声が聞こえる。

「キラカゼ内にA S T反応を二個確認！同型のため、第十八型インです！」

「・・・そうだ」

再び生命活動を開始する。

たかが夢だ。

「平塚清輝はエレクシエストに搭乗し、待機！」

乾いた目でなんとかまばたきをすると指揮室へと走っていった。

「、よこせ！」

「、投下！」

既に戦闘がはじめていた。

「イン、活動開始！」

「エレクシエストを軸にして全く対称的に動いています！」

「誤差、0.01秒ありません！」

エレクシエストの半分ほどの大きさしかない、白色で独眼の巨人が迫る。

受け止めようとする腕の拳動もむなしく、胸と背に二人の腕がめり込んだ。

「胸部装甲、完璧に損壊！」

「背部装甲、損壊率63%！」

二人がエレクシエストを壁代わりに数百メートル遠ざかる。

「レオム許容速度は！」

「57kmオーバーです！」

二人が地面に両手をつけると足の力のみで跳躍し、飛びげりをくらわせようとする。

エレクシエストは を落とすと二人のアキレス腱をつかみ、その動きを利用して逆側に投げ飛ばした。

「片方を狙って！」

「了解！」

エレクシエストが再び　を拾うと、起き上がろうとしていた二人にそれぞれ投げる。

二人の頭部は、道路に固定された。

「、よこせ！」

「、投下！」

フェイシング用のような柄が短い槍が投下された。

それを掴むと一気に跳躍し、一人を覆う影を作る。

腹部に深く突き刺さった。

頭部に刺さっていた　を抜くと、降りかかる血も気にせずに、四肢から順番に切除していく。

最後に左胸に突きたてた。

「インー一体、消滅っ！」

「いえ、もう一体も消滅しました」

「四次元内で神経をつながれた死生物？」

エレクシエストの格納庫内に二人はいた。

「あくまで仮説だけだな。一卵性双生児でもあれは無いだろう？さすがに」

「そうだけど・・・」

「もしくは機械で同じようにコピーされた量産型、か」

胸部装甲換装作業がはじまっているが、清輝は動こうとはしなかった。

「それだとしたら、片方が攻撃されてるときに片方が助けに来るよね」

「・・・それもそうだな。少しは頭、いいんだな。

もちろん、形だな」

「・・・」

エレクシエストの胸の白い皮膚があらわになっていた。

「そういえば、清輝はなんでパイロットになりたかったの？」

「初めからパイロットになりたかったわけないだろ？」

ただ単に、自衛官として適当にやってたら、ここに飛ばされたっただけだ」

「その歳で自衛官？」

改めて志隆が清輝をなめまわすように見る。

茶髪、180くらい、比較的男らしい体……

「無しじゃないけど……十代だよね？」

「もちろんだ。お前と一つ違いの18。ただ、学年的には同じだけだな」

「どうやって入ったの？」

「中卒で入ったに決まってるだろうが」

清輝のような人が町中に溢れていたら、少しは景気もよくなるだろうか。

「月とすっぱんだね、ほんとに……尊敬するよ」

「そりゃどう」

目が半開きのまま固まっている。

「ああ。記憶消去か」

「……もう私が教えきれることはなくなったわ」

「え？もう？」

すでに志隆はエレクシエストの全操縦方法をマスターしていた。

「若い人のほうが、適応能力が高いのは本当のようね」

「若いって……時野だって十代だろ？」

「歳は確かに16よ」

少しも躊躇しないで言うのが時野らしい。

「一つ下だったんだ！」

「どこが不思議なの」

「ずいぶん大人っぽいからさ。その大和撫子っぽい髪もそれを演出してるのかもしれないけど」

数秒ほど時野が自分の髪をながめる。

「別に髪の毛なんて飾りだわ。こんなもの、邪魔なだけ」

「もったいないよ！欲しくても手に入らない人がたくさんいるんだよ？」

「かつらにでもすればいいじゃない」

志隆が何かに気づいた。

「もしかして・・・すっぴん？」

「化粧なんて、お金の無駄だわ」

「はいやー・・・」

十代までで化粧をしていない現代の女性など、多分、時野のみであろつ。

いや、断言してもいい。

「外見の美しさなんてどうでもいいわ。

どんなに美しくてもいつかは衰えるもの。

それなら、時が経っても衰えない、知識と心を持つべきだわ」

「・・・僕の名言語録に載せとくよ」

「それよりも、早くその近すぎる顔面をどうかしてくれないかしら。

邪魔よ」

仕方なく志隆が顔を遠ざける。

「もしかして、病弱だったりする？」

「どうして」

「だってシミとか一つもできてないじゃん」

「シミやソバカスは肌の新陳代謝が悪いから出来てしまうもの。

適度な生活を送っていれば、悩むことも無いわ」

一体、何人の女性を敵に回せば気が済むのであろうか。

「美少女コンテストとか出たら？絶対優勝できるよ。スタイルもいいし」

「・・・どう言えばいいの」

「何が？」

「誉めてもらったときに、どう対処すればいいのかわからない」
少し志隆が笑った。

「素直に喜ばいいんだよ。笑って」

時野が人間の顔で作り出せるとは思えない表情を作り出した。

「ど、どうしたの？」

「・・・らった・・・」

「え？」

「笑ったの。あなたが言うから」

少し時野の顔が恥ずかしそうに見えたのは気のせいでは無いような気がする。

「ああ・・・そう・・・なんだ・・・はは・・・」

「志隆、あなた、気持ち悪い」

志隆が軽くドアをノックする。

「英子さん。開けるよー」

「わかりましたー！」

病室が広いせいなのか、英子が大声で答えた。
しかし、志隆はすぐに病室に入ろうとはせず、入り口から首を突き出して辺りを見渡している。

「どうしたんですか？」

「いや、かりんがどこかに潜んでたりしないかなあ、って」

「ご名答」

志隆の意思に反し、かりんが後ろから声をかけた。

「うわっ！」

「もー、志隆ったらー、私のことそんなに意識してるの？」

この前と同じように、後ろから抱きつく。

「いや、だから・・・」

「サービスよー。サ・・・ビス」

かりんが志隆の耳に息を吹きかける。

「あふやあ！」

「息だけでこんなになっちゃうの？楽しみ」
かりんが志隆の頬を人差し指でいじりだした。

「で、何ですか？神崎さん」

これくらいの耐性ならついてしまったようである。

「そういえば、一番肝心なあのことについての謝罪をしてなかったなあ……って」

「ああ……いいですそれなら。私も踏ん切りがつかしましたし」

「何？あのことって」。なんか意味深々

かりんが志隆を覗き込む。

「まあ……あれはあれ……ということだ」

「あれはあれ……です」

「英子？私が知らない間に場所をいいことにしちゃってない？」

「そ、そんなわけではないです！」

英子が全力で否定した。

「場所、といえば、もう気絶してないのに、なんでここにいるの？」

「体は大丈夫なんですが……部屋がちよつと悲惨なので、ついでにここに住もうかな……と」

確かに、ベッドの周りは、きれい、とは言えなかった。

「意外でしょ？」

「確かに」

日常に、非日常が割り込んでくる。

「キラカゼ上空300m地点にAST反応！第十九型死生物、エンです！」

かりんが人差し指を止めた。

「烈那英子はエレクシエストに搭乗し、待機！」

「大丈夫？代わるけど？」

「大丈夫です。仕事です」

英子がベッドから出て、病室の出口へと向かった。

「神崎さん？」

「何？」

「あの、帰ってきたら、弁償の代わりのようなものとして、水族館にでも行きませんか？二人で」

「空き時間ってあるの？」

「交代制ですから」

志隆が少し考え込む。

「いいよ」

「わかりましたっ！」

第十二話

第十二話 鈍

「エン、以前上空にて待機中！」

回転しながら何かを伺っているようにも思える、白と黒の絡まりあつた紐のような何かが浮かんでいた。

「全対空兵器発射開始」

バルカンやミサイルが発射されるが、もちろん意味は無かった。

「敵の外的損壊0！」

「全対空兵器発射停止」

「地下ゲート開放完了！」

「四次元ゲート完了！」

「合図を！」

「エレクシエスト、投下！」

エンから見て、ちょうど影になっているビルの裏に投下された。

「、ください！」

「、投下！」

ライフルがエンから見えない状態で投下された。

「位置、教えてください！」

「エレクシエストより北北東53・5m、上空約300mの地点です！」

エレクシエストが 弾をこめる。

一呼吸置いてビルから一歩踏み出すと、即座に撃ちこんだ。確かに貫通した。

しかし、微動だにしていない。

むしろ、気づいていないような素振りだ。

「レオム、準備完了！」

「レールガン発射許可！」

「了解！充電開始！」

モニターの下に出たゲージが少しずつ埋まっていく。

「充電完了！・・・発射！」

レオムが吹き飛ぶ映像と共に一つの光線が空を翔ける。

しかし、微動だにしていない。

むしろ、気づいていないような素振りだ。

「一体・・・何者？」

回転を続けるエン。

様子を伺っているようにも、ただいるだけにも見える。

「電波や搭乗者、エレクシエストの脳波は？」

「いずれも・・・異常無しです」

「ドM・・・なわけないわよね」

その場にいる全員の瞬きが合った瞬間だった。

「え、エン、消えました！」

「どういうこと！？」

まるで、全員の行動を把握しているかのように寸分の違いも無い行動。

しかも、通信速度までを読み取った完全なる行動。

状況を混乱させる手はずなのかはわからない。

「エレクシエスト上空にAST反応！同型のため、エン、再出現です！」

「英子、逃げて！」

繋ぎ目が無かったエンに繋ぎ目が出現し、エレクシエストの胸部と左手を と共に締め付けた。

が碎け落ちた。

「、ください！」

「、投下！」

マシンガンらしきものを逃れた右手で零距离発射する。

撃ちこまれた弾丸が銃口から溢れ出てくる。

「主電源に亀裂発生！残り1分持ちません！」

「なんですって!」

エレクトロニクスモニターの一番上にあるゲージが少しずつ減っていく。

それと同時に、絡み付いているエンを、橙色に濡らしていく。

「と、操縦室開放準備開始!」

「何やってるの!」

「な・・・何もやってないです!!」

美月が思わず体を乗り出す。

「手動解放装置は!」

「作動していません! ロックされたままです!」

ゆっくりと操縦室が引き出される。

「・・・・・・・・」

英子が見える。

「・・・・・・・・」

縛っていた先端が操縦室へと向き、真紅の眼を開く。

「・・・・・・・・」

英子とエンの視線が合う。

「・・・・・・・・」

英子は自分が危険に犯されようとしていても、何も出来なかった。

「・・・・・・・・」

二人はずっと止まったまま。

「・・・・・・・・」

互いが互いの精神をまさぐるようにして見ている。

「・・・・・・・・」

アニメの一コマで止まったようなモニター。

「・・・・・・・・」

画面脇の時計だけが、唯一この時間が動いていることを告げる。

「・・・・・・・・」

エンの眼の下から細い触手が伸びていき、英子をいじくるように触る。

「……………」

約一秒ずつの間隔で、一本、また一本と無駄が増えていく。

「……………」

英子の体が見えなくなるほどの触手の数になったとき、付け根の部分から結合を始めた。

「……………」

一つも青が見えなくなったとき、静かに触手達はエンへと戻っていった。

「……………」

操縦室の操縦席には、誰も乗っていなかった。

「……………」

はじめから誰もいなかったように。

「……………」

誰の記憶にも、無かったように。

「…………英子さん」

エレクシエストのモニターのゲージはすでに無い。

「…………英子さん」

搭乗者の脳波計はエラーを示し、脈拍、血圧計はただまっすぐの線を示している。

「…………英子」

「…………英子」

「…………英子」

「…………英子」

「…………英子」

「…………英子さんっ!!」

エンは静かに束縛を解くと、また上空で輪状になり、回転を始めた。

「エレクシエスト搭乗者…………しば」

「その先は…………言わないで……………」

静かに、志隆が拳を握り締める音だけが響いた。

そして、自分を静めるように、走り出した。

「かりん！行って！」

「了解！」

いつもの、不抜けた声とはかけ離れていた。

その中に、何かの変化が感じられた。

「……………」

志隆はもちろん免許など持っているわけも無い、誰のものかわからないバイクに乗っている。

速く行きたい。

それだけだった。

「……エン」

志隆が上空のエンを見上げる。

相変わらず、不気味なほどに回転を続けている。

「……殺してやる。俺の手で」

ビルにぶつかる直前でなんとか左に曲がると、バイクを乗り捨て、営業所のような建物の中へと入っていく。

エレベーターには目もくれず、階段を風のように翔けあがる。

すでに八階以上と上っているのにも関わらず、その足は止まるところを知らない。

ついに屋上に到達すると、休む間も無く扉を蹴破る。

エレクシエストの操縦室が、ちょうど見えた。

そのまま躊躇することなく走りこみ、操縦室へとなんとか飛び移った。

「……志隆……………」

かりんが車を降りて志隆を見上げる。

「……この、いいところ取りが」

操縦室が収納された。

「し、志隆くん！」

「降りて志隆！あなたに使える物じゃないわ！」

「教えてもらった！」

志隆が横の操作盤をいじくりはじめる。

「主電源電力無し、予備電源1分……」

志隆がレバーを引くと、横のモニターに黒の背景に赤字でカウンタダウンが開始された。

「――」

「か、投下！」

小刀が投下された。

昼下がりの太陽に、鋭く反射した。

「エン、行動再開！」

輪状だったものが紐状へと変形する。

エルクシエストへと迫る。

エルクシエストは右前足を軸にして、尾でエンを叩きつけた。

啞然としているようなエンをしり目に、そのまま右両足で踏みつける。

エンがなんとか抜け出し、エルクシエストへと絡み付こうとする。エルクシエストはエンを顔面直前で握り止めると、その真紅の目に付きたてた。

そのまま、左手と共にエンを縦に両断した。

握られている半分か、最後の抵抗とでも言わんばかりに手に絡みつく。

エルクシエストは を振り上げると、そのままエンに突き刺した。

「エン、消滅！」

「志隆――」

冷たい表情で帰ってくる彼を、美月は平手で返した。

「何やってるかわかってるの――」

そのままの表情で美月を見つめ返す。

「何で操作できたかはこの際問わないわ――」

自分が何をやったかわかってるつもり――

あなたがどれだけの罪を犯して、どれだけの心配を与えれば気が済むの！！

私が防時局長じゃなかったら、どうするつもりだったの！！」

「・・・お前になんか、そんな期待してねえよ」

「・・・え・・・」

妙過ぎる志隆の言葉に、美月が思わずたじろぐ。

「お前が防時局長だったところで、俺に対して後ろから手を回したのはお前の勝手だろ？」

そんなこと要求してねえ」

「・・・」

美月の頬を伝う涙など気にも止めず、そのまま自分の部屋へと直行了した。

「よお、志隆」

「・・・清輝」

清輝がいつもの表情で入ってきた。

「いやあ、お前が操縦できるなんて知らなかったぜ。

それに何、あの叩きつけは？

すごくねえか？」

「・・・ありが」

「というのは建前だ」

志隆は何が起こったかわかる時間も無く、壁に叩きつけられる。

前には右手を前に伸ばしきった状態の清輝がいた。

「お前には本当に失望した。

お前が心配をかけて、責任を背負ってくれたやつに対して、やってくれなくてもよかった、だと？

聞いてあきれるぜ。

俺はな、どんなにそいつが嫌いな女でも、そいつを泣かせた男は許せねえ」

しばらくの沈黙が続く。

実に、気まずい空気だった。

「で、お前は俺に何か言いたいことはあるか？」

殴られたやつには、そいつを殴る権利がある。

もちろん、ただ殴りたい、だけでも結構だが？」

「・・・・・・」

怒る気など、起こるわけもなかった。

「お前、本当、無駄に優しいやつだな。

ラブコメアニメの主人公になれるぜ」

それだけを言うと、またいつものように出ていった。

「民間人、それも死生物重要参考人にエレクシエストを操縦させた・
・・と」

前と同じく、薄暗い防衛庁本庁舎の部屋の中に美月はいた。

「はい」

「全くけしからんことですなあ。防時局長とはいえさすがに限度がありますぞ？」

静かに、少し長くまばたきをした。

「権力の悪用・・・・・でも言いましょうか」

「いやはや。暴走といい、乱用といい・・・・・・」

「では、私達も忙しいのでそろそろ結論といこうか。」

神崎志隆は死生物重要参考人として、一週間に一回ずつほど、各地に旅行に行かせる」

「旅行・・・・？」

思ってもみない言葉だった。

「海外でも、国内でも構わない。もちろん、同伴者付きで、だ。

各地に行った後に、その地全てで死生物に出くわすかどうかを確かめるだけだ。

期間は変化が無い限り無期限」

「ちよつと待つてください！

その地全てで死生物に出くわすかどうか、とはつまり」

「死生物が神崎志隆を何らかの目的地、または目標として定めているのではないか、という考えだ」

「つまりは、神崎志隆が死生物に直接関係がある人物だとおっしゃりたいのですか？」

思わず声の調子が強くなる。

「単純に言えばそういうことだ。」

また、エレクシエストは今後、各地への旅行をこちらが取りやめるまで志隆に操縦させろ」

「・・・わかりました・・・」

半放心状態のまま、静かに美月が出ていった。

「我々の考えに沿うなら、エレクシエストはすぐに覚醒を起こす。そうなってしまうえば、こちらの都合がいいというものだ」

ドアをノックする音が聞こえる。

「・・・美月？」

「志隆！」

すぐにパソコンを操作するとドアを開けた。

「どうしたの？」

「・・・ごめん」

「何が？」

あまりにも有りえない答えが返ってきた。

「え？」

「志隆が私に何かした？確かに泣いてたような気はするけど・・・
何で泣いてたのかわからないの」

「・・・何でもないよ。多分、夢だったんだと思う」

「そう。ならよかったんだけど」

美月がコーヒーをすすった。

「熱っ！」

「だ、大丈夫？」

美月が短く舌を出して手であおいでいる。

「火傷しちゃった……」

「そういえば、何でまた防衛庁になんて行つてたの？」

「志隆が格納庫でエレクシエストを勝手にいじって、壁とか壊したからでしょ？」

「え？そんなことやってないよ？」

美月が背もたれによりかかつて背伸びをする。

「またまた」。そんなこと言わないでよ。事実なんだから」

「……」

美月がまた姿勢を正す。

「そうそう、それと、週一のペースで旅行に出なきゃならなくなつたから」

「……僕が？」

頓狂な声をあげた。

「もちろん。できるだけ遠いところに」

「誰と？」

「誰でも」

「誰でも？」

「つていうより、立候補があるだろうから、その人と行くことになると思うわ。」

もちろん、私も立候補するから」

志隆が少し考えこむ。

「パイロットは交代制だからいいと思うけど、オペレーターとか指揮官が行っちゃっていいの？」

「オペレーターは少し問題あると思うけど、私が許可すると思うからいいわ。」

その代わり、後日みっちりやってもらえばいいだけなんだから。

私は……本庁にはいられなきゃ大丈夫よ。これで指揮できるから」

そう言っ、イヤホンマイクを取り出して、鈴のように振つて見せた。

第十三話

第十三話 黒

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ねえ」

「何」

「何か話さない？時野」

二人は新幹線で仙台へと向かっていた。

「話すことも無いのに、話す意味は無いわ」

「・・・・・・・・」

車窓には少し雪がちらつきはじめていた。

「ところで、何で僕と一緒に行こうと思ったの？」

「私には、あなたを監視する義務があるから」

「何で？」

「知らない」

そう即答すると、また車窓かた遠くを眺める。

いつものように少し悲しげだった。

「なんで見てるの？」

「酔ったから」

「・・・・・・・・なんとも現実的な答えである。」

二人は何とか仙台駅についた。

「で、どこ行く？」

「ホテル」

「・・・・・・・・え」

思わず、志隆が音も立てずに時野から一步遠ざかった。

「意外と・・・かりん以上？」

「そういう意味じゃないわ。」

ただ単に、どこにも行きたくないし、ある程度隔離されている場所なら監視もしやすいから」

「監視・・・ね」

志隆は空を見上げるが、雪はもうちらついていなかった。

「じゃあ、行こうか。」

「・・・変な気分だけど」

「はあゝ緊張したゝ」

「なぜ」

二人はホテルではなく、近くの旅館にいた。

もうすでに、日は傾き始めており、西に面する窓が眩しい。

「なぜって、当たり前じゃん。」

高校生の男女が二人きりで旅館に宿泊だよ？

どう考えても・・・」

「そういう関係だとしたら、ビジネスホテルに泊まると思うわ。お金もそんなに無いと思うから」

「・・・そうか」

畳に寝転ぶと共に、携帯電話の着信音が鳴った。すかさず志隆が取る。

「もしもゝし」

「よう、志隆」

「清輝ゝ」

時野は夕日を見ながら固まっていた。

「どうだ？旅は」

「それがね・・・」

志隆がそそくさとトイレに駆け込む。

「はつきり言って、かなり暇」

「だろうなあ」

「ずっと景色見たまま動かないし」

「ま、お前と話すことだけでも貴重だと思っとけ」

「思っとけ、って言ったってなあ……」

「そういえば、清輝って時野について知ってることってある？」

「平均値をはるかに越える空間認識能力者ってことぐらいか」

「くーかんにんしきのーりよく？」

「簡単に言えば、一回見ただけでどこに何があったのかを正確に頭の中に叩き込める能力だ。

つまり、一回その道を見れば、真っ暗でも問題無しに通れるって
いうことだ」

「へー」

「で、その能力＋時間を止められても動ける能力のおかげで、今は
時間制御装置の作動者ってわけだ」

「時間制御装置？」

「時間を止める機械だ。その間に防時局の外にいるやつの死生物に
関する記憶を消す。

しかも、その機械が厄介でな、普通の人間には作動できないんだ
よ。

1mmも狂わない正確な歩幅、登録した人間ぎりぎりをかたどっ
ている赤外線センサー、

そして、その作動者だけが知っているボタンの0.01秒の誤差
も認められない操作をやったあとにはじめて作動するんだ」

「何言ってるかよくわからないけど、とにかくすごいね」

「ま、安易にがちやがちや止められないようにするためだろうけど
な」

「……そういえば、時間を止められても動ける能力って、時野し
か持ってないの？」

「現時点ではな。」

ただ……あくまで余談だが……死生物も作動中は動けるらし

い。

だから、時野はもしかしたら死生物、という可能性が
無機質な携帯電話の音が意味も無く響いた。

志隆は用も足さずにトイレから出た。

「時野」

「何」

「英子さんの記憶を消したのって、時野？」

「そうよ」

あまりにもさりりとした受け答えだった。

「何で？」

「要らない物を消して、何が悪いの」

静かに、右手を握り締めた。

「何で要らないの？」

「引きずっていても負にしかならないものは、要らないわ」

爪が少し、皮膚へと食い込む。

「ならなんで……」

志隆が机を叩きつけた。

「ならなんで僕の記憶も一緒に消してくれなかったんだよ……」

「あなたにはその記憶が何れ必要になる気がするから」

「……いつ？」

「わからない」

その一言を発しきる前に、志隆は時野の髪を掴み、無理やり引き寄せた。

「わからないって一体何なんだよ……わからないならそんなことするなよ……」

「痛いから離して」

自分が誉めた髪を引きちぎらんばかりに握り締める。

「いつそのこと……僕ごと殺してくれればよかったんだよ……」
「わかった」

時野は左手でガラス製の重い灰皿をつかむ。

掴まれた右手に振り下ろそうとした瞬間に志隆が手を引き、勢い余って灰皿が手を離れ、畳を転がっていく。

「な・・・なんだよ？」

握り締められた状態のままの髪を手でとかしもせず、時野は転がっていった灰皿を追っていく。

「あなたが、殺して欲しい、と言ったから。」

そして、その言葉は嘘をついていなかったから」

「ちょ、ちよつと待てよ！」

確かに、言った言葉は嘘じゃない。でも、死にたくなんて無い」

「どちらが本当なの」

時野が灰皿を拾った。

「わ、わかんないよ」

「自分の意思なのに、なぜわからないの」

「わ、わかるわけないよっ！」

空気がおかしすぎて。

志隆は自分でも何がなんだかわからないまま、部屋を飛び出した。

意味も無く部屋を飛び出した自分に、何の気も起きなかった。

「・・・・・・・・」

息も切らさずに走り、その階の非常階段で立ち止まる。

「・・・・・・・・ちっ」

安物の腕時計を見ると午後6時ちょい過ぎ。

あと25秒前だったらよかったのに。

「・・・・・・・・」

自分だけが知らないことより、自分だけが知っているほうが悲しすぎる。

知らなかったら教えてもらえる。

でも、自分だけ知っていたら誰も信じてくれない。

ましてやそれが、人であつたなら。

「・・・要らないから消した・・・と、彼女は言った」
要らない、って何なんだろう。

この世に要らない物なんてない、と多くの人が言っている。
確かに、このまま引きずっていても何にもならない。

でも、いきなり・・・しかも自分以外の人に区切られるなんて辛すぎる。

「・・・彼女が無機質な性格なのはなぜだろう？」

笑った・・・と彼女が言ったときはあるが、どう考えても人間として有りえない。

笑っている表情を作ることが出来ないなんて。

心が凍りついているだけではない何かがある。

どんなに気張っていても、人前で緩むことはいつかある。

それさえもない・・・ということは・・・

「・・・完璧なる心の欠如、または欠陥」

としか考えられない。

一体、彼女に何があつたのだろうか？

あなたを監視する義務があるから。

誰に頼まれた？

どうしてそんなことを？

知らない。

わからない。

ただ「忘れた」ということではない何か。

気が付けば立ち上がっていた。

知らなければ。

そして・・・謝らなければ。

その衝動だけで自然と足が稼動していた。

「とき」

志隆の気持ちを打ち砕く、不可思議な光景が広がっていた。

脱ぎ捨てられた服。

窓の棧。

時野。

「時野!!」

その一言を感じ取る前に、時野は艶やかなその髪を引きずるようにして、窓から飛び下りた。

「・・・!!」

志隆が土足のまま畳の上になると、窓から顔を出して下を見る。

田舎と都会の混ざったかぜが通り抜ける。

時野はいなかった。

一言も発さずに部屋を出て行く。

脱ぎ捨てられた服が、少しずつ冷たくなっていった。

志隆は直感的に行くところがかつていているようだった。
携帯電話を取り出す。

「・・・もしもし？」

「もしもし、美月？」

「何？志隆」

「時野がいなくなった」

「・・・え？」

「見つけたら電話するから、用意だけしといて」

「わ、わかった！」

携帯電話をしまつとそのまま走っていく。

通り過ぎた脇に、見知らぬ登山口の看板が見えた。

開けた場所に志隆は見つけた。

白く光る羽に包まれた何かを。

一步踏み出した途端に、落ちていた枝が乾いた音をたてて折れた。

「来ないで」

きっぱりと。

いつものように冷淡に喋った。

「どうして？」

「これを見たら、普通の人間が私のことを人間とは思わないから
気にせずに志隆はまた一步踏み出す。

「来ないで」

羽が自分の存在を感じ取るかのように小さくなる。

「時野は普通の人間だよ」

「上辺だけ」

一步。

「誰だつて、自分が自分でなくなる時なんてたくさんあるよ。」

時野はそれが、外に出るだけなんだよ」

「慰めた気にでもなったつもり」

一步。

「来ないで」

一步。

「いつまでもそうしてるつもりなの？」

羽の殻に閉じこもって、誰とも触れ合おうとせずに、突き飛ばし
て」

「ええ」

一步。

「来ないで」

「そんなに来て欲しくないなら、僕からも注文しておくよ。それが
できたら僕も行かない。」

顔見せて、笑って」

一步。

「出来ないことを強要するのは何もしないことよりひどいこと」

「なら、行くよ」

一歩。

「何も、自分だけが違うなんて」

一歩。

「思わなくていいよ。みんなに共通していることは、違うことなんだから」

一歩。

もう、手をのばせば届く位置にあった。

「だからさ、誰でもいいから触れ合いなよ。最初は・・・僕でいいからさ」

「あなたはただの観察対象。私はその対象に」

「屁理屈言わない」

ゆっくりと羽をさする。

意外にももろく飛び去っていった。

「・・・努力はしておくわ」

「素直に言つてよ。『がんばる』って」

「・・・がんばる」

志隆が思いついたように手を止め、慌てて後ろを向く。

「どうしたの」

「だって時野・・・裸じゃん」

志隆の顔がみるみる赤くなっていく。

「あ、当たり前なんだよ！服脱いでっただんだから・・・・・・・・・・
気づかない僕の方がおかしいんだよ！」

「覚醒時の私は自己制御が効かない。

しょうがないといえましょうがないわ」

「と、とりあえず電話・・・・・・・・・・」

志隆が携帯電話を取り出す。

「もしもし」

「もしもし？見つかった？」

「うん。今ここ」

「エレクシエストの要請をしておいて」

「え？」

思わず振り向くが、その姿にまたも後ろを向く。

「何？どうかしたの？」

「なんでもないよ」

「要請をして。」

「私が、来るわ」

「どういう」

またも意図せずに振り返った瞬間、時野が飛び立った。

「時野！！」

「時野がどうかしたの！？要請って何を！？」

あわてて志隆が携帯電話を取る。

「エレクシエストを転送して！！」

「え？まだAST反応は」

「仙台市西部上空500mにAST反応！

第二十型死生物、ジルです！」

「わかったわ！」

そう答えて飛び去った上空を見る。

エレクシエストと同じような身長。

前腕の中ほどから生える二本の爪のようなもの。

黒色の巨人がそこにいた。

そして、時野が吸い込まれると共に、

目は青から赤へとグラデーションを経て変わり、時野と同じ羽が生えた。

第十四話

第十四話 蠟

「レオム格納ユニット装着完了！」

「エレクシエスト、投下！」

志隆の携帯電話の着信「交響曲第9番」が鳴る。

「どうすればいいの？」

「とりあえずそこにじっとして。もうすぐ行くから」

突如、上空からエレクシエストが出現した。

「ワイヤーおろすから待ってて」

素早くおりてきたワイヤーの三角の部分に足をかけ、ゆっくりとのぼっていく。

「時野………」

そうつぶやかずにはいられなかった。

「同じ思いはしたくない」

志隆は起動レバーをあげた。

筒の中が周りの風景と同化する。

「ユニット解除！」

エレクシエストの背中についていた箱が外れ、中からレオムが出てきた。

「レオムはエレクシエストの援護にまわって！」

「了解！」

よろしくね！志隆！」

「うん！」

ジルが静かに山のふもとへと降り立つ。

両手を軽く広げると、二本の爪がさらにするどく伸びた。

「剣！何でもいいから剣ちょうだい！」

「、投下！」

まさしく剣らしい剣が投下され、地面へと突き刺さる。
それを抜き取ると静かに両手で構える。

「近接戦闘用武器、装備！」

レオムが背中の箱のようなものに両腕をつけると取っ手が飛び出し、腕を覆うほどの剣が飛び出した。

刃にレーザーがまとわれる。

「ジル！行動開始！」

ジルが大股で駆ける。

「は、速い！」

振り下ろした爪が剣の反動を受けて双方が仰け反る。

すかさずレオムが胸へと剣を突き立てる。

「さつさと死になさいよおおお！！！」

「だめだよ！時野が！！！」

ジルはレオムの頭を掴んで引き剥がし、そのまま握りつぶした。

「レオム頭部完璧に損壊！戦闘不能！」

「・・・このポンコツ！」

レナがモニターを蹴り上げた。

「・・・くっ！・・・」

エレクシエストの足が地面を掘り下げていく。

「・・・あっ！」

ジルが翼を使ってジャンプし、エレクシエストの右手を横に蹴る。
が無造作に転がっていった。

エレクシエストの目の前に立つと左腕を振り上げる。

「うわああああ！」

思わず操縦部から抜き出してしまった手が何かのスイッチに当た
る。

「四次元フィールド簡易発生装置、起動」

「志隆が！？」

ジルの左腕はあるはずの空間に届かずにどこかへと突き抜けた。

「切って！」

「四次元フィールド簡易発生装置、強制終了」

空間で分断されたジルの左腕が血も出ずに切れた。
異様な光景に啞然とする。

「今だ！」

エレクシエストはジルの腹に手を突っ込んだ。

「時野・・・いて！」

何かを掴み取るように手を引き戻す。

ジルの目が青へと変わっていく。

手の中の真っ黒な肉片の中に人の手が見えた。

「・・・よかった・・・」

「ジル、停止」

「・・・意味も無く、私はまた戻ってきてしまった」

廊下を駆ける誰かの足音が聞こえる。

「時野！」

病室の扉を開けて志隆が入ってきた。

「・・・よかった・・・」

そのまま端にある時野のベッドまで近づいてくる。

「あなたがいいと思ったことが、私にもいいとは限らないわ」

「・・・よくなかったの？」

わざと目を逸らす。

「ある意味、死ぬよりもつらいこと」

「中に入ったままなら死ぬんじゃないの？」

「永遠に生かされる。何があるうとも」

志隆が軽い疑問を持つ。

「永遠に生きてられるんなら、幸せじゃん」

「閉鎖的空間の中で何もせず苦楽を感じないで生活することなんて、死ぬよりひどいわ」

「・・・確かに」

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

「あなたの言うとおり、まずはあなたから仲良くしようと思っわ」
「そ、それはよかったね」

四人はホームルームの前のわずかな時間を楽しんでいた。

「そういえば昨日、仙台に旅行行ってたんだ」

「へへ。お土産は？」

「無い」

志隆が無表情で即答した。

「っていうか、お土産って旅話とかいろいろ話した後に『そうそう、そこでこれ買ってきたんだ』っていうつながりで出すもんでしょ？」

「マニアすぎ」

「ちよつと待て。お前、一人暮らしのくせに旅行行ってんのか？」
危うい。

「いや、それは・・・その・・・」

「ははへん」

鈴木が一人合点する。

「もしかして志隆、一人暮らしとか言っといてちゃっかり同棲してたりするんでしょ？」

「え、え？そ、そんなこと・・・」

「慌てているところがますます怪しい。」

旅行、二人でしょ」

「い、一応・・・・・・・・」

別な意味で危ない。

「Aまで？Bまで？それともCまで？」

「え、えっ？ちょ、ちよつと話が・・・・・・・・」

「くそく、まさか志隆に先越されるとは思わなかったぜ。」

そろそろド真ん中に勝負かけてみるとするかな」

「ド真ん中なんていたの!？」

話が煮えたぎらないままチャイムが鳴った。
きっかりに担任が入ってくる。

「今日は転校生がこのクラスに入ってきたらしいので紹介しようと思いま・・・いない。」

ちよつと探してきます」

扉が閉まると同時に全員の口が開く。

「転校生?二学期も終わるのに・・・。」

「いわる謎の転校生ってやつだな」

「ジャムパンくわえて遅刻してくればよかった・・・。」

「それは転校生側だろうが。しかも女だとは限らないぞ?」

扉が開くと同時に全員の口が閉じる。

「えー、では自己紹介と黒板に名前をお願いします」

「・・・時野神子です」

なんとか聞き取れるぐらいの小さな声で彼女は言った。

「・・・それだけか?」

「・・・趣味などありませんから」

「じゃ、じゃあ、空いてる席は・・・小暮の隣か」

静かに志隆の左斜め後ろの席に座った。

「・・・付き合ってる人とかいる?」

「いないわ」

「じゃあ俺と」

「却下」

小暮の表情は見なくてもわかった。

「・・・ん」

志隆が肩を叩かれて起こされる。

「と、時野!？」

「別におかしいことじゃないわ。クラスメイトだもの」

「そうか・・・クラスメイト・・・。」

志隆の頭が一気に覚醒する。

「クラスメイト!？」

「・・・朝からずっと寝てたのね」

志隆が時計を見る。

「どおりで腹が・・・」

「食べる？」

購買のジャムパンを差し出す。

「いただきますっ！」

勢いよく取り上げると一気に口に押し込んだ。

「・・・分離時に思考が多く取られたのね。感情はそんなに取られたわけではなさそうだけど」

「ふぁにかいつふぁ？」

「・・・飲み込んでから話してくれる」

志隆が無理やり飲み込む。

が、予想通りつまる。

時野が両手で握りこぶしを作り、背中を思い切り叩く。

吹き飛びかけた体勢をなんとか戻す。

「そんなに強くやらなくても・・・」

「あれくらいで起きなかつたから、これぐらいがちょうどいいと思うって」

「・・・つまり、これは痛くないはず、と？」

「そういうこと」

志隆が感慨ぶかげに目を細めた。

「ところで、何で学校になんて？」

「まずはあなたから仲良くしようと思ったから」

「それはそうだけど、別に学校に来る意味あるの？」

「友情は時間をかけて作り上げられるものらしいから、出来るだけあなたと長いようと自分なりに努力しただけ。

本当は二十四時間いたほうがいいと思ったけど、それではあなたのプライバシーが無くなってしまうから」

「・・・懸命な選択だね」

教室の蛍光灯にあかとんぼがとまっていた。

「ところで、ここの学校は馬鹿しかないの？」

「僕と小暮以外はいなさそうだけど。どっちもペケかブービーだし」

「今日一日で愛の告白らしきものと手紙が何十通と入っているんだけど」

「まあ・・・当たり前だよ。うん」

「恋人なんて作る必要無いのに。時間とお金が無駄になるだけ」
もつとも、といえばもつともな意見である。

「・・・もしかして彼氏いない暦〓年齢？」

「そうよ」

「まあ、これで潔癖じゃなかったら・・・ねえ・・・」

時野がカバンを持ち上げる。

「そつえば、あの三人は？」

「作戦会議、とか言っただけあなたを残して帰っていったわ」

「・・・ははは」

事態を把握したようだ。

「だったら、一緒に帰ろうよ。時野」

「・・・」

「十六型に続く二十型の停止・・・か」

「ほどほどにしてもらいたいものですなあ」

防衛庁内。

「しかし、今回の停止は前回とは違い、我々に有益になるものだったと思います」

「・・・どうということだね？ 滝網君」

「前回のルエの停止ではエレクトロニクス・・・いえ、デルが核を自らの体内に取り込んだため腐敗が進み、現在では一欠けらも残っておりません。」

ですが、今回のシルの停止では腐敗ははじまっておらず、エレクト

シエストと同じ脳波も検出されます」

「・・・ということは」

「ジルをエレクトシエスト二型機とし、同時にエレクトシエストをエレクトシエスト一型機と改めます」

「どよめきが起こる。」

「君はあんなものを二匹も日本に置いておく気かね!？」

「現時点において、死生物は強さを増していく一方です。」

「単体での攻撃も無くなるかもしれません」

「その前に一つ、聞いておきたいことがあるのだが」

「発言と共にどよめきがおさまる。」

「何でしょうか」

「エレクトシエスト内に操縦室を作る際に、前は約一年かかったそうじゃないか。」

「その前に・・・あくまでも私の仮説だが・・・最後の死生物がきたらどうするつもりかね？」

「・・・それは・・・」

「改造の意味は無くなり、その前に防時局などの施設内で覚醒したら、デルどころか時間制御装置までもが壊されてしまう。」

「そうなれば防時局の一番の意味が無くなってしまわないか」

「・・・」

「美月はただ押し黙っている。」

「時間制御装置関連でいくと、作動者が中に取り込まれ、重要参考人によって助けられたそうじゃないか。」

「なぜ、十九型に取り込まれたパイロットは助けられなかったのだ？」

「・・・」

「このままだと作動者まで重要参考人になってしまうかもな」

「・・・」

「防衛庁長官がまとめだす。」

「ジルは今のところは防時局内で管理、保管しておけ。」

各名称は二型機が完成した後、に話し合うこととしよう。

それと、時野神子を重要参考人とする」

「・・・わかりました」

「この中に時野が・・・か・・・」

すでにジルの傷は消え、左腕は元通りになっていた。

「どうしたの？」

反射的に身構える。

「大丈夫。私も一緒だから」

「・・・よかった・・・」

そのまま姿勢を元に戻す。

二人が志隆を挟むようにして同じようにする。

「ところで、どうやって助け出したの？」

「手で掴んで・・・こう・・・がつ、と」

志隆がエレクトロニクスの真似をする。

「そうじゃなくて、どうやって貫いたか、っていうことでしょ？」

「そう」

「どうやって貫いたか、って、だからそれは」

志隆がまた真似をしようとするのをレナが止めた。

「エレクトロニクスがリミッターブレイク無しで死生物の体を貫くなんて、到底考えられないわ。」

リミッターブレイク有りでも難しいかもしれないのに「

え！？そんなに！？」

「だから、どうやって掴んだのかが不思議で、ちょうど探してたところだったのよ」

志隆が深く考え込み始める。

「変なボタンとか触っちゃったからかなあ？でも、別にそういうのじゃなかったからなあ・・・」

でも怪しいし・・・」

第十五話

第十五話 桜

「ねえ、これ似合う?」

「うん。似合うと思うよ」

二人は近くのスポーツ店でスキー用品を買いあさっていた。さながら、恋人同士である。

「・・・さつきからそればかり」

「言葉通りなんだからしょうがないじゃん」

レナがため息をつく。

「その切り返しが嫌いなよ。」

せめて素直に謝ってくれたほうがまだマシなのに」

「・・・ごめん」

「ま、いいけどね」

持っていたウェアを元に戻す。

「ところで、レナってヨーロッパとかそこらへんの育ちだったりするの?」

「確かに生まれはヨーロッパだけど、一歳から引越して青森だったから」

「へー。だからスキーなんて誘ったんだ」

レナが志隆の隣に腰を下ろす。

「そういえばお金持っていないから、おごってくれない?」

「いいよ。別にウェアとかそんなに高そうじゃないし」

「あつりがとー!」

志隆に何をするでもなく、またすぐにレナが立ち上がる。その顔には不敵な笑いが浮かんでいた。

「じゃあ、とりあえず買い終わったから、行ってくるね」

「うん」

そのままレジへと向かっていく。

「いらつしゃいませー」

店員が手際よく会計を済ませていく。

志隆の顔が少しずつ焦りだす。

まだ一人分の会計も済ませていないにも関わらず、すでに五桁を突破する勢いだ。

「……………」

店員の言葉は志隆の頭の中には入らなかった。

「ひどすぎるよ……………」

志隆の財布の中身はわずかな小銭が残るばかりとなった。

「でも、あの額を現金で払うとは私も思わなかったわ。

結構これ、持ってるのね」

レナは人差し指と親指を使って輪を作って見せた。

「それにしたってトホホだよ……………」

「ま、いいじゃない。援交よりは安いんだから。

それに教師付きで中級くらいにはさせてあげるんだから」

どんなにいい言葉を差し伸べても、志隆はただ肩を落とすだけだった。

「さてと、まずは上級ね」

目の前には絶壁が広がっていた。

志隆が少しずつ斜面をのぼりはじめる。

「無駄よ。

ここしか行く道無いから」

「…………マジで泣きそうなんですけど……………」

「まあ、暇になったら私に激突してイチヤイチヤすればいいじゃない」

「…………なんだかなあ……………」

「ほら！誰かさんの真似なんかしないで先行くわよ！」

レナは軽々と下まで滑っていった。

「たかだかこれくらいの距離しかないんだから、がんばって降りてきて〜！」

「トホホ……」

これじゃ、ただの拷問だよ……」

「……まさか、怪我するとは思わなかったわ」

「ま、かすり傷だけだね」

志隆達はロツジで傷の手当てをしていた。

「でも、頭とかに当たらなくてよかったわね。

運だけはいいのね」

「ま、あれだけの死生物に遭って生き残ってるんだからね」

レナがおどろいた顔をする。

「言葉出しちゃだめよ！知るわけ無いんだから！」

「こんなのもだめなの？」

「一般人にとって、そんな単語とは縁が無いほうが言いの！」

「……一般人、なんて言葉を使ってるほうがはるかに怪しまれると思うけど」

レナがしまった！という顔をする

「……それもそうね」

「じゃ、そろそろ行こうよ。スキー」

「……やっぱりやめることにするわ」

志隆が不機嫌そうな顔をする。

「大丈夫だよ。さっきみたいなのところじゃなければ。それにあんなに払ったんだし」

「お金のことは心配ないわ。それよりもあなたが危険な目にあってしまうのが何よりだめなの。」

観光でもしましょ」

「え……」

せつかく来たんだしさ……」

志隆がまだ駄々をこねる。

「そもそも私が行きたかった場所じゃないのよ。ここは」

「行きたくなかったら、なんで来たの？」

レナが志隆から視線を外して話し始めた。

「それは……もちろん志隆への罰ゲームもあつたけど、嫌いだった雪になんとなく、触れてみたくなっただけなの」

「嫌い……だった？」

「まあ、いわゆるトラウマっていうのなんだけどね。

まだ中学生だったころ、お父さんが単身赴任で東京に行つて、突然倒れたの。心不全で。

すぐに行こうとしたんだけど、吹雪で飛行機も新幹線も止まつちやつて。

次の日はなんとか晴れたんだけど、ちょうど移動してた時にいきなり逝っちゃつて。

ドラマみたいな話だったから、夢だと思つたわよ。本気で。

でも、もちろん覚めるわけもなかった。

当たり前つて言えば当たり前だけど、自分を責めたわ。本気で。学校にはなんとか行つてたけど、ぼろぼろだったわ。いろんな意味で。

三年ぐらい経つて、高校にも行つて、なんとか安定してきたの。

でも、お母さんは、死のう、と言つてきた。

なぜか私も、うん、つて言つたの。

その時が唯一、自分がなんでこんなことしてるのか、わからなかったの。

今だからわかるけど、何もかも欠けてたんだと思う。

お互いに何かをお父さんの姿と重ねて。満足しきれなくて。

でも、ちょうどその日にあそこから呼ばれて、局員になつたけど、結局死んじゃったわ。

その時に私も死んだのかもしれないわね。

昔と今じゃ、違いすぎるもの」

レナが顔を伏せる。

「ごめん。ちょっと行ってくる」

「……………」

レナは志隆に顔を見せないようにして走って立ち去った。

「……………」

第九番が流れる。

それとほぼ同時に、客が騒ぎ出した。

「もしもし」

「わかつてるかもしれないけど、第二十一型死生物リタ出現よ。送るから」

「……どうかしたの？元氣ないけど」

「今はそんなことも言ってられないわ。早く」

「わかった」

志隆が屋上についたところにはすでにエレクシエストがいた。

乗り込むと同時に声が響く。

「今回はレナが不在のため、私、漸漠漚がレオムを担当します。よろしく」

「よ、よろしく」

コンテナが落ちて開くと共に、レオムが中から飛び出した。

「あれがリタか……………」

地面から縦に白黒交互に線が入った四角錐の死生物が白い地面から生えていた。

「AST反応拡大」

「志隆！」

「うん！」

エレクシエストはリタの方へ手を向けた。

リタがそれを放つと同時にエレクシエストの目の前の空間で遮られる。

「?・・・格納庫に誰か居ます」

「ズームして」

監視カメラが一人の人間にズームしていく。

「・・・時野神子?」

カメラをしつかりと見ながら連続して何かをつぶやいている。

「口元をもっとズームして。早く」

さらに口元へとよっていく。

「じ、る、を、だ、し、て・・・・・・・・」

何ですって?」

続いてつぶやいていく。

「こ、う、そ、く、ぐ、を、は、ず、し、て。

わ、た、し、が、い、く、か、ら・・・・・・・・

行かつてどこに?」

それだけつぶやくと、時野は後ろを向いてしまった。

「微弱ですが、確かにジルの脳波が上昇しています」

「自分を取り込まれたというのに、なぜあの娘は怖がってないの?」

静かに歩きだした。

「ハイリスク、ハイリターン・・・・・・・・」

いいわ。解除して」

「いいのですか?!」

「責任はとるわ。」

と言つても、どう取ればいいのか教えて欲しいけど」

「・・・拘束具解除開始!」

ジルが見えなくなると覆っている鉄の塊が少しずつ開いていく。

「第1ロック解除!」

表面の厚い鉄が落ちる。

「第2ロック解除!」

胴体部分が姿を表す。

「第3、第4ロック解除!」

両足を覆っていた二枚の塊が四方へ倒れる。

「第5、第6ロック解除！」

壁に固定していた塊がまるごと落ちる。

「・・・いいですね？」

「・・・ええ・・・やって・・・」

「最終ロック解除！フレーム切除！」

頭部が四方に割れ、全体を覆っていた細い鉄の鎧がバラバラになつて落ちる。

少しも変わりがない、ジルの姿がここにあった。

再び時野がカメラを向く。

「ぶ、り、じ、の、ば、し、て。

ブリッジのばして！」

再び後ろを向くとジルの胸あたりへと通じる道が伸びていく。

音も無く、近づいていく。

ジルの胸に直接触れる。

その時、

時野は倒れるようにしてジルの中へと入っていった。

「・・・何が・・・」

「じ、ジル、脳波上昇！」

「血圧130まで上昇！」

「催眠状態から準覚醒状態になりました！」

ジルの青目が紫色へと変わる。

そのまま自分の手を念入りに見つめている。

「四次元ゲート準備！」

「は、はい！」

手際よく九人が操作を進めていく。

「地下ゲート開放完了！」

「四次元ゲート完了！」

「合図を！」

「エレクシエスト二型機・・・投下！」

「あと44分かぁ……」

操縦室内に振動が伝わる。

「何か用意してくれたのかなぁ……って、え!？」

そこにはまぎれもないジル……二型機が立っていた。

リタが新たに出てきた敵に対してAST粒子砲を放つ。

二型機がエレクシエスト……一型機では考えられない動きで全てのAST粒子砲を避ける。

二型機が走りながら爪をのばしていく。

リタが連射する間隔を短くしていくが、もう意味は無い。

二型機がリタを二つで切り裂くと共に、

「リタ、消滅!」

「凍結解除は……お前にとって是か? 非か?」

二人は向かい合わせで座っている。

だが、美月は目を合わせていなかった。

「……全然わかりません。」

でも、指揮官としては、正解に近いものだったと思います」

「滝網美月としては?」

「間違いです」

由佳里は腕を組み直した。

そして、気に入らなかつたらしく、また元に戻す。

「まあ、お前としてはずいぶんと思い切った選択だな。」

私でもそうしたと思う。

ま、呼ばれることは承知していたとは思っが」

「その話なんですが……まだ召集が来ていないんです」

「ほう。あいつらもあいつらで忙しいときがあるものなのか」

由佳里が感心したように言う。

「何かあつたんですかねえ」

「しつれーしまーしゅ」

「しまーしゅ」

「ん？」

「こんにちはー」

「にちはー」

「こ、こんにちは。

どうやって・・・？ま、いいか。

何しにきたんだい？」

「いつもがんばっているちょーかんしゃんにありがとうをいーにきたでしゅ」

「でしゅ」

「それはどうもありがとう。君たちみたいな人がもつと増えてくれればいいのだがね」

「・・・みたい」

「ん？何だね？」

「馬鹿みたい、って言ったのよ」

「や、やめろ！やめろおおおお・・・」

グシャ

第十六話

第十六話 鴉

「しつれーしまーしゅ」

「しまーしゅ」

教室の静寂を突き破って五歳ほどの少女達が入ってくる。

姿から想像すると、どうやら双子のようだ。

と、志隆の袖を掴んでいきなり走り出した。

「え、ちょ、ちよっと!」

「いくでしゅ!」

教室のざわめきの中、二人と一人は出ていった。

「おい神崎!」

「す、少ししたら戻って来るので、続けてくださーい!」

時野はその様子をいつもよりはかなり困惑した様子で見っていた。

志隆は袖を無理やり引き抜くこともできずにただ走っていた。

「ちよっと!・・・どこいくの!」

すると二人がいきなり志隆を離れた。

志隆は辛そうに呼吸している。

「ずっとあいたかったでしゅ。しりゅーしゃん」

「さがしてたんでしゅよ?」

「何で僕の名前、知ってるの?それに会いたかった、って何?」

二人が志隆の顔を覗き込む。

「だいじょーぶでしゅ。べつにしりゅーしゃんがわしゅれているほどむかしに『こんやく』をかわしたわけでもありませんし」

「いきなり『いしょーろー』してじぶんのことを『しりゅーしゃんのおくしゃん』だにやんて、いわにやいでしゅ」

「考えたことをずばり言い当てられるなんて・・・僕もそろそろか

なあ」

志隆がちゃんと呼吸を整えて、立つ。

「で、僕は神崎志隆っていうことは知っているらしいけど、君達の名前はなんていうの？」

「しんぶるいにやでしゅ」

「しんぶりにやでしゅ」

「神武累奈ちゃんと神武里奈ちゃん？」

二人が同時に口を不機嫌そうに尖らせる。

「『れでい』にちゃんづけしゅるにやんて、おとことしてしゅかくでしゅよ」

「では、二人のレディさん。なんて呼べばいいのでございますか？」

「るいにや『じょーおーしゃま』でしゅ」

空気が一瞬にして硬くなる。

「るいにや、いくらにやんでもしよれはにやいでしゅ」

「だって、こによまえみた『びでお』では、おとこによひとがおんにやによひとを『じょーおーしゃま』っていったでしゅ。

だから、おとこによひとはおんにやによひとを『じょーおーしゃま』っていわにやきやにやらにやいんでしゅ」

「しようにやんでしゅか。しらにやかつたでしゅ」

「・・・一体、何見たんだろ」

志隆がわかつているようでわかつてなさそうな顔をする。

「でもやつぱり、よびしゅてでいいでしゅ」

「・・・本当によかつた・・・」

どこか遠くで授業終了のチャイムが鳴った音がした。

志隆があわてて時計をさがしはじめ。

そして、思わず冷や汗が滴る。

「ごめん。僕、もういかなきゃ」

「しゃよにやらでしゅ」

「またあいましょうでしゅ」

二人が満面の笑みでちぎれんばかりに大きく手を振りながら、志

隆を見送った。

そして、角を曲がっていった瞬間に、力無く落ちる。

「第一印象はなかなかでしたね」

「あとはうまくこちらがわに引き込めるかどうかね」

「二十型はどうしますか」

「気に入らなくなったら、腹いせに蹴ってやれ」

「わかりました」

「ギリギリセーフ」

「「バリバリアウト」」

志隆が静かに肩を落とす。

「やっぱりか……」

「志隆が走った距離ぐらいなら、チャイムぐらい聞こえたでしょ？」

「聞こえたけど、空耳、という可能性に賭けたかったんだよ」

「で、」

一気に三人が志隆に詰め寄る。

「「妹？」」

「「違う」」

「「「親戚？」」」

「「「違う」」」

「「「駆け落ち相手？」」」

「「「そうだよ。」」」

「……って言ったら困ると思うけど」

「「「つまんねー」」」

三人が元の立ち位置に戻る。

「じゃ、何だったんだよ一体」

「わかんない。単にサ行とナ行がちゃんと说不い五歳ぐらいの双

子、ってしか今は说不いかな」

「ふーん。幼 度99・99%ね」

すかさず鈴木が聞き返す。

「残りの0・01%は？」

「力行と夕行と八行とマ行とラ行がちゃんと言えないこと」

「つまりは、ア行とヤ行とワ行とン行以外ちゃんと言えないと駄目なんだね。」

「けっこうきびしいと思うけどなあ」

「ン行？」

篠崎が反応する。

「だってあいいうえお表の最後に『ん』ってあるでしょ？」

「あれって『ん』っていう行じゃないの？」

「いや、『ん』は『を』の次にあるぞ」

「それはゲーム上で場所がもつたいないからだろ？」

「ほんとのあいいうえお表は小一の国語の教科書に書かれてるやつだよ」

「でも、『ん』って『あ』でも『い』でも『う』でも『え』でも『

お』でも『ん』の形の口にすれば『ん』って発音するわよね」

「そもそもどの列に属してるんだろ？」

「……うーん……」

その時、

「『ん』はそもそも五十音の中に入っていない言葉。」

どの列にも入っていないし、『ん』行っていう行も存在しないわ」

時野の意外な口出しによって問題は解決した。

「じゃあな。志隆」

「じゃあねー」

「バイバイ」

「じゃあねー！」

三人は薄くなってきた影を揃えながら走っていった。

「時野」

「23分35秒」

時野が自転車をひきながら出てきた。

「そんなに!？」

「あなたがあの人たちと話しているからでしょ」

「まあ、それもそうか……」

時野が先にこいで行ってしまうと、志隆が後を追うように走っていく。

「そういえば、時野ってジルに乗ったんだよね」
「……」

「美月から聞いた話によると、倒れるみたいに吸い込まれたって言うたけど、中はどんな感じだった？」

「当たり前だけど、気持ちよかった」

「当たり前かな？」

あたりのナトリウム灯が次々に点いていく。

「すぐにわかるわ。あなたにも」

「僕にも乗れるの？」

「乗れないことは……ない。」

でも、出られなくなる」

「何でわかるの？」

「知らないわ」

志隆が時野のスピードに合わせるようにして一車線だけのコンクリートを走っていく。

たまに二人の影が薄くできるだけだった。

「ああゝあ。私も恋とかはじめてみようかなあゝ」

志隆の部屋よりも明らかに具合の良い部屋に一人のオペレーターが私服でくつろいでいた。

「やっぱり狙うなら志隆くんより断然清輝くんだなあゝ。敵も多いし。」

でも、結局レナと清輝くんの関係って一体何なんだろう？

昔からの幼馴染、みたいな感じもあれば、何かそれ以上の関係を見せることもあるし。

裏で付き合っていたりして」

「お昼のニュースをお伝えします。

まずはじめに、速報です。

防衛庁長官を除く、17人の国務大臣が長官室より飛び下り、全員死亡していることが確認されました」

「な、なんだってー!？」

「局長!」

「ええ。わかっているわ」

すでに指揮室のモニターにはあらゆるテレビ局が映し出されていた。

「何かあったんですか？」

「検討もつかないわ。国務大臣が全員揃って集団自殺するのも考えられないし。」

しかも、長官も死んでいることは確認されてないけど、行方不明だし」

あるテレビに発見者が飛び下りた時刻を詳細に示した一覧が載っている。

「・・・もしかして・・・」

今すぐJRに今日の東京付近路線の発着詳細一覧、それと警察庁に今日の東京付近交差点の信号の表示色詳細一覧を用意させて」

「わかりました!」

「それと、桜」

「何ですか？」

「制服、着てきたら？」

「一致しません」

「小学生でもまだだめなのね・・・」

桜が入ってきたときにはすでにほぼ作業を完了し終わっていたようだった。

「あの、何やっているんですか？」

「ああ。制服着てもらってもうしわけないけど、もう終わってしまったわ」

「・・・はぁ・・・」

「とにかく、これを見て」

モニターに東京付近の地図が表示され、ところどころに点が打ち込まれてあった。

「何ですか？これ」

「いいから見てて」

「はじめて」

「了解」

別のオペレーターが何かをパソコンに打ち込んだ。

すると、地図が一気に都心部へと拡大表示され、点から何か線のような物が出てきた。

「今までの事件を全て『同一人物による殺人』という仮定の元でシミュレーションしてるのよ」

「同一人物による殺人！？」

線が次の点へと到着すると、しばらく経ったあとに点が消え、また線がのびていく。

「最初に殺された労働省をスタートとして、その時間の正確な信号の移り変わり、電車の発着を打ち込んだ上で時間通りにたどっているの。」

「ちょっと遅いから、早送りして」

「了解」

線がのびるスピードが三倍ほど速くなる。

そして、

「シミュレーション、完了しました」

「可能性は有り・・・ね」

「でも、少し待ってください。」

そもそも、職員以外の誰かが入ってきたら、防犯カメラに写ると

「思いますし、警備員もいるのでは？」

「実はもう一つ裏があってね、各庁の長官が死んだあと、七分六秒後に警備員が突然、もっているはずのない拳銃で職員を大量に、しかも一発で仕留めた後に自殺する、っていうのもあったのよ」

「七分六秒ってもしかして……」

「そうよ」

美月がパソコンに

7 : 0 6

と打ち込む。

そして

6 : 6 6

と直した。

「ほとんどが仏教徒の日本にとってもあまりにも悪趣味すぎる数字だわ」

「……ですね」

「そして、もう一つ気になる事実」

「何ですか？」

「このシュミレーション、

だいたい幼稚園児の平均歩行速度で完了してるの」

第十七話

第十七話 狐

「ほ、ほんとに来ちゃったよ……」

「常夏の楽園、ハワイへようこそ」

同じ北半球とは思えない季節の風景がそこに広がっていた。

「っていうか、ほんとに、ここ、地球なの？」

「当たり前じゃない」

「で、ほんとにかりんさんと二人きり？」

「かりんさんだなんて、呼び捨てでいいのよ？」

志隆ががっくりと肩を落とす。

「ごめん。生きて帰れないかもしれないよ」

「何も殺すまではしないわよ？」

「いいえ。その行為自体が人を精神的に殺すんです」

今度はかりんがため息をつく。

「さ、行きましようか？」

「え、え？」

いつもの調子とは明らかに違う、かりんがいた。

「さてと、ホテルに到着！」

「で、どこ行く？海？観光？買い物？」

「あ、あのさ……」

志隆が不安気に尋ねる。

「あ、ああ。そりゃ驚いても仕方ないわよね。

私、本当はこういうキャラなの」

「いつもそれなら別にいいのに」

「今回は特別。」

それと場所とかでキャラ変えるのは私の特性……みたいなもの

かな。

もしかしたら、反動で戻ったときにもっとすごいことになっちゃうかもね」

「・・・それは、それで困るね」

このような口調に変わると、彼女もただのエロ女では無いことがよくわかる。

もともと、美人でかわいいことに変わりは無いのだ。

「で、どこ？」

「うーん・・・どこに行きたい？」

「海が面白い物！」

「じゃ、買い物で」

「じゃ、レッツショッピング！」

「うーん・・・これって・・・一緒に買い物してるのかなあ？」

「荷物持ち荷物持ち！」

両手にはぎりぎり掴みきれるか掴みきれないかわからないほどの袋の紐が引っかかっていた。

「そういえば、このお金ってどこから出てるの？」

さつきからずっとキャッシュだけど」

「国」

「・・・年金の無駄遣いってやつだね・・・」

かりんはまだショーウィンドウを見てまわっている。

「大丈夫よ。どうせ予算は何百兆とあるんだから。」

一円玉が一億枚ある中から一枚取ったって誰も気づかないわよ」

「・・・そりゃそうだけども・・・」

って、百万円も使う気なの？」

「もっちゃん。」

あ、これ英子に・・・」

二人の動きが止まる。

と同時に、二人が持っているものが地面に散らばる。

「……え？」

志隆は散らばった袋を戻そうとしなかった。

「覚えてるの？」

次々と言葉が溢れ出す。

「背中についてる青髪で」

「めがねをかけていて」

「十七歳で」

「女子で」

「エレクシエストパイロットで」

「防時局局員で」

「最後に」

「水族館に行く約束をした人」

かりんが志隆へと飛び込んでくる。

「覚えてて……くれたんだ……」

「覚えてたよ……ずっと……」

「みんな忘れてて……」

「誰も覚えてないと思ってた……」

第九番。

「もしもし」

「第二十二型死生物、モラがハワイ上空四十三kmに出現よ。」

残り三分十五秒で衝突するわ。

「……誰か近くで泣いてるの？」

「かりん……だよ」

「……そう」

無言で電話が切られると共に一型機と二型機が出現する。

二型機が志隆に向かって手を差し伸べる。

「……行くよ」

「……死なないで」

「時野がいるから……大丈夫」

手に乗ると操縦室へと手が向けられる。

乗り込むと共に、二型機も立ち上がる。

「もう見てると思うけど、今回からは二型機も戦闘に加わるわ。その代わりにレオムは投下しないことにしたから」

「わかった。」

何か打ち返せそうなやつ頂戴！」

「、投下！」

ビルほどもあるハンマーが投下される。

下では大勢の旅行客がカメラのシャッターをしきりに押していた。

「敵衝突ルート変更！東へ約二kmずれました！」

「衝突まで残り三十秒！」

二機が同時に走り出す。

「二型機でも間に合うかどうか……」

「ハワイをただの海底火山には変えたくないわ。」

リミッター強制解除！」

「一型機リミッター、強制解除しました！」

二機がほぼ同じ速度で走っていく。

「北へ約一kmずれました！」

「衝突まで残り十五秒！」

一型機が方向を変えるが、二型機はその場でしゃがみこむ。

「何をしているの！」

「……」

地面を蹴った反動で上空へと飛び出すと、まるで飛んでいるようにモラに向かっていく。

すでに肉眼で何かがあるのがわかる位置にあった。

「ジルが……飛んでる……」

二型機が両手を構える。

モラと垂直に重なったとき、

二型機の両手と反対方向にモラが水平にホテル街を貫通していった。

一型機がようやく到着すると、レバーを戻し、リミッターを設定

し直した。

二型機は自分の腕を取りに走っていた。

「時野、大・・・丈夫？」

「・・・痛くは無い」

右腕の肩の部分と右肩を倒れこむようにしてつけるとそのまま何も無かったかのように接合した。

間接のおかしな部分を強制的に直すと、今度は左腕を左肩につける。

「・・・」

「・・・私よりも二十二型に注意して」

モラが瓦礫の中から姿を表すと、その小さな球体の中から無数の帯状の触手が生えた。

触手によって二機までの間にある瓦礫を一撃で粉碎すると、そのままゆっくりと近づいてくる。

「私が足止めをするから、攻撃をして」

「・・・わかった!」

急激にスピードが上がると一気に一型機を包み込もうとする。

その間へ二型機が仁王立ちすると全ての触手があらゆる部位にまきつく。

それを何とか解放されている右手でまとめる。

「・・・早く」

一気に四脚で跳躍すると を振りかざす。

が柄から真つ二つに折れ、モラの本体にヒビが入った。

柄をその場に放り出す。

「より少しでかいやつ!」

「、投下!」

一型機にとっては手ごろな手斧が出現する。

「やあああああああ!」

一型機が を振りかざす。

「モラ、消滅!」

「いつ頃・・・わかったの？」

「次の日。」

茜に『どうして泣いてるの？』って言われた瞬間」

「茜？」

「ああ・・・オペレーターの人。」

何もわかるわけないのにビンタで返したから、しばらくは話せないと思うけど。

それより・・・。」

かりんが耐え切れなくなったように志隆へと抱きつくと、誘惑するような目で志隆を愛しそうに見つめる。

しかし、志隆はそのままかりんがつい先ほどまでいた場所を見つめている。

「ねえ・・・私と」

「体で埋めるのは簡単だけど、そんなの自虐行為だよ」

かりんが今、汚そうとしていた唇をゆっくりと離していく。

そして、志隆から目を離す。

「ごめん・・・。」

こうでもしないと、潰れそうで・・・。」

「逃げちゃ駄目だよ。」

見つめないと・・・何にもならないよ」

「・・・優しくすぎるよ。」

突き放したほうが、まだ楽なのに。

受け入れてくれたほうが・・・まだ楽なのに」

第十八話

第十八話 縹

「じゃあな。志隆」

「じゃあねー」

「バイバイ」

「じゃあねー！」

志隆は、また、無理に明るく振舞っていた。

「1分」

「時野」

「・・・何」

「もう一回聞くけど、なんで英子さんの記憶を消さなかったの？」

「それはあなたに」

「かりんさんの記憶も」

「少しも驚いてはいなかった。」

「・・・聞いたのね」

「うん」

「・・・」

時野が少し気まずそうに目を右下に向けた。

「答えて」

「・・・元々、あなたの記憶は故意に残ったものじゃなかった。」

「あなたが防時局内にいたからなのか、何か特別な能力があったからなのかはわからない。」

「だけど、元々あった記憶を少し変えることしか出来なかった。」

「もう一人も同様に」

「・・・」

「・・・」

「それと」

「一人じゃない。涼白かりんだ」
「・・・」

続けざまに志隆が言い放つ。

「それは事実？」

「ええ」

「黒は一つも無い？」

「ええ」

「なんで消せなかったの？」

「わからない」

「嘘をついた意味は？」

「・・・わからない」

時野のむなぐらをつかんだ後、事態を察知したようにそのままゆつくりと解き放ちながら離れた。

「・・・わかった・・・」

「・・・たわね」

「何？」

「何でもあるけど・・・何でもない」

「カラオケ来たはいいけれど」

「誰もうまくないヘタレな事実」

「ああ暇ああ暇ああ暇だ」

「俳句調になりまとめダメダメ」

「・・・ダメだこりゃ」

四人は主人の膝の上に頭を乗せる犬のようにいた。

流行の曲が流れているが、誰も歌おうとしていない。

「いいだしっぺって、誰だっけ？」

「私」

「つかえねーな、委員長」

「鈴木って言いなさいよ」

「そういえば、三人の名前って何だっけ？」

考え込み始める。

「うーん．．．．．」

「うーん．．．．．」

「うーん．．．．．」

「うーん．．．．．」

「うーん．．．．．」

志隆が考え込むのをやめる。

「．．．リアルに覚えてないの？」

「完全に忘れてるな。全員」

「なんだったっけかな」

「自分の名前も覚えてないなんて、情けない．．．．．」

「情けない．．．というより、かなり論外な事実だけだね」

新しい曲がはじまる。

「．．．ん？これって．．．．．」

「去年の合唱コンクールの自由曲の原曲ね」

「結構懐かしいな」

「歌ってみる？」

「アルトもバスもないけどね」

誰とも言わず静かに歌い始める。

伴奏からすると元気な曲調だが、四人で歌っている曲調は、どこ

か物悲しげな感じがした。

「あさーの．．．ちよつと鈴木、何うつすら潤んでんのよ」

「そういえばこれの前の日誕生日で、来年の今ごろは抜け駆けでき

ますようにって、願ってたのを思い出したの．．．．．

あと三週間しかない．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「去年に戻るなら、去年の自分に全力で土下座したい．．．．．」

「

「大丈夫。仲間がいるじゃない。ここに三人」

志隆は、自分がちゃっかり仲間に入れられていることに多少困惑してしまっていた。

「ちよつと待て。」

「お前からここに来た意味を忘れちゃいないか？」

「「そつういえば」」

「三人が今までのことなど忘れ、一気に志隆に付着する。」

「志隆と」

「時野さんの」

「関係は一体何だ？」

「・・・はあ？」

「小暮がポケットをまさぐる。」

「場合によってはお前を」

「待て。ちよつと待て。小一時間待て」

「篠崎が志隆の顔面に紙をつきつける。」

「すでに証拠がこれだけあがっているのですが？」

「え？正直なところを言ってみたらどうなんだ！」

「小暮がペンライトで志隆の目を直接照らす。」

「ま、眩しいって」

「さあ、言え」

「さあ、言え！」

「さあ、言え！！」

「志隆はほぼ脅迫され、びくつきながらなんとか言った。」

「と、友達・・・かな」

「なおも引き下がらない。」

「嘘つけ。私と一緒に帰ったことなんか無いくせに」

「だって、鈴木とは別方向だし・・・」

「じゃ、何で私とは帰ったことあるの？」

「一瞬空気が凍りつく。」

「はあ！？」

「聞いてねえぞそんなこと！」

「だって、小暮と鈴木が帰ってるのを見たから……………」
「あ」

「ちゃっかりギャルゲ方向に転換ですか？」

全員が一気にため息をついた。

「……バツバカバカしい……」

「こことか……どうかな？」

「……男二人でデイズニーはかなりキツイぞ」

二人は清輝の部屋で次の旅行にどこに行くかを、雑誌を見ながら真剣に話し合っていた。

「そういえばさ、ぶっちゃけた話、レナとはどうなの？」

「……は？どうって何が？」

「そろそろとぼけるのにも限界があると思うけど」

志隆の頭にフリスビーのように雑誌が直撃する。

「……ついにお前まで感染したか。」

全く、局員といい、局長といい、操縦者といい……………
本当に馬鹿ばかりだな。ここは」

「だって、端から見るとどう考えてもそう見えるよ？」

「俺は赤髪で赤目で外人のオペレーターなんかに興味は無い」
志隆の目がますます疑いの色を増す。

「……否定すれば否定するほど、ますます怪しい」

「……お前は俺の口から肯定の言葉しか聞きたくないのか？」

というか、否定も肯定もせずにその事実を否定するにはどうすればいいわけよ」

「そうだな……僕の目の前でレナに向かって『嫌い』って言えばそれでいいよ」

清輝が頭をかきながら考え始める。

「……それはそれでいろいろと問題が」

「じゃ、好きなんだね？」

「じゃ、お前と時野神子はどうなわけよ？」

清輝が逆襲を開始した。

「えっ!？」

「っていうか、話題を」

「ど・う・な・ん・だ？」

とたんに志隆がモジモジしはじめる。

「・・・すぐには答えられないよ」

「じゃ、もし告白されたらどうする？」

「・・・多分・・・付き合うと思う」

志隆が顔を真っ赤にしながら答えた。

「告白されたら、といえば、残りの三人はどうなわけよ」

「・・・？」

「かりんとあいつとチビ」

志隆が考え込み始める。

「ここに巨乳が加われば、年上、年下、同年代で選び放題だったろうになる。もちろん、実年齢じゃなくな」

「一番脈アリなのは美月なんだけどさ・・・」

志隆が搾り出すようにしていった。

「おお。早くも呼び捨てがはじまっていたか」

「いや、どう考えても『さん』付けとか敬語とか無理だし」

「ま、顔と体つきを見ながら言えば、な」

志隆は疑問を持った。

「話すとき見てないの？」

「ああ」

「それじゃ、今度そうやって話してみようつと」

今度は清輝が少し考える。

「・・・お前の場合、それはやめておいたほうがいいな」

「どうして？」

「自分の好きな相手が、いきなり自分の目を見て話さなくなったら、傷つくだろうが」

「・・・確かに。」

っていつか、清輝って以外とそういうこと考えてるんだね」

「まあな。ここに閉じ込められる前はそれなりにやってたからな」

「へー。少し意外」

志隆がやる気無さそうに答える。

「・・・あのさ」

「何？」

「興味ある話題と、そうでもない話題でさ、態度急変するのやめたほうがいいぞ」

「ご、ごめん。それなりに気をつけてはいるんだけどね・・・」

「

「・・・で」

清輝が志隆に接近する。

「結局誰なんだ？」

「うーん・・・」

かりんは、この前の旅行でかなり意外なのを見たし・・・
美月は、引っ込み思案そうで、意外とそうじゃなかったりとかするし・・・

レナは「・・・？」

「・・・どうした？」

志隆が気づいたように言う。

「そういえば、僕の中でいつの間にか、レナが恋人から友達に格下げにされてるよ」

「・・・本人が聞いたらどんなに悲しむことか・・・」

で、時野神子が入れるのか？入れないのか？

「うーん・・・どうだろう・・・」

清輝も考え出す。

「俺では、容姿以外に長所が見当たらんのだが・・・」

ところで、志隆はかわいい派か？きれい派か？」

「かわいい・・・だと思う」

「じゃ、確実にターゲットは一人以外、いなくなっちまうじゃない

か」

「でも美月はどっちかというときれい・・・あ!」

志隆の脳裏に二人の姿が浮かぶ。

「・・・・・・・・」

「・・・どうした?」

「ごめん。ちよつとロープ持つてくるから椅子準備しといて」

「・・・何があつたかはわからんが、とりあえず、いろいろとやめとけ」

行きかけた志隆がとぼとぼと戻ってくる。

「・・・やっぱり考えすぎだよね」

「・・・そうなんだろうな。多分」

二人が同じ方向にベッドに倒れる。

「しかし、お前も豪勢なやつだなあ。

それなりにやれば、エロゲ展開も十分に有りえるのに」

「『それなり』が一番やりたくないんだって」

「・・・・・・・・」

「決めた!!」

「な、何が?」

「お前のダチと一緒にさ、遊び行こうぜ」

「・・・意外と質素だった」

「・・・悪かったな」

第十九話

第十九話 褐

「で、こつちがこの前話してた清輝」

「よろしく」

「どう」

「「よろしくお願いしますっ!!」」

清輝がたじろぎながら答える。

「よ・・・よろしく」

「で、この三人が噂の小暮と鈴木と篠崎」

「ま、よ」

「「よろしくお願いしますっ!清輝さん!」」

二人がありえないほどに目を輝かせながら言った。

「呼び捨てで・・・いいぞ」

「「はい!わかりました!」」

「では早速吉良風市へ・・・っと!」?

志隆が二人に引きずられていく。

「ちよつと志隆」

「な、何?」

一般的に見ると、二人のやくざに囲まれて怯えている、か弱い女性のように見える。

無論、性別を逆転させて。

「何で、あのお方を私たちに紹介しなかったのよ!」
すでに殿方呼ばわりである。

「これには、国家的機密が」

「私たちはつまらない冗談を要求してるわけじゃないの」
「だってほんと」

「そんなことはどうでもいいのよ!」

志隆が国家的機密機関に所属しているようが、大怪獣と戦っているが今は関係ないの！

とにかく」

「おい。その三にーん」

「黙ってるこぐ……」

清輝」

その姿を見た瞬間に二人の表情が一変する。

「……女とは、恐ろしい生き物である」

「何か言った？」

「……何でもないことにしとく」

「なあ」

「何？」

二人はアーケードの格闘ゲームを楽しんでいた。

「割合2：2で、よくそういう展開にならないよな」

「鈴木と小暮は微妙にそんな感じになってるけど」

「ほー」

二人の手は止まることを知らず、互いの技の止め返しが続いていた。

「……」

ボタンを連打する音のみが響く。

「じゃ、お前と篠崎は？」

「うーんと……多分ないな」

「多分、って何だよ」

志隆がほんの少し遠い目をする。

「まあ、実際僕は二人のことをただの友達としか見てないし、仮に告られたとしても、振って崩壊するだけだと思う」

「ほー」

その瞬間。

清輝に連続ヒットが炸裂し、画面にK・O・の文字が映された。

周りから歓声があがる。

「・・・ブランクはきついな」
「どんまい」

「おーい、終わったよー」

「で、勝敗は？」

「志隆」

二人が鋭い目でにらみつける。

「・・・」

思わずたじろぐ。

「ま、まあ、外見とかは関係なしにこっいつのは能力と積み上げられた経験だからね。」

二年もやってない清輝がこれだけ張りあえたのは、ある意味すごいよ」

「・・・」

なおも続く。

「・・・次行くか？」

「あ、うん！行こう行こう」

今度は小暮が志隆を引きとめる。

「な、何？」

「あのな・・・」

うちの財産を知ってて、クレインゲーム係にするのはやめろ。要らん物ばかりおごらされる」

「じゃ、一緒に来なよ。今度はシューティングだから」

「・・・すまん。恩に着る」

小暮が志隆の肩に手をかけながら涙を流す。

「で、物は相談なんだが・・・」

「何？」

「三回チャレンジまではせめておごってくれ」

「・・・」

五人がほぼ同時に100円を投入する。
やる前からすでに観客が出来ていた。

「一応言っとくけど、どこまで進むかじゃなくて、ハイスコアで決めるからね」

それぞれが操作する機体を決める。

「3、2、1」

ゲームスタートの音楽が流れた。

「それよりも志隆」

「何？」

「・・・格ゲーといい、これといい、お前らはここらへんでそんなに有名なのか？」

志隆がいつも細い目をますます細めた。

「何でも、別名『ゲーセン荒らし』らしいね」

「・・・たいそうご立派だな」

「ま、ゲーオタが四人も集まれば、これくらいどうってことないよ」と言いながらやっているが、このゲーム、画面の九割近くを弾が覆っている。

いわばカスつてなんぼの弾幕系シューティングゲームである。

今まで聞いたことが無い音が響いた。

「・・・ちっ」

「小暮、中ボスに何やられてんだよ」

「ボム温存しすぎなんですよ」

「貧乏性が祟ってるわね」

「・・・もう何とでも言え」

清輝のマシンからも聞こえた。

「・・・ちよつと待てよ。」

これ、市販ゲームの域じゃねえぞ」

「何でも、この店が対僕達用に用意したバランス崩れまくってる一昔前のやつらしいからね」

「・・・店もお前らの存在には気づいているわけか」

「挑戦状叩きつけられたのはこれで十回目だけだね」

「全戦全勝？」

「全戦全勝」

店内には、しばらく興奮と安堵の聲がこだましていた。

「いやゝ久しぶりにやったわねゝ」

「息抜きには最高ねゝ」

「いやゝ、腰が痛い」

「・・・・・・・・」

「・・・三十分で全十二ステージをクリア。

しかも、ボムを二十個も余らせるといふ卑劣っぷり。

一体、何者だ。お前ら」

二人を除いて、全員が伸びをしていた。

と、志隆の携帯電話が鳴る。

「もしもー」

「キラカゼ北500mに第二十三型死生物、ロン出現よ。

ところで、今、どこにいるの？」

「ええつと、ここは・・・・・・・・」

清輝が志隆の携帯電話を取り上げる。

「吉良風市神賀浦駅前商店街約1300m地点に投下していただければそれでいいです」

「わ、わかったわ」

「それと、一緒に乗りこみますので、先に謝っておきます」

「え！？ちよつと待ち」

清輝が通話を切ると共に、素早くバッテリーを抜き取った。

「行くぜ志隆」

「あ・・・うん」

走り出す二人に向かって小暮が声をかける。

「ちよつと待て！どこ行く！」

「「ちょっと野暮用で」」

「さて、行くぞ。志隆」

「にしても、何のために？」

清輝は後ろのコクピットに乗っていた。

「最近やってないからな」

「いや、そんな理由で」

「操作は譲らしてもらうぜ」

志隆側の操作が利かなくなった。

「ちょっと！」

「ま、庁の方には適当にごまかせるさ。

よこせ！」

「………」

「よこせ！！」

「……投下」

一本は取ったが、もう一本は地面に落ちた。

「……鈍ってやがる」

一型機はもう一本を抜き取った。

「じゃ、頼む」

「………」

「おい、運んでくれよ」

「あなたの指図を受ける気なんてない」

二型機は微動だにしない。

「あん？今なんて」

「時野、お願い」

「……わかった」

二型機が一型機の首を持ち上げる。

「ちょ！」

そのまま、ハンマー投げの要領で投げ飛ばした。

数棟のビルをまき沿いにしながらなんとか着陸する。

「・・・あの女」

「まあまあ」

一型機が立ち上がると同時に二型機が到着する。

そして、山からロンがあらわれた。

「・・・っ!!」

清輝がリミッターを解除する。

「でああああっ!!」

通りざまにロンを薙ぎ払う。

しかし、残されたのはわずかに残された取っ手と刃先だけだった。

「・・・ちっ」

「清輝、危ない!」

一型機に両側から円錐型の二本の腕らしき物が襲い掛かる。

肘が悲鳴をあげた。

「おい、てめえちっとは手伝うとかしねえのかよ!」

「・・・」

「おい!」

「あなたと一緒に戦う気なんてない」

「・・・一途な野郎が!」

肩や肘から部品が次々に飛び出し、ついに前腕全てで何とかおさええていた。

「清輝!お願い!変わって!」

「・・・」

「死にたくないなら、変わるからね」

「・・・」

「変わりなさい!清輝!」

「・・・」

その時、ロンの本体と右側の腕をレールガンが撃ち抜いた。

ロンが対象をレオムへと変える。

「・・・レナ」

「・・・」

レオムが猛追され、あっけなくつぶされた。

「志隆」

「・・・うん」

志隆がリミッターを設定し直す。

「行くよ！時野！」

「・・・わかった」

二本の腕が二機に襲い掛かる。

あからさまに一型機は押されていた。

「・・・くっ！」

腕の中心部に右腕を無理やり食い込ませると、左腕も無理やりその穴にねじこむ。

そして、再びリミッターを解除した。

「割れるおおおおおおお！！」

亀裂が食い込ませた部分から広がっていく。

ロンが腕を無理やり引きずり出し、もう一度激突しようとする。

一型機は尾でそれを粉々に消し飛ばした。

「時野、頼んだ」

返答は届かず、二人は暗い部屋に閉じ込められる。
涙を聞きながら。

第二十話

第二十話 練

志隆は走っていた。

病室へと。

そして、戸を開ける。

「……………」

「……志隆」

そこには、美月と横たわっている時野の姿があった。

「どうなの？」

「今のところ、気絶しているだけ」

静かにそこに横たわっていた。

すぐにでも起きだしそうに。

「あれだけ無残に頭部をやられてからの猛反撃もすごかったけど、その後に気絶してその場に倒れているとは思わなかったわ」

「潰された……んだよね」

「そう」

静かに時野の脈拍を告げる電子音のみが時が過ぎていることを告げる。

「ねえ」

「何？」

「時野は……時野神子は、あなたにとっての何なの？」

志隆が少しためらう。

「単純に言えば、守らなければならない存在」

「強いのに？」

「僕より強いけど、守らなければならない……というより、守った気になってなきゃならない存在」

「私より？」

「……」

「……どつちだろ」

「はつきりして」

「……」

「ごまかさないでよ！」

「イエスとノーの間にだって……答えはあるよ」
殴った。

平手ではなく、拳で。

「最低」

そついい残すと、平静を装って病室を出て行く。
戸を閉めた直後に走っていく足音が聞こえた。

「……」

志隆は時野がいることをわかっていながら、目の前のベッドを思い切り蹴る。

時野は志隆に気づかれないように志隆を確認し、再び目を閉じた。

「よっ」

「……おっす」

いつものあいさつをして、二人は通り過ぎようとする。

「なあ」

「何？」

目を合わせることは無いまま、二人とも逆を向いて横に並んでいた。

「お前、何でわざわざ？」

「ば、ばか！」

べ、別にあんたを救ってやったんじゃないからね！

あんたを助ける気持ちなんか、米粒よりも無いんだから！」

「誰もそんなことは言っていないさ」

赤くなってしまった顔がますます赤くなる。

清輝は軽く笑っている。

「だって……」

「ま、A S T粒子より多けりゃ、それで十分だ」

「……遠まわしに言うんじゃないわよ」

「何がだ？」

清輝がレナをいじっていることが、二人の顔を見るだけでよくわかる。

「……」

「感謝してますよ。そりゃ。

お前が怒鳴り声をあげなかったら、多分、いないからな」

「……たんに言わないで」

レナがつぶやく。

「ん？」

「簡単に言わないで！

……って言うてるの」

「俺が死ぬのが怖いのか？」

「そ、そんなわけないに決まってるでしょ！

そ、操縦者が減るのが困るだけよ」

「ふーん……」

かなり意味深な言葉を発する。

「な、何よ」

「……」

清輝は答えようとしない。

「何とか言ったら？」

「そういえば、かなーりキツイ一言だと思うが、志隆が、レナは友達になった、って言うってたぞ」

「あっ、そう」

思わず清輝がレナを見る。

「……そんなに軽くていいわけ？」

「ま、多分そうなるんじゃないかとは思ってたわよ。
かりんも身を引いたようだし。」

志隆の三角関係の行方も見守っていききたいし」

清輝が向き直る。

「ほー。」

なんだかんだで、意外と優しいところ、あるんだな」

「あ、あんたに誉められたって何にも」

「かりんは」

レナが清輝の靴を思い切り踏んづけた。

「残念。お前用の防御策は全て施してある」

「・・・受ける気まんまんね」

「まあな」

「・・・認めた」

「おかしいか？」

「いいえ」

しばらくの沈黙。

「近頃、俺とお前の仲がいろいろと言われてるらしいな」

「由佳里さんの効力もあつてね」

「この際、付き合ってみましょうか？」

「・・・は？」

思わず固まる。

「どうせ、食事とかそういう」

「断るならしつかりと断れよ。」

もつとも、お前の性格上、それは有りえなさそうだが」

「・・・マジ？」

「本気と書いてマジですが何か？」

静かに向き直る。

「・・・信じられない」

「嬉しいのか？呆れてるのか？」

「・・・さあ」

「じゃ、信じさせてやるから」

「・・・」

信じ込ませるのに3秒もかからなかった。

「・・・・・・・・」

「信じる気には・・・なったか？」

「・・・好きじゃなかったら、どうするつもりだったわけ？」

「交渉決裂。崩壊の末路だ」

「・・・ほんと・・・ばか。」

呆れるわ」

「で、何よ。」

「了承ですか？決裂ですか？」

「・・・・・・・・」

返答は無い。

「どっちみち即答してくれるとは思ってたんだが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「決断の時間まで、5！4！3！2！1！」

「・・・・・・・・」

「・・・付き合ってくださいよ。」

せめてボケぐらい」

「・・・・・・・・」

「ちょ」

「あーもううるさいうるさいうるさいうるさい！！何よ純情な女の子がゆっくり答えを考えてるって言うのに！あんたにはそれを守ることも出来ないほど男らしさっていうのが欠けてたわけ！？もう最低！最低にもほどがあるわ！ミジンコだってあんたより天才よ！大天才よ！もうバカらしいったらありやしない！何！？そういう真剣な場面でもあんたはボケが必要だとも思ってるわけ！？これからの一生を変えるかもしれない大事な決断だっていうのに、そんな漫才みたいなことやっぺられるわけないでしょ！もういいわよ！もういいわよ！つまりあんたは私からさっさと答えを聞きだして浮かれ踊ることしか創造してないんでしょ！勝算しか考えてないナルシが！もういいわよ！私が考えていたことを二百字以上二百四

[illegible]

レナは暴言を吐き散らしながら廊下をずかずかと歩いていった。

「バーーーーーカ!!!」

廊下に共鳴して、無限に広がっていった。

「全」

「お前がだよ」

「イエスとノーの間に答えがある場合だって、もちろんあるさ」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

美月はずっとうつむいたままだった。

「志隆を信じられなかったんだな？」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

ゆっくりと頷く。

「後悔してるな」

•

「どうする？自分から謝るか？謝るのを待つか？」

「……悪いのは志隆です」

「指揮はいくら真似してもいいが、そういういらんところを真似するのはよせ」

•

「かわいいんだかかわいくないんだか」

由佳里が仕方ないように携帯電話を取り出す。

「・・・おう。屍か？・・・お前はいつまで経っても変わらないな。彼氏が欲しくないのか？・・・自分の心に嘘は・・・わかった・・・あ、そうそう。私の買った券を全て美月に・・・相変わらずだな・・・もういい。漣に代われ。」

「・・・おう漣。久しぶりだな・・・だから私は『元』だと言ってるじゃないか。だが今回は若干、『元』を取らせてもらう・・・私の買った券を全て美月にかえろ・・・無理だからこそお前に言っているんじゃないか・・・さっきまで話していたのを聞いていないのか？・・・じゃ、頼む。それと、相変わらずか？・・・お互いがんばろうな。いろいろと。じゃあな」

由佳里が携帯電話をしまう。

「・・・何かしたんですか？」

「私が志隆と行く予定だった遊園地の券を、お前名義にかえた」

「・・・え！？」

「今、漣に頼んでやってもらっているが、ま、お前が命令しても変わることはあるまい。」

私からの親切だと思って大事に受け取れ」

「・・・・・・」

「ええつと、明日は誰と行くことになってるんだっけ？」

志隆が自室でカレンダーを確認する。

「由佳里さん？」

「・・・ああ、あの時に入ってきた人が」

「入るぞー」

ドアを見ると、すでにドアは開いていた。

「・・・ドア開けてから言わないでくださいよ」

「まあ、堅苦しいことは言っな。」

別に私が襲うわけでもあるまい」

「・・・さらつと言うところが怖すぎますよ」

由佳里が容赦なく床にあぐらをかいて座る。

「・・・ちんけな部屋だな。」

せめてアイドルポスターの一枚や二枚が貼ってあればいいものを」

「・・・はあ」

改めて志隆を見る。

「ところでお前、ロリコンだそうだな」

「・・・は？」

「いや、否定しなくても分かるさ。」

そもそも 学四 生に近い体格の持ち主を好きになってしまつていうところで、否定できる要素は無いと思うが？」

「・・・」

由佳里が腕を組み直す。

「ま、何を好きになったところで私には関係ないがな。」

ところで、またお前は別のところに手を出したそうだな」

「別の・・・ところ？」

「自分の胸に聞いてみる」

「・・・誰ですか？」

「清輝、と聞いたが？」

急に志隆が神妙な顔つきになる。

「そう。あの、引き締まった筋肉が・・・って、何言わせるんですか！」

「初対面にしてノリツツコミとは、なかなかやるな。」

コンビ組むか？」

「結構です。400%お断りです」

由佳里が改めて志隆を見る。

「そういえば、お前とこんなバカ話をしに来たんじゃなかった」

「明日の話ですか？」

「そうそう明日の話。」

明日、お前と一緒に行くのは私ではなく、美月だ」

「・・・へ!？」

思わず志隆が固まる。

「本当ですか？」

「本当だ。」

「嘘だったら好きに使い」

「・・・主語が無いのである意味怖いですよ。それ」

「ま、とりあえず伝えることはそれだけだ・・・が」

「・・・が？」

「お前にとって時野は何だ？というより、時野にとってお前は何だ？」

志隆が返答に困る。

「時野にとつての・・・僕？」

「そうだ」

「・・・監視対象・・・？」

「なんなんだそれは？時野はどこかのスパイか？」

「またもや返答に困る。」

「・・・何ともいえないです・・・」

「本人が、そう？」

「はい・・・一度・・・」

今度は由佳里が神妙な顔になる。

「いろいろな意味で興味深いな。」

「ま、そこはどうでもいいんだ」

「人を考えさせておいて、どうでもいいんですか！？」

「時野がお前のことを豚以下に思っているがどうでもいいことだ。」

「問題は好意があるかどうか、だ」

「豚以下って・・・」

でも、最低限他の人よりはあと思っています。

聞いたところによると、ほとんど無視だとか」

由佳里は機嫌が悪そうに答えた。

「・・・そうだな」

「あと、僕からいいから仲良くしよう、ってもしましたし」

「つまりは、友達から始めよう、と？」

「・・・友達からどこに行くんですか・・・
でも、考えてみればそうともれますね」

「客観的な意見を取り入れることは大事なことだ」

「・・・なんか、まずいこと言っちゃったかな？」

由佳里が左手の手首を見る。

「お、そろそろ時間だな」

「・・・時計ついてませんけど」

「じゃあな。また会えれば会っておこう」

「・・・どんな別れですか・・・それ」

第二十一話

第二十一話 覗

「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

何とも言えない空気が二人の周りに漂っていた。

「・・・・・・・・美月？」

「・・・・・・・・志隆？」

声が重なる。

が、譲り合う言葉もなく、また沈黙が続いてしまう。

「私から・・・ごめんって言ったほうがいいの？」

美月は前を向いたまま言う。

「あやふやにしてる僕がいけないんだよ」

そして、すぐに後ろを振り向く。

「こついの嫌い。だから・・・・・・・・」

美月が志隆に向かって右手を差し出す。

「・・・・・・・・うん」

手を握り合った瞬間に、美月がすばやく志隆を引き、倒れかけた志隆に半ば激突するような形で何とか唇を交わした。

「女の子とは、これでいいの。」

さ、行きましょっ！」

美月がだいぶ近くになってきた観覧車のようなものに向かって走っていく。

「・・・・・・・・」

静かに、志隆も走り出した。

「今時遊園地なんて流行らないと思ったけど、固定観念ってなかなか捨てられないのね」

周りには家族連れに混じって、二人組が何組もいた。

と、何も言わずに志隆の右手を握り、指をそれぞれに交差させる。

「ずいぶん、積極的だね」

「取られたくないからに、決まってるじゃない」

そして、引っ張って走り始めた。

そんな様子を陰から見ている者がいた。

「どうやら、よりを戻したようです」

「それは何よりの知らせだな。漣」

「はい。こつちが見ててもうらやましいくらいです」

「・・・・・・・・五年以上・・・・・・・・だからな。お前も、私も、レナ以外の全員も」

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・」

「せめて清輝を連れにやってやりたかったんだが・・・・・・・・」

「・・・・・・・・気分だけ満喫してもますます鬱になるだけです」

「・・・・・・・・もつともなご意見です」

「うわあ、ここも混んでる・・・・・・・・」

絶叫が一段と大きく聞こえる場所には人の山と「一時間待ち」と書いてある看板があった。

「休日って、こんなに人来るんだね」

「志隆。ちよつと行ってくるから待ってて」

「うん。わかった」

美月が少し小走りでかけていくが、その足は待っている人の列へと向かっていた。

そして、レインコートを着た女性の手の中に何かを滑り込ませた。
なおも笑顔で走っていく。

女性がさつき滑り込ませたと思われる紙を広げる。

「なっ……」

すかさず通信をいれる。

「どうした？」

「あ、あの、ばれてしまったのでそろそろ帰っても……」

「アホタレ。だが、まだまだだ。まさか、絶叫ものは嫌いなのか？」

「いえ、そうではないのですが……ある意味絶叫ものが……」

「」

「何なんだ？ある意味絶叫ものとは？」

「紙……はつきり言えば紙に書いてある文字です」

「美月から渡されたのか？」

「……はい」

「気にするな。読んでみる」

「……いいのですか？」

「もちろん。出来るだけ忠実にな」

「では……」

文面は、美月のイメージ壊し要素満載であった。

テレビで放映するとしたら、「ピー」の音で九割方埋まってしまうところであった。

「……です」

しばらくの沈黙。及び冷や汗。

「……地震、雷、火事、親父、美月だな……」

わかった。許可する」

「……心の底からありがとうございます」

「……」

美月は観覧車の中で靴を床に投げ出し、中腰の姿勢で何とか移っ

ていく吉良風市の風景を見ていた。

「・・・僕が言うのもなんだけど、もうちょっと行儀よくしたら？」
「いいの」

これでは本格的に兄妹である。

「でも楽しかったなあー。また来たいね。ここ」

「そうだねー」

「何が一番楽しかった？」

「そうだねー」

「美月？」

「そうだねー」

「・・・」

ほとんど無視である。

「レナって胸ないよね？」

「そうだねー」

「由佳里さんってブスだよね？」

「そうだねー」

「・・・だめだこりゃ」

極めつけの質問を言ってみる。

「僕のこと嫌い？」

「そうだねー・・・って、志隆、何か言った？」

思わず慌てふためくが、時すでに遅し。

志隆はいつも以上に落胆していた。

「・・・聞いてけっこう損したこと」

「な、何を聞いたのよ」

「実験的にやってその後の展開を期待してたのに、一番最悪な選択肢をあなたは選んでしまった」

「何があつたの？一体？」

「それはこっちの・・・」

夕暮れの太陽に何かが重なる。

「こっちの？」

「死生物……」

「死生物……って、え？」

黒に二本の白いラインが入った四本の足。

平らな円柱状の体。

まぎれもない、死生物だった。

「状況伝えて！」

そう言い終わる前に観覧車の隣に一型機と二型機が投下された。

「誰が」

「私だ」

「先輩！？」

「実際問題、お前と志隆の仲をよくしてやることよりも、こっこのほうに興味があったのでな。」

久しぶりに座らせてもらう」

「……先輩……」

志隆のいるゴンドラに二型機が手をのばす。

志隆はゴンドラの扉を開け、何とか乗り移った。

「必ず帰ってくるから！」

そう言い残して操縦室へと送られる。

「……優しさが寂しさに変わることなんて、いくらでもあるのよ」
一型機が起動する。

「敵は第二十四型レドだ。よろしく頼む！」

と、一気に十種類の銃器が降ってきた。

「……これをどうしろと？」

「撃ちまくれ」

「……大雑把な……」

と、手を取ると、両方を作動させ、弾幕を形成する。

すぐさま黒煙が広がり、レドは完全に見えなくなってしまった。

「いくら命令と言っても、もう少し考えることはできるだろうが！」

「何か……声が違うので……」

「なら、この声の方がいいの？」

「あんまり似てないのでやめてください！」

「レドのAST反応拡大！」

レドが一本の足を一型機に向けた。

そして、放つ。

「前部装甲融解中！」

「四次元フィールド、強制起動！」

AST粒子砲が目の中の空間で遮られた。

「レドのAST反応収束！」

二型機がかけていく。

自分に向けられる足を見視し、通りざまに両断した。

自爆することなく、そのまま両脇に倒れる。

「あいつ・・・無視して・・・」

「・・・？両方のレドに動きがあります！」

倒れた直後から斬られた断面が血も出ること修復していく。

さらに、体までも形成した。

「レド、二個体に分裂しました！」

「二型機は片方の核を確実に探し出せ！一型機はリミッター解除後、応戦にあたれ！」

言い終わる前に二型機はAST粒子砲の乱舞に襲われながら、足の方を切り刻んでいく。

一型機がリミッターを解除した。

「長いやつちようだい！」

「、投下！」

一型機の1.5倍はある細長い剣が投下された。

「やあああああ！」

時野を襲いかけていた二本の足を切断する。

しかし、分裂は起きなかった。

「本体部分は攻撃するな！」

足のみを攻撃しろ！」

ついに二体は本体のみとなってしまうた。

「突き刺せ！」

二機が構えた瞬間、どこからともなくAST粒子砲が二機を直撃した。

「レド、再分裂を開始！」

「合計三十二個体となりました！」

思わず由佳里が机を叩く。

「相手に出来るわけがない！」

抵抗する間も無く、二機は集中砲火をあびせかけられる。

「一型機、全起動部完璧に損壊！」

「四次元フィールド発生装置、故障です！」

「二機との連絡がとれません！」

「二型機操縦者、精神的損傷、異常値！」

由佳里は聞くこともなく、ただその場にうずくまっていた。

三十二体がゆっくりと、倒れた二機を取り囲む。

頭部へとあてがう。

そして。

「一型機、二型機の頭部反応無し！」

一回だけ流れたことのある、電子音が再び指揮室に木霊した。

「二型機操縦者・・・心停止・・・・・・・・」

・・・・・・・・

涙をこらえながら、由佳里が言い放つ。

「対最終死生物用体制へ移」

「二機に動きが見られました！」

モニターに全員が集中する。

かすかに二機の手が動いていた。

「二型機はまだしも、なぜ一型機が？」

「もしかして・・・・・・・・」

次の瞬間、

全装置が異常を示す警告音を発した。

「一型機、二型機の脳波計測装置、異常！」

「血圧500を突破！異常を示しています！」

「時野神子も同様値を指し示しています！」

「外部圧力により一型機操縦室損壊！」

「内部圧力により一型機全装甲、全起動部完璧に損壊！」

「頭部反応が戻りました！」

「ついに来てしまった……」

第一次覚醒が……よりによってこの二人の時に……！！」

二体は立ち上がる。

その目は赤く染まっていた。

もう一型機も、二型機も、

エレクトロニクスとはほど遠くなってしまった。

「二機のAST反応拡大！」

ジルは光の翼を展開し、デルはあの時の、虫の足のような触手を
出していた。

ジルは羽根を一枚取り出すと、刃の付け根にあてる。
すると、刃は弓状に変化し、羽根は矢状に変化した。

引き絞り、放つ。

一体のレドを貫通し、近くにあった兵装ビルを三棟破壊した。

三十二体がその存在に気づき、後ろ足二本を突き出す。

黒煙が立ち込めたその場所に二体はいなく、上空にジルがデルを
抱えるようにして飛んでいた。

「デルのAST反応、さらに拡大！」

デルがレド達に向かってAST粒子砲を放つ。

避けられることなく受け止めた。

お返しとばかりに再び集中砲火する。

ジルはデルを離し、目視できないほどの高速移動によって全てを
完璧に避けきった。

デルは地面に着くと間も無く、出てきてしまったソレを三十二体
全員に突き刺した。

痙攣しながら枝分かれしたソレに引っかかっている。

デルは、まるで儀式を行うかのようにジルを囲むようにしてソレを樹のように立てる。

黒い天使に今まさに制裁を受けようとしている人間のもうでもあった。

ジルは翼をはたかせると、羽根を無数に散らせる。

一つだけ弓にあてると、全ての羽根が制裁の矢へと変わる。そして、

全ての矢が無に返すために放たれた。

「・・・防衛庁、副長官より文書です」

「・・・美月には・・・すまない、と言っておいてくれ」

「・・・わかりました」

志隆と時野が防時局の廊下を歩いている。

ただ、何箇所か違うこと。

手が手錠で繋がれていること。

装飾用ではない首輪がつけられていること。

二人とも、無言なこと。

「入れ」

二人は後ろの二人に追い払われるようにしてエレベーターに入る。扉が閉まるぎりぎりまで、銃が下ろされることはなかった。

「死生物二体を地下監禁施設へと監禁しました」

第二十二話

第二十二話 鉄

エレベーターの天井に何かが落ちてきた音がした。
手錠が自動的に外れる。

「・・・ねえ」

「何」

「これって・・・僕達が死生物だってことが、勝手に決め付けられたんだよね」

「そついう・・・こと・・・ね」

ビジネスホテルのような部屋の中にベッドが二つ。

そして、四隅には監視カメラがあった。

タンスの中にはパジャマと人間ドッグ用の服の中間のような白い服と下着が二十数枚。

・・・それと、ピストルと二発の弾丸が入っていた。

「超法的機関・・・か。」

人権も無視できるんだね」

「・・・そのようね」

他の部屋も調べてみる。

脱衣所無しのトイレ付き浴室。

洗濯機と物干し部屋。

もちろん、全ての部屋に監視カメラがついていた。

「とりあえず、どっちで寝るかは決めとく？」

「・・・条件はほとんど一緒だけど」

どちらかを選ぶ元気もなく、入り口側が時野、奥が志隆となった。
志隆がテレビをつけてみる。

「・・・ついた」

映し出されるのは見たことのある場所。

指揮室であつた。

よく見れば近くに番号を押す場所が無い電話機と、テレビの上に小さなカメラがあつた。

「他のチャンネルもあるみたいだね」

志隆があるニュース番組で止まる。

「・・・は、吉良風市上空より佐藤リポーターです。佐藤さん？」

テレビが巨大なクレーターを映し出す。

「・・・はい！佐藤です！」

ヘリコプターの爆音のせいで、リポーターはかなり強い口調で話していた。

「ご覧いただけますでしょうか！吉良風市内で地震のために突如出現した巨大なクレーターです！」

五十年前の広島のように、瓦礫もなく、ただの砂地が広がっています！

付近には別の局のヘリコプターも多数飛び交っており、ものものしさを感じさせます！

さらに、今回の地震では前回などよりも復旧活動が遅れており、各地から自衛隊が派遣されている模様です！

以上、現場からでした！」

カメラがスタジオへと移る。

「斎藤さん、これら一連の事件についてどう思われますか？」

「私は地質学者ではないのでどうとも言えませんが、震度7以上の地震が同じ場所、しかも、一部地域に多発するとは素人といえども思えません。」

何か裏があるような気がしてなりませんね。

とにかく今は、復興を早く願うばかりです」

「ありがとうございます。では次」

志隆はリモコンでテレビの電源を切った。

「一週間経って、どちらとも音沙汰無し・・・か」

「・・・・・・」

二人は遠くの復興作業を見ながら話していた。

「食料はちゃんととどいているんだよね？」

「・・・・はい。レナによれば・・・・少し冷めているらしいですが」

「レナによれば・・・・ということは、そうなんだな？」

「・・・・・・」

二人の間を風が通り抜けていく。

「どこに責任を感じてた？」

「局長としてもそうですし・・・・滝網美月としてもです」

「本格的に死生物と認定されてしまったことによる、開きか・・・・・・」

学校の方には、どう伝えてあるんだ？」

「・・・・単なる風邪です、と伝えさせました」

「そう・・・・か・・・・・・」

工事現場の音のみがかすかに聞こえる。

「・・・・いけないんですよ。本当は指揮を取っていた先輩が一番責任を感じてるはずなのに・・・・・・」

「まあ・・・・な・・・・・・」

「どうしても思っちゃうんですよ。志隆がもしあの姿に変わってしまったら・・・・って。」

姿が変わっても、心はもちろん変わっていないはずですけど・・・・多分、受け止めきれないと思います。

逃げ出すと思います。

でも、死生物としても扱えないと思います。

だから、もしその時が来たら

「やめろ」

由佳里がそのままの表情で美月の言葉を遮る。

「その人にとって重過ぎる問題は前々から考えておくものではない。考えずに、覚悟さえしておけばいいんだ。」

頑張って答えを出したところで、実際に直面したときに、方程式

のようにその答えが出るとは限らない」

「・・・でも、覚悟もつきませんよ」

「ならそのことについて何も考えるな」

「・・・わかりました。先輩」

「あいつに限って、二週間風邪で休みか・・・」

「馬鹿は風邪ひかない、なんて冗談言ってる場合じゃないわよね・・・」

「アパートはオートロックで熱がひどいからって会えないし・・・」

三人は教室で少数の他のグループとは別に机に腰掛けて話していた。

「あいつ、一人暮らしなんだろう？」

「相当やばいんじゃないのか」

「志隆のおじさんやおばさんも風邪ってしか聞いてないみたいだし・・・」

鈴木が思い立ったように言う。

「やっぱり会ってみるべきよ。」

「風邪、うつっても別にいいじゃない」

「でも、いくら言っても開けてくれないのよ？」

「何か、隠し事でもあるのかな・・・あいつ」

「まさか・・・」

「そういうこと今まであった？」

篠崎が鈴木に向かって聞く。

「私は幼稚園からだけど、一時期以外はそういうことは無かったわ」

「一時期って何だよ」

「小四の時。小四って、まあ、ああいう勉強するじゃない？」

「まあ・・・ね」

「それで、色々あってね。結局は仲直りして、今ぐらい仲良くなっただけだ。」

中学になつたら小暮が私達に入ってきたからね。あとはもう無いわ」

しばらく黙っていた小暮が話し出す。

「そういえば、鈴木と俺もそんなことあったっけな。あの時は志隆に仲立ちしてもらったんだっけ。」

中学からだ俺と一緒にいる時間の方が長いが、せいぜいしょうもない理由の口喧嘩が一、二回あったぐらいだな。

あとはそれっきり仲良くやってるさ」

「あの・・・さ」

鈴木が言った。

「何？」

「全然、違う話になっちゃうんだけどさ・・・」

私、前に私たちが住んでたところに引越すことになったの」

「・・・」

「・・・」

空気が、凍る。

「ごめんね。・・・こんなシケる話題出しちゃって。」

もう決定なんだって。明日には、もう・・・いない。

会社、やめて・・・だつてさ。

地震で・・・っていうのもおかしいけど、一応疎開なのかな。これって」

「実は・・・私もなんだ。明後日。前住んでたところに」

「俺もなんだ・・・一週間後・・・金よりも命・・・って」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

空気が元に戻ったが、どことなく違う感じがしていた。

「志隆だけ・・・知らないんだよね・・・これ」

「あいつのこと・・・置いてくのか・・・」

「ちよつと聞いたんだけど、あと八日で吉良風市が封鎖されるんだ

って。

何でも、国の特別調査地域になるらしいよ」

「来てくれるよな・・・あいつ」

「っ・・・くっ・・・やつ・・・めっ！」

時野が志隆を跳ね飛ばすと、壁に激突せずに受け身を取り、四足で立ち上がった。

時野の首筋には誰かの指に沿ってつけられたような青あざがついていた。

「もう・・・十七回目・・・よ」

「時野、もう無理だよ。助からないし、死ねないんだよ僕ら」

無数に散乱した食物と思われるものが悪臭をただよわせていた。

しかし、この環境に慣れきってしまった彼らにその悪臭は匂わない。

「だからといって・・・私の首だけ締めても・・・」

「銃弾でも死ねなかったんだから、こうするしか方法はないよ」

そのことを証言するかのように、二人のベッドの間には弾の入っていないピストルと血のついた一発の弾丸があった。

「もう少し、あなたの弾をめり込ませたら、死ねるかもよ」

「無理だよ。もう指の届く範囲内はとくに押し込んで」

そして、また襲う気も起きなく、志隆は様々な色に染まったベッドに横になる。

「もう一度聞いておくけど、洗濯する？」

「もう面倒になったよ。生きるのも。死ぬのも」

「状況伝えて！」

「オルは現在、復旧作業中のキラカゼ内駅前通りにて完璧に停止中です！」

「現在、以外のすべての武器を使いましたが、全く歯が立ちません！」

「一ヶ月も待つて何をしかけてくるかと思つたら……」
レナ！

「はい！」

レオムは灰色で板状になった正方形の中心にある赤い半球状のものにレールガンを向ける。

「敵中心特定！本体、レールガン、敵に対して90度固定！噴射準備OK！充電完了！」

「まさか三型に使われた演算撃ちが使われるとはね……」
発射！

レオムが引き金を引いた瞬間、まっすぐに後ろのビルへと激突した。

「……何があつたの？」

「映像による検証の結果、レールガンが弾き返されたことがわかりました！」

「……っ……」

レオムが何とかビルから顔を出す。

「ポジトロナライフル……使いますか？」

「最終手段として……ね」

「……オル半径100m以内に子供がいます！」

「何ですって！」

「ズームします！」

灰色の長髪。

身長は120cmほど。

真紅の瞳。

「神武累奈、神武里奈と判明しました！」

「レナ！早く救出を！」

「機関部がやられました！」

「やばい……」

ゆっくりと二人が近づいていく。

「早く！救護班を！」

「あの距離では無理です！」

「こんなところで、みすみす命を無駄に……!!」

「半径50m内接近！」

なおも近づいていく。

二人の表情はどこか楽しげだった。

そして、何か言いかけたところでビルの陰に入った。

「消えました！」

「別のは！」

「だめです！全てビルとオルの死角です！」

「レオムでは確認できました！」

「送って！」

映像が送られてきたが、ズームしすぎているためにかなり不鮮明だった。

「後ろ姿だけだと、何をしているのかわからないわね……」
ふと、こちらを向く。

そして天真爛漫に笑うと、

「こ、故障しました！」

「カメラが故障!？」

まあいいわ！オルの下方部を撮れるようなのは!？」

「これです！」

道路が無ければ、ただ灰色の壁を映しているだけに見えた。

そして、下から少しずつ上がっていく。

ちょうど二人が通れるような高さになると、二人が真下に移動する。

「危ない！」

高さ90mの板が二人にのしかかる。

しかし、二人は潰されること無く、めり込んでいく……というより、吸い込まれていった。

そして、

「オル、停止」

「良かったな。エレクシエスト三型機の誕生じゃないか」
「・・・はい？」

一人しかいなかった。

「す、すみません」

「いや、別に謝ることはない。
むしろ喜ぶべきだ」

「は、はあ・・・」

「そしてもう一つ」

一瞬、静寂に包まれる。

「何・・・ですか？」

「例の二人を死生物から外す」

「!？」

思ってもみない答えが出てきた。

「ま、元々は単なる実験期間のようなものだったのだからな」

「しかし」

「しかしもかしもない。わかったか？」

「・・・はい」

美月は長官の発言に色々な意味で二度も驚かされていた。

「それと、君達はAELについて、どう思っているのかね？」

「アエル・・・ですか？」

少し考えた後に、

「すみませんが、何のことかわかりません」

「まあ、当然であるうな。私が作ったのだから」

「作った？」

「Arms which god manufactured
recshiest Last use day

神創兵器エレクシエスト最終使用日、だ」

いきなりの英悟に啞然とする。

「神創・・・兵器？」

「ま、単純に言えば最後の死生物が襲来したときのことについて、だ」

「それについてはレオム量産型と対宇宙戦用防衛兵器しか……」

「」

「完成しているのかね？」

「25%未満……です」

急に長官が立ち歩きはじめた。

「そうか……では三型機の記念として、予算を十倍にしてあげようか。うん」

「!？」

「大丈夫。本当だ。好きに使ってくれたまえ。

何しろ、君達は人類の英雄なのだからな」

「……わかり……ました」

「では、話は以上だ。下がっていいぞ」

「し、失礼します」

戸が閉まる。

「あとはこの予算を使って我々にどこまで対抗できるか……見物だな」

第二十三話

第二十三話 砂

「・・・判強制だよね。これ」

「・・・そうだと思う」

美月と志隆はいつものように指揮官室にいるが、志隆は机に向かい、目の前には紙が置いてあった。

一番上には「エレクトロシエント操縦者許可書」と書いてある。

「・・・記憶つて、全員？」

「親も、家族も、友達も・・・よ」

「・・・みんなそういうことしてきたの？」

「局員であるにはそれしかない」

「・・・また会った時に悲しく・・・ないのかな」

「・・・」

志隆は朱印に人差し指を押し付けたままだった。

「おじさん、おばさん、小暮、鈴木、篠崎、

お父さん、お母さん、お姉ちゃん・・・ごめん。

僕・・・全部捨てることにするよ」

「順調すぎるほど順調ね」

美月は横にある紙をちらりと見る。

「・・・」

そして再びパソコンをいじりはじめる。

「核シエルターに常駐自衛隊、兵装ビルは今までの十倍以上で最新機器。」

レールガンも六機も追加できるなんてね・・・

それに何より」

一番下にある項目に美月の目が止まる。

「まさか今月中に全職員分の量産型が完成する予定・・・なんてね。しかも、二人の死生物指定は解除。拳句の果てに、一型機は志隆専用機。そして、三型機と神武姉妹の出現・・・・・・。確実に何かある。新世紀がはじまる前に」

「・・・ふう」

志隆は休憩室で紅茶を飲んでいた。

「あ・・・時野」

「・・・何？」

時野はみかんをついばみながら志隆の少し横に座った。

「・・・好きなの？みかん」

「解放されてからはじめて食べたのもこれ」

「ふーん」

志隆がみかんを食べる無表情な時野を見ている。

「ちょーだい」

「だめ。私の部屋にはあと294個しかない」

「・・・何箱分？」

「六箱。ちなみに愛媛みかん」

「・・・愛媛みかんの消費量の0.1%ぐらいは時野が担ってそうだね」

時野がもう一つのみかんを取り出し、皮を卵のように剥いてみせた。

「・・・すごいね」

「一年に三千個食べる生活を三年続けられればできるようになるわ」

「・・・遠慮しとくよ。」

ところで、僕・・・その・・・中に入ってみただけだよ」

「・・・」

時野はいつもどおり無言である。

「時野があの時言いたかったことが、なんとなくわかった気がしたよ」

「・・・そう」

「・・・」

「・・・ちよーだい？」

「だめ」

由佳里が若干神妙な顔つきでパソコンを眺めている。

と、そこへ

「なーにやってるんですか？」

由佳里が激しい痙攣と共に壊れるぐらいの勢いでパソコンの主電源を抜いた。

「・・・何も抜くことはないんじゃないですか？」

「・・・大丈夫だ。子供が見てはいけないものを見ていたわけじゃない」

「じゃあ、何を見てたんですか？」

「それは・・・」

由佳里が若干頬を赤くさせる。

「やっぱり・・・」

「ち、違う！」

「大丈夫ですよ先輩。話しませんから」

「いや、ほ、本当に違うんだ。」

ただ・・・ただ、少し見てみたくなっとな・・・」

「・・・？」

由佳里が一気に悲しそうな顔つきになる。

「ま、単純な話をしてしまえば、婚約者だった恋人の思い出だ」

「別れた・・・んですか？」

「・・・別れさせられた」

今度は美月も悲しそうな表情になる。

「どちらかの両親とか・・・ですか？」

二人で駆け落ちすれば」

「第五型死生物・・・チウだ」

「・・・!？」

由佳里が細長いためいきをつく。

「お前が来る二年前の話だからな。

知っているやつは、漑と・・・零がもしかしたら知っているかもしれないな。

ま、三十路過ぎの馬鹿な女の話だよ」

「・・・ごめんなさい。私・・・」

「いや、別にいい。

それより、コンセントを入れてくれ」

「・・・はい」

何回か無理やり抜いたことがあるのか、見るからに曲がっているコンセントをねじこんだ。

「一緒に見るか？汚い想い出ばかりだが」

「はい。お願いします」

「・・・あ、清輝」

「よう、レナ」

レナは格納庫の物陰に隠れようとする。

「おいおい。お前がいい、って言ったときからずっとそれじゃねえかよ。」

そろそろちゃんとしろよ。付き合ってたんだしさ」

「ちょ、ちよつと！そんなこと大きな声で・・・」

「・・・次の日に散々茶化されたのはレナのバカ声のせいなんだが」

「ご、ごめん・・・」

レナが少し顔を出した。

「それよりも、これ、知ってるか？」

清輝が持っていた封筒を差し出す。

レナが取りに来た。

「三型機操縦者報告書・・・ね。見たわ」

「例のガキ達だ。」

幼稚園に入っていないのは別にどうでもいいことだが、戸籍に載っているにも関わらず、親の存在がない」

「時々格納庫に様子を見に来ては、なぜかどの監視カメラからも判別できない位置と方向で何か言っているらしいし」

「ま、俺にとつちや、一型機に乗れなくなったのが最悪だったけどな」

レナが報告書を返す。

「乗れなくなった？」

「一型機の装甲と機動部、操縦室が昨日完全に切除された」

「誰も乗れなくしたの？」

「志隆は乗れる。時野神子やガキ達と同じ方法でな」

「・・・」

清輝が後ろを向く。

そこには三型機が物々しく立っていた。

「このただの壁が、レールガンさえも通さない鉄壁の壁とはねえ・・・」

「・・・」

「ぶちこんだ弾がそのままはね返って、銃口を貫通してビルを破壊。そんなこと、誰が思ったかしらね」

「・・・もしかしたら、お前が撃つことになるのか？ポジトロニライフルを」

「・・・」

レナが黙りこくる。

「もしそうになったら、その時は俺も一緒だ。」

AELがいつ来ても、お前とは最後まで一緒にいてやる」

「・・・清輝・・・」

レナが清輝にもたりかかりかける。

「なゝんて、俺が言うとも思っただか？」

「・・・バーカ」

「しりゅーしゃん！」

「あ。累奈ちゃんに里奈ちゃん」

志隆の部屋には、あの時以来、毎日来るようになっていた。

「いいよなあ。僕もこんな妹がほしいよ」

「じゃあ『おにーちゃん』ってよびましゅか？」

「・・・それはだめ。踏み込んだじゃうからだめ」

「・・・？」

二人揃って、頭の上に「？」マークが浮かんでいるような風に、首を傾げた。

「・・・だめだ。要素の度合いが高すぎる。

これでは私がおかしくなってしまう・・・」

「しゃつきからおかしーでしゅよ？」

「まあ、いいんだよ。気にしないで。

それより、何の用？」

「『くりしゅましゅ』のよてーって、ありましゅか？」

「・・・！？」

志隆の頭の中に、あらゆる思考が走馬灯のように走る。

「・・・しりゅー・・・しゃん？」

「・・・ああ、ごめん。別に無いけど？」

「そうでしゅか。よかったでしゅ」

「じゃ、おーみしょかのよてーは？」

「大晦日？」

少しへこみながら考え込む。

「N響の第九を聴くことぐらいかなあ。もちろんテレビだけど。

ところで、予定なんか聞いてどうするの？」

「べつににやんでもにやいでしゅ」

「しょーいえば、『びでお』かりにきたんでしゅ」

「ああ。わかったよ」

そそくさとビデオデッキの扉を開けると、デッキの中からカセツ

トを取り出す。

「はい、これ。十八話でよかったんだよね？」

「しょーでしゅ」

「ここらへんからちよつとわかりづらい展開になってくるかなあ。

がんばってね」

「ありがとーごさいまーしゅ」

慌しく走っていった。

「本気で欲しいわあ、あんな妹」

「しかし最近、猛烈にこのロリコン人口が上がってきてないか？」

「そうかな？」

二人はなぜか将棋を指していた。

「元からチビのせいでそれなりにいたことにはいたが、ガキ達のせいでさらに増加しやがった。

いくら犯罪しても許される局員だからって、そういうことはよし
てほしいぜ、っと」

「・・・・・・・・」

まあ実際、三人を見て妹に欲しくならない人は、人じゃないって
言っても過言じゃないからねっ！」

「・・・・・・・・」

それは言い過ぎじゃないのか？」

「だって、あのかわいさと体格と性格だよ？」

「まあなあ・・・・・・・・」

清輝の指す手が止まる。

「女だったら、そういうことをほとんど躊躇なく言えるんだが・・・

・・・」

「性の壁はきびしくよ」

「王手」

志隆の表情が変わる。

「いや、そこは待ったで」

「もともと、待ったなし、って言ったのは志隆だぞ？」

「二度あることは三度ある」

「仏の顔も三度まで、だ」

「・・・参りました」

と言うと、駒をそそくさと片付け始める。

「で、言うことをきく、だったな？」

「は、初めてだから、や、やさしく」

「バカ言え。」

でもなあ、どうせなら、ある意味それより恥辱的なことをやりた
いような気もするが・・・」

「そういうことは・・・冗談で済ませて・・・ね？」

清輝が少し考え込む。

「よしっ！」

ここは、保留ということだ。

使いたい時に使わせてもらう」

「・・・拷問より酷いや・・・」

第二十四話

第二十四話 鏑

「キラカゼ内にAST反応！

第二十六型死生物、ログです！」

「ついに三型機の初陣……」

ふとモニターにもう二つの点が表示される。

「もう二つのAST反応を確認！

第二十七型死生物、カキ、第二十八型死生物、バメです！」

「ついに来たわね。複数攻撃。たまたま演習中であつたわ。

用意できてるわね？」

「はい！」

「……」

「はいでしゅ！」

「エレクシエストー、二、三型機、投下！」

「一型機はカキ、二型機はバメ、三型機はログをお願いします！」

「「はい！」」

三機がそれぞれに走っていく。

「……時野も、少しは成長したのかしら」

「一型機、二型機が戦闘を開始しました！」

三型機は……」

「……やっぱり三型機は少し問題ありよね……」

三型機は一方的に攻撃を受けている。

「えーん。いたいでしゅー」

「たたかいたいでしゅー」

それでも攻撃を受けつつけている。

「がんばって……としか言いようがないわね」

「しょうでしゅー！へんけーしゅればいいんでしゅー！」

「しょによてがありました！」

「そんな馬鹿な」

点が一個消える。

「さ、三型機が消失しました！」

「そんな馬鹿な！」

そして、また出現する。

「第二十九型・・・いえ、三型機です！」

「あれが！？」

棒状の体。

後ろに翼。

左方の翼より突き出す謎の筒。

「第二・・・形態？」

「三型機のAST反応、急速拡大！」

「「しゅほー、はにやてー！」」

三型機から発射されたAST粒子砲がロジへと命中する。

撃ち終わったあとのロジの体には巨大な風穴が開いていた。

「ロジのAST反応が消えました！」

「ロジ、残滅完了」

「核ごと分解した・・・」

三型機が一型機を向く。

「しりゅーしゃん、どくでしゅー！」

「え？」

「AST反応、急速拡大っ！」

「早くどいて！志隆！」

一型機が跳躍して300mほど後退する。

「「しゃげんよんじゅうごど、きよりいつてんごきろめーとる、じえんかん、しゅほーいっしえーしゃー！」」

兵装ビルを突き破り、カキへと直撃する。

その姿は数秒後にはもう無かった。

跡には異常に削り取られた筒状の穴があるだけだった。

「力キ、残滅完了」

と、共に

「二型機、覚醒状態に入りました！」

二型機の計測器が異常を告げる。

見ればゼリー状の体を持つバメに体ごと侵入させて核を食べようとしている。

「バメのAST反応、増大！」

「二型機の皮膚が融解をはじめています！」

まるで強酸に漬けられたように皮膚の色素が落ち、徐々に筋張った筋肉が見えてくる。

バメが急いで逃げようとするが、すでに捕まえられた核を残して、逃げることはできない。

「三型機のAST反応、急速拡大！」

見れば三型機の砲台が、バメ・・・いや、二型機を向いている。

「やめて！二人とも！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

二型機と三型機の間に一型機が立ちはだかる。

「せめてもう少しだけ待ってあげて！」

「・・・・・・・・」

「止まりません！」

二型機が核を取り込んだ。

「・・・ちっ」

誰が言ったのかわからない言葉が指揮室に響く。

AST粒子砲が、二型機を反れる。

しかし、一型機は近すぎた。

一型機の左手首より先が、なくなっていた。

「うあああああああああああああ！！」

あああああああああああああ！！」

一型機が自分の左手首をつかみながら、出てくる血を必死におさえようとする。

「志隆！」

「一型機の血圧、脳波が前回覚醒値寸前です！」

「はやく・・・はやく回収と医療班を！」

「はい！」

志隆が目を開けた。

そこは病室の中。

「・・・軽いショックだって。なんで志隆だけに表れたのかはわからないけど」

そこには美月と時野、という正反対な二人が座っていた。

「時野も、あつたんだよね？」

「・・・ないことは」

「あつたんだよね？」

「・・・あつた」

美月は自分に声をかけてもらえなかったことに少し顔をゆがめる。そして、すぐに戻る。

「一型機の損傷は再生してるわ」

「そう・・・ですか」

操縦者としての志隆。

強いショック。

驚き。

「ごめん。誰で言ったらいいの？」

「志隆で・・・いいわよ」

時野が立ち上がる。

「これから、こんなことはたくさんあると思う。

でも、デルはあなたの体じゃない。

これだけは覚えておいて。

所詮、あなたの感覚はデルの疑似体験にすぎないのよ」

「・・・わかった。

時野に迷惑もかけてられないしね」

時野“に”。

「・・・じゃあ」

「・・・」

何か、壁というものを知ってしまった気がした。

「いやー、しつかしよく寝たなあー」

志隆が思い切り背伸びをすると、携帯を取り出して時刻を確認する。

「午後三時・・・かあ・・・」

いくら学校がなくなつて、前日が戦闘だからといって、寝すぎである。

「コアラもびつくりかも」

まったくである。

「・・・たゝすゝけゝてゝ」

「誰よぶ彼よぶ人がよぶ。」

悪を倒せと俺を呼ぶ・・・って、これ何だっけ？微妙に違つてる気がするけど。

ま、いいや。暇つぶしに行つてみよゝ」

そこには口・・・ではなく、一見五才ほどしか年が違わなさそうな三人がいた。

「志隆！助けてゝ！」

「にやにやつてるんでしゅか！」

「しりゅーしゃんにたしゅけてもらうにやんてひきよーでしゅー！」

「この子達が離してくれないのよゝ！」

美月が両手を縦に思い切り振るが、合計四本の手に敵うはずもない。

とはいえ一応、年齢差は志隆の年齢と同じである。

「またおとにやのひとみたいにやことばつかって!」

「にえんれーしえいげんがあるんでしゅよ!」

「だから大人なんだって!」

志隆はただ黙ってその様子を眺めている。

体格年齢差、五歳の対決を。

「黙ってないで何とか言つてよ!付き合い長いんでしょ!」

美月は何も知らない子供達からの自覚していないいじめに心底参っているのか、目に涙を少しためていた。

そして、上目遣い。

「・・・ぬお」

「何、顔そむけてるのよ!」

志隆が顔をそむけた先に必死に笑いたいのを我慢しているオペレーター達がいる。

志隆が視線でヘルプを送ると、黙って引つ込んだ。

「・・・減給」

「そんな殺生な・・・」

「しゃっきからにやにいつてるでしゅか!」

「と、とりあえずどういう経緯でこういうことに?」

美月が少し落ち着く。

「そこにいたオペレーター達とあれ関係の話で話したら」

「あれ関係?」

美月は少し考えてから話し始める。

「仕事よ、仕事。この子達が遊んでいるところに出くわして、それを少し眺めていたら・・・」

「・・・捕まった?」

「・・・そういうこと」

「「もーいーかげん、かんにんしゅるでしゅ!」」

二人が思い切り引つ張る。

「いたたたたた!」

「つもー、こうなったら・・・」

「あ！災華くるみ！」

「「え！？どこでしゅか！？」」

美月がすかさず逃げ出す。

「あ！まつでしゅー！」

「……」

「……美月も知ってたんだ」

「……そういえば最近、リアルなテーブルゲームばかりやってるね」

「ゲームは目に悪いし、飽きたからな」

二人はシンプルにババ抜きをやっている。

ちなみにババは志隆である。

「……ちよつと、ちゃんと均等に持つてよ」

見ると、志隆が清輝のトランプを一生懸命抜こうとしている。

「ババはお前だろ。俺がこんなことしたって意味ねえじゃねーかよ」

「……なんで持つてることわかるの？」

「……二人でやってるからだろうが」

志隆が仕方なく別のトランプを引く。

そして、捨てた。

「考えてみれば、これって揃わないカードはジョーカー以外無いはずだよな」

「……なんで？」

清輝が志隆に分かりやすく伝えるために考える。

「……例えば、四枚のトランプでババ抜きをやるとして、両方に配る枚数がバラバラだったとしても、四枚か二枚なら双方がトランプを捨てて終わり。」

逆に一枚か三枚だとしたら、一枚なら相手は三枚で捨てていて一枚、三枚なら捨てていて一枚対一枚だから、引いたら揃って両方終わり。

つまり、ジョーカー以外なら何でも揃うわけだ」

「なるほど。」

どおりで二人なのにトランプが少ないと思った」

「・・・そもそも、二人でやるようなゲームじゃねえけどな。ましてや男で」

「・・・」

思わず志隆の手が止まる。

「そっいうこ」

「すまん。俺が悪かった。」

「というか、相変わらず二択で迷ってるのか？」

「・・・うん・・・」

「まあ、なにせ真逆だからなあ・・・」

「迷いどころといえば迷いどころだ」

「ちなみに、清輝ならどっち？」

「いつも以上に考え込む。」

「チビはなんか恋人として許せないというか・・・」

時野も時野で時野だしなあ・・・」

「・・・決められないでしょ？」

「第三の選択だな」

「まさか・・・」

清輝がためらう。

「両方バツだ」

「そっちかよ！」

「ま、お前がどっちを選ぶのがあんまり俺には関係ないからな。」

時野を選んだらしばらく指揮系統が乱れるかもしれないぐらいだし」

「・・・そっか」

志隆がことの重大さを今さら理解する。

「国を操るのは、女じゃなくて男だったりしてな」。

クレオパトラも愕然だぜ」

「怖いと言わないでよ」

「まあ、そもそも女ってというのは訳のわからない」

「清輝――!!」

突如ドアが開かれ、何かが清輝に覆い被さる。

「ちよ、お前、キアラが……」

「清輝」

見れば、レナが清輝に体ごと抱きつきながら頬をこすりつけている。

幸せ度200%突破。

「……」

その様子はまるでまわりにハートマークが飛び交っているようだった。

「……横を見る。横を」

すでに清輝は呆れ顔……というより絶望している。

「ん？」

向いた瞬間に清輝とほぼ同じ顔になる。

「……お熱うございますこと」

「ち、違っっ！」

レナの顔が一気に沸点に達する。

「こっ、これは……清輝がいきなり私に向かって……その……さりげなくテレパシーみたいのを送ってきて……ね？」

「レナ。不死の薬ぐらいありえないことを言うんじゃない。もういいんだ。もう……」

「で、僕にどうしてほしいの？」

二人揃って絶望している。

「……そろそろ、縄の準備でもしようか……？」

「……そうしましょうか……」

「待て待て待て待て」

志隆が慌てて静止する。

「まあ、ここでそれなりの誠意を見せてくれれば……ね？私も大

人ですか」

「そうだ！」

清輝の頭の上の電球が灯る。

「今、罰ゲームを行使する」

「・・・な・・・」

「あのときに決めたことがあったよな？破ったら・・・」
清輝が志隆に耳打ちする。

そして、固まる。

「・・・だぞ？」

「ハイ。ワカリマシタ」

「とりあえず、」

「セーフ」

第二十五話

第二十五話 肌

「だーめでしゅ！」

「りにゃこそはにゃしをきくでしゅ！」

そう言いながら、二人がまだ寝ている志隆の部屋へとやってきていた。

といつても、午後一時である。

「な・・・何・・・？」

志隆が瞼を5mmも開かずに答える。

「しりゅーしゃん、きいてください！るいにゃが」

「ちがいましゅ！りにゃでしゅ！」

「と・・・とりあえず、累奈ちゃん、話してよ。何があったの・・・？」

里奈と思われる方の一人がそっぽを向く。

「いきにやり、りにゃがあれににょらにゃいつていったんでしゅ」

「あれ・・・？もしかして三型機のこと？」

「しゅーでしゅ。」

わたしたちがえらばれたのはとくべつにゃことにゃにょに、いた
いからいや、つていうんでしゅ」

「まあ、確かに感覚も直に伝わってくるけど・・・」

志隆は自分の体験を思い出すと共に、傷一つついていない三型機
の姿を思い浮かべた。

「しりゅーしゃんは、にょりたくなにゃいでしゅよにえ？」

「うーん・・・」

志隆は自分と一型機について考え始める。

自分を救ってくれた。

家族を殺した。

入っでいて、気持ち悪いわけではない。

むしろ、気持ちいい。

「乗りたくないとは・・・いいきれない・・・かな？」

「ほーら。やつぱりしりゅーしゃんも、るいにゃとおんにゃじかんがえにゃんできゅ」

「しりゅーしゃん、ひどいでしゅ。じゅつとみかただとおもつてたによに・・・」

里奈の瞳が徐々に湿気をおびてくる。

「だ、大丈夫だよ！僕はふ、二人の味方だから・・・」

「どつちかにしてくだしい！」

「そんなこと言っただって・・・」

一人の味方になれば片方は泣く。

かといって、このままでは二人とも泣いてしまう。

「わかりました・・・」

そう言ったのは里奈だった。

「ぢようしえ、しりゅーしゃんは・・・えぐっ・・・りにゃによ・・・えぐっ・・・みか・・・えぐっ・・・た・・・えぐっ・・・にゃんぢえしゅ・・・えぐっ・・・よにえ・・・」

「り、里奈ちゃん・・・」

「しちゅりえーしました！」

どこか重々しく、走っていった。

「いい・・・の？」

「・・・わるいによはりにゃでしゅ」

「・・・」

運悪く、

「キラカゼ内に三つのAST反応を確認！

第二十九型死生物二才、第三十型死生物デム、第三十一型死生物キアです！

操縦者四人は、至急、格納庫へ！」

放送が響いた。

「・・・ひとりでいくでしゅ」

「そんな無茶な・・・」

累奈が志隆に微笑む。

「いもうとでも、あにえによやってることぐらい、できるでしゅ・・・」

「・・・わかった。頑張つて」

「ありがとー・・・でしゅ」

累奈の小さな肩が、小刻みに震えていた。

「現在、相手からの積極的な交戦はありません」

直方体。

各面に一つずつ穴。

複数の塊。

「・・・」

横たわる紐。

無数の足。

口のみがのつた頭。

「・・・」

包帯に巻かれた体。

牙が突き出た口のみ頭。

二本足で立つ竜。

「あちら側から交戦が無いのは珍しいわね・・・」

「さすがに、全戦全敗ですからね」

「それを当たり前にするのが、この役目よ」

三機の別々な色の体が立っている。

「大丈夫？一人で平気？」

「しえんりよくとしてはつかえにやいかもしれませんが、がんばりましゅ」

「うん。もし何かあったら、僕の後ろにいてていいから」

「ありがとーごじやいましゅ」

「……………」

三型機の移動速度は、遅くなっていた。

「来るときは一気に来るわね。」

レナ、用意できた?」

「いつでも撃てます」

兵装ビルを数棟挟んだ向かいがわに、デムがいた。

「もう一度確認するけど、一型機はデム、二型機は二才、三型機はキアをお願い」

「了解」

通信を一度切る。

「相手が何を考えているのかわからない以上、こちらから手出しはできないわ」

「以外の全兵器、投下完了しました」

三機の周りの道路や兵装ビルの上には、様々な武器が置かれていた。

「りにや……………」

そう聞こえた瞬間。

「三型機が消失しました!」

「また飛行機に」

「三型機、出現!」

「あ、あれは!」

誰もが目を見張る。

「多分……里奈ちゃん?」

巨大な里奈へと変形した三型機がそこにはいた。

髪の毛の先がやりのようになったものがいくつかあった。

「ひとりでも……できたでしゅにえ」

赤い目をした理奈が一型機に向かって直接話し掛ける。

「……まさに何でもあり、ってことね……………」

「二才、消えました!」

「デム、消えました!」

「キア、消えました！」

三つの点が静かに消えていった。

「どうしますか？」

「五時間は厳戒態勢を維持して。

何も無かったら、解散よ」

「あー、疲れたー……」

結局、三体は現れないままだった。

「何で帰っちゃったんだろ。仲間なのに三型機を警戒でもしてるのかな？」

ノック音。

「いいよー。入ってー」

思ってもみない人物が入ってきた。

「……かりん」

「厳戒態勢、お疲れ様」

そう言ってカフェオレを手渡すと、志隆がそそくさと立ち上がるとする。

「いいわ。別にお茶なんか淹れなくても。さっき、飲んできたし」

「……お茶？」

志隆が自分の部屋を見渡す。

「そういえば結構人とか来るけど、お茶とか出したことって一回も無いなあ。」

第一、急須とかないし」

「別に緑茶は出さなくてもいいんじゃない？」

「あはは、そうだよね」

「うん」

「……」

「……」

「……」

「……そ、そういえば、口調とかがあの時と変わらないね」

「そうね・・・何か・・・めんどくさくなつたから」

「そうなんだ・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

時野で慣れているはずの沈黙が耐え切れなくなってくる。

「・・・どう？最近」

「・・・」

「・・・慣れた？」

静かに首を横に振る。

「あの別れ方は・・・最悪だった」

「そう・・・だよ」

「“カノジヨ”は多分、死んではいないと思う。

生かされてるのよ。エンの中で」

志隆が思わず反論する。

「でもあの時！

あの時・・・僕が・・・」

「私が行っても、志隆が行っても、結局、同じことよ。

エンは消えた。“カノジヨ”と共に」

「・・・」

「・・・」

「・・・どうして・・・わかるの？」

かりんがどこか一点を見つめる。

「そもそも話、核に何かを当てさえすれば消えてしまっあいつらがおかしすぎるのよ。」

ヨギの時、本当に最後の瞬間、確かに何か硬い物にあたった気はしたわ。

でも、触れたぐらいで死ぬわけ無いわよ。もちろん、この前の二体は除いて」

「・・・・・・・・」

「つまり、あいつらはまだ様子見しかしていない、もしくはかなり長い時間をかけてヒット&アウェイを繰り返しているのかもしれない。」

「そもそも、あいつらが住んでいる場所がこの世界と時間経過が一緒とは限らないし。あいつらにとって私たちの一週間は、本当にささいな一秒なのかもしれないからね」

「・・・・・・・・」

「今までの会話から推測すると、かりんはだいぶよくはなってきたが、今だに元の感覚を取り戻せないようであった。」

「・・・たとえ生きていたとしても、どうやって取り戻すの？」

「・・・わからない。」

「でも私は、そのためにレオムの技術を必死で習得しようとしてる」

「・・・レオムの・・・技術？」

「思ってもみない答えだった。」

「一型機が完全に志隆のものになった今、清輝みたいに兼任はしていないから、無職も同然。」

「その空いた時間を、レオムに使おうと思ったの」

「・・・レナから、奪うの？」

「・・・そういうことになる。」

「でも、奪えたとしても多分二ヶ月は先になる。」

「いくら職員として量産機の講習を受けていたとしても、本物を操るには時間がかかるわ」

「・・・量産機？」

「かりんが仕方なく説明をはじめる。」

「レオムの量産型である量産機のことよ。」

「AEL・・・略す前の文字がなんだったか忘れたけど、『神創兵器エレクトロ最終使用日』の略らしいわ」

「神創・・・兵器？」

「もしかして、志隆が創った兵器だからだったたりして」

「うちはそんな家系じゃないよ」

久しぶりに笑みがこぼれる。

そして、すぐさま戻る。

「最後の死生物が襲来する日のことをさすらしいわ。

もつとも、単なる憶測だけだ。

でも、ヨギみたいに体長2kmもある生物が出てきた以上、10
km・・・100km・・・

もしかしたら地球規模と戦うことになるかもしれない」

「・・・そんな・・・」

「そのために防時局もいろいろと準備してるのよ」

「そうなんだ・・・」

かりんが話を本題に戻す。

「だから私はそのときのために、勉強をもっとしつかりするわ」

「来るかもわからないのに？」

「もし、本気でこつちを潰したくなったら、あいつらだって
全員を呼び集めて総攻撃を仕掛けるはずよ。

そのときにエンがくれば・・・」

「助けられるかも・・・しない・・・？」

かりんに少し笑顔が戻る。

「どんなことにしろ、私は憶測に憶測を重ね合わせてただ自分を動
かしたいだけなのかもしれない。対象が“カノジョ”でなくても。

でも、決めた以上、引き下がるわけにはいかないわ。

応援してくれると、助かるわ。

じゃあね」

かりんが志隆の部屋を出ていった。

「うん。」

・・・がんばって」

このとき志隆は、かりんとは恋人とも、友達とも、兄弟ともいえない、不思議な関係になってしまったと感じた。

第二十六話

第二十六話 肉

「キラカゼ内約三箇所にAST反応！

第三十二型死生物リナ、第三十三型死生物イラ、第三十四型死生物キンです！」

「またまた演習中ね・・・全く。

エレクシエスト、一型機、二型機、三型機、投下！」

「・・・・・・」

白く、細長い八面体が六つ。

「・・・何か、強そう」

巨大な目玉。

脇から生えている無数の触手。

「・・・・？」

ビルの上にたたずんでいる白い発光体。

他の二体と比べると、あまりにも小さい普通の馬であった。しかも、角が生えている。

「リナに二型機、イラに一型機、キンに三型機！」

「了解！」

六体がほぼ同時に行動を開始する。

「、ちようだい！」

「、投下！」

小型のハンドガンが投下された。

それをイラから放たれる触手へと当てていく。

「弾！」

手馴れた手つきで再装填する。

「μ、ちようだい！」

「μ、投下！」

三又の長槍が投下されると、すぐさま眼球へと投げつける。裂け目から血が流れ出し、道路を真っ赤に染めていく。

「、ちようだい！」

「、投下！」

一型機が を構える。

「一気に行く！」

迫り来る触手を撃ち落とし、 を投げ捨てると、両手で を眼球に突き立て、縦に思い切り引き裂く。

肉片と思われる液状のものが中からあふれだす。

しかし、μを突き立てた部分から新たな触手が生成される。

「……！！！」

触手はμを取り込みながら、一型機の左肩を突き刺した。

「……くうつ……！」

「志隆！」

「「しりゅーしゃん！」」

一型機は左手でμを掴む。

「これは……これは僕なんかじゃないんだ！」

一型機がμをかき回すようにして深く差し込む。

そのとき、イラの背面のビルの屋上に、キンが立っていた。

「F-6地区のAST濃度が異常値です！」

「志隆！逃げて！」

一型機がイラを踏み台にして逆側に跳ぶ。

そして、志隆の視界は真っ白に包まれた。

「F-6地区を中心として半径約250m内の全施設からの反応がなくなりました！」

「イラ、残滅」

「そんな……」

キンを中心にして球状に兵装ビルと地面が削り取られていた。そしてキンは、ビルがなくなったその場所に、まだたたずんでは

た。

「発射準備できました！」

「照準をキンに合わせて！」

「了解！」

スコープがキンを真っ直ぐにとらえる。

「碎け散りな！」

キンと同色の閃光が貫く。

しかし、原型をとどめていた。

「そんな！」

「キンには確かに貫通しています！」

「一体、何が・・・！？」

二型機は三人と離れた場所で互いの様子を見合っていた。

「・・・・・・」

ゆっくりと回転する白色の八面体。

「・・・・・・！！」

リナが二型機に先を向ける前に、二型機はバク転を開始していた。ついさっきまでいた場所にリナが突き刺さっていく。

バク転が終了すると、リナが目の前から消える。

上空を見る。

「・・・・・・」

大きく横に跳ぶと、立っていた場所にリナが突き刺さる。

しかし、

「七・・・・体目・・・・・・」

リナの腹部より上の部分が真っ赤になり、下にも液体が垂れいている。

二型機はだらりと四肢を地面へとぶら下げた。

「二型機操縦者、心停止！」

「二型機、停止！」

二型機の瞳の色が、消える。

「時野！」

一型機が跳躍し、周りにいたリナを尾で薙ぎ払う。
そして、二型機に刺さっていたリナを無理やり取り払う。

「時野！！」

一型機が二型機を揺さぶるが、反応がない。

白い体が真っ赤に毒々しく濡れていく。

「キン、移動を開始しました！」

「到着予測地点は・・・ここです！」

「地下移動エレベータを完全隔離閉鎖！」

全、対人人型防衛兵器の起動準備はじめて！」

「了解！」

「一型機は目標をキンに切り替え！」

三人とも、キンの本部衝突を絶対に避けるのよ！」

「「りょーかい！」」

「・・・・・・」

志隆の答えがない。

「一型機！」

「・・・・・・」

「あなたは一型機操縦者よ！」

「・・・・・・」

「三型機、第二形態へと変体しました！」

耐え切れず、美月が叫ぶ。

「志隆！」

「・・・・・・」

「い、一型機と二型機の融合がはじまりました！」

「何ですって！」

二型機を支えている一型機の腕の境目がなくなり、灰色になって混じっていく。

「一型機のAST反応が、二型機と調和しています！」

「志隆！」

リナが攻撃をしかける。

一型機と二型機の背中に二型機の翼が生え、リナを蹴散らした。

「一型機、二型機、覚醒！」

二型機の腹部に開いた穴が急速に修復されていく。

「二型機操縦者、心臓再起動！」

リナが何とか起き上がる。

一型機が尾で自らの翼をもぎ取り、先に装着する。

「キン、本部接触まであと300m！」

襲ってくるリナを切り落としていく。

最後のリナを切ると、

「リナ、消滅！」

周辺の兵装ビルが少し吹き飛んだ。

「あああ．．．ああああああつ！！！」

「二型機、一型機との融合解除を開始！」

「二型機のAST反応が一型機からずれていきます！」

一型機との融合を無理やり引き剥がすように、二型機が体を一型機との境目から引き剥がしていく。

「時野．．．！なんで．．．！！！」

「．．．あなたと．．．は．．．まだ．．．だめなの．．．！！！」

「A-2地区のAST濃度が異常値です！」

「各局員、全員衝撃に備えて！」

防時局が激しく揺れた。

揺れが収まる。

エレベーターの断面が少し見えていた。

「地上ビル、第一～第三装甲完璧に損壊！」

「第四装甲も損壊大です！」

「キンが移動を開始しました！」

「次の一撃で．．．終わる．．．！！！」

三型機がキンに全速力で近づいていく。

「A-1地区のAST濃度が異常値です！」

「二人とも、離れて！」

「……………」

三型機が中心が四方に割れる。

キンが三型機を見た瞬間。

三型機がキンを食した。

「ぐふっ……がつ……あ………」

時野が廊下にうずくまり、彼らに腹部を中心に蹴られている。

神武里奈と神武累奈に。

「死ぬならまだしも、デギウルとの融合をはじめるとは何事だ」

「お前をここに遣わせた理由がわかっているのか」

二人はたまに同時に放ちながら、五歳の少女とは思えない速さで蹴っている。

「デギウル……の……核……を……取り戻すこと……です」

時野が痛さを我慢しながら何とか言う。

「わかっていながら、お前はなぜ神崎志隆などというものと無駄な交流を謀っている」

蹴りが止まる。

「あれは人間である神崎志隆が勝手に」

「言い訳を聞きたいわけではない」

言葉には怒りを込めずに、蹴りに怒りを込める。

時野の口から、再び血が飛び出す。

「ぐはっ！……………」

里奈がしゃがみこむと、髪を掴んで無理やり顔を起こす。

そして、首を右手で掴む。

「人間の状態であろうが、ジヴェルの状態であろうが、我々にお前を殺すことなど容易なことなのだぞ」

「……………ぐ……………」

里奈の指が食い込んでいく。

「時野く、どこだよ」

「・・・・・・・・ちつ・・・・・・・・」

里奈が右手を離し、床に時野の頭を叩きつける。

そして、二人は近くの通路に逃げていった。

志隆が時野を見つめる。

「時野！」

慌てて志隆が時野にかけよる。

「どうしたの！？何があつたの！？」

時野の口と口付近の床には赤いもの。

首に絞められた跡。

靴の跡が何個もついた服。

「・・・・・・・・」

「話してよ！お願いだから！」

「・・・・・・・・」

「話せない訳があつたら話してよ！絶対に助けてあげるから！」

「志隆・・・・・・・・」

時野がはじめて志隆の名前を呼ぶ。

「気をつけて・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

その時、二人が来た。

「しりゅーしゃん？どうしたでしゅか？」

二人が時野の元へと近づく。

「「ときによにおにえーしゃん！！」」

二人も時野のそばへとかけよる。

「だいじょーぶでしゅか！？」

「どうしたんでしゅか！？」

そう言いながら、不敵に微笑む。

もちろん、志隆からは見えない位置で。

「病室があるってことは、誰かしら医者っぽい人とかいるんだよね。
時野」

志隆が子供をおんぶするような格好になる。

「・・・・・・・・」

「お姫様だっこのほうがいいとは思わないよね！」

「・・・・・・・・」

仕方なく、おぶさった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

何もしないでただ元の学校にいる、三人がいた。

「・・・私達って、こんな三人だったっけ・・・？」

「・・・もつと、明るく話してたような気がするな」

「・・・なんでだろ」

無理もない。

彼らからすれば、いない存在の人なのだから。

志隆は。

「いつもやってたはずのゲーセンも二人用のやつばかりだし」

「余ってなかった、気はするんだけどな・・・・・・・・」

「やつぱり足りないのよ。今。誰かが」

鈴木が急に大きな声で話す。

「誰の記憶にも無いのに？」

「だって私、幼稚園のころ一人しか友達がいなかった。

それに記憶の中にはお互いに見合って話したりしてるはずなの。

でも・・・その人を覚えていない」

「私も、一年ぐらい前に誰かと二人で帰った。

確かに話し合ってるはずなのに、記憶の中に人がいない」

「そっいえば昨日見つけたんだけどよ」

携帯を取り出し、操作をはじめ。

「こいつ、知ってる？」

神崎志隆という名とメールアドレスが書いてある。

「それって……」

「もしかして……」

二人がほぼ同時に携帯を取り出し、操作をはじめる。

そして二人の携帯に、同じ名前と同じメールアドレスが書いてあった。

「覚えて……ないんだよな」

静かに二人が黙り込む。

「でも、これで名前は決まったよな。なぜか消えた人の名前も」

「探す……んだよね？」

「生徒だったんだから。」

私達の……何かだったんだから」

第二十七話

二十七話 人

「キラカゼ内、及び上空にAST反応！

第三十五型死生物スダ、第三十六型死生物ツユ、第三十七型死生物ビイです！」

クリスマスツリーに飾られた指揮室に似合わない声が響く。

「エレクシエスト操縦者は全員、格納庫へ行ってください！」

「・・・何なのあれ」

八本の脚。

同数の目。

黒いクモ。

「・・・・・・」

白くひよる長い一本の脚。

キノコのような形状をした頭。

突き出た赤い目。

そして何より、

「おつきーでしゅ」

上空から見下げる巨大な目。

ビルよりも太い十六本の脚。

吉良風市全体を覆っている、巨大なビイの姿があった。

「一型機はスダ、二型機はツユ、三型機はビイをお願い！」

「了解！」「」

「一型機と二型機は残滅、又は消滅後に三型機の援助を行って！」

「了解！」

「三型機、第二形態へ変体！」

変体した直後、三体にビイの目が向く。

「ビイのAST反応拡大！」

「散って！」

三機がそれぞれに向かって散る。

ビイは三型機に照射を続けたままで、止まる気配がしない。

「ビイのAST反応が戻りません！」

三型機に当たらなかったAST粒子砲が容赦なく地面を抉っていく。

「……………」

三型機には目を止めることもなく、二型機がツユに向かっていく。
ツユが二型機を向く。

「ツユのAST反応拡大！」

「避けて！」

二型機がいつものようにAST粒子砲を避ける。

しかし、第二射が早すぎた。

「……………」

二型機の腹部にAST粒子砲が当たる。

続けて何発ものAST粒子砲がマシンガンのように発射される。

「二型機、回収！」

「二型機、回収！」

格納庫にあちこちから血が出ている二型機が現れる。

「一型機と三型機も回収して！」

体勢を立て直すわ！」

「三型機、回収！」

一型機が回収されていく。

しかし、その空間にスダが足をかけて広げ、侵入した。

「一型機が四次元空間より帰還できません！」

「スダと四次元空間内で戦闘中です！」

「場所の特定は！」

「無理です！」

スダが空間自体を動かしています！」

「・・・・・・・・」

傷ついた二型機が立ち上がり、一型機が出てくるはずの四次元ゲートに向かっていく。

「無理よ！あきらめなさい！」

「・・・・・・・・」

二型機の姿が格納庫より消えた。

「二型機、四次元空間へと侵入しました！」

「途方もなく広くて何も見えない空間で、どうやって戦うっていうのよ！」

しかし、通信は途絶えたまま。

聞こえることはない。

「三型機、第一形態へと変体」

開いているはずの四次元ゲートからは、何も現れない。

「・・・・・・・・」

長い時が続く。

「・・・・・・・・」

二型機が出てきた。

「二型機、出現です！」

二型機が何かを引っ張りあげる。

白く太い腕。

「一型機、出現です！」

しかし、もう一方の腕にはまだ黒い腕。

二機を再び戻そうとしていた。

一型機の腕は、まだ完全に出ていない。

「・・・・・・・・」

四次元ゲート、強制終了！」

「・・・・・・・・！」

・・・・・・・・

四次元ゲート、強制終了！」

一型機の腕と共にスタが閉じ込められた。

「ああああああああああああつ！」

一型機の腕から血がとめどなく溢れ出す。

「ひどいでしゅ！」

「・・・・・・」

「だまらにやいください！」

「いいんだよ・・・里奈ちゃん・・・・・・」

美月のやったことは・・・・正解だよ・・・・・・」

一型機の傷口が塞がる。

「一型機は志隆の精神的な痛みを考慮して出せない・・・・・・」

これで二対二だとしてもあまりにも不利すぎる・・・・・・」

もしまた出たとしても、返り討ちに遭うだけ・・・・・・」

「どうしますか？」

ゆつくりと瞼を閉じ、そして開ける。

「を使つての二型機の遠距離射撃を行います」

「・・・・！」

A S T粒子砲を・・・・！」

「を使つてツユに気づかれないように撃つしかないわ。

だと多分迎撃される。

問題は彼らが急激な風でこちらに気が付かないかどうかだけど・・・

・・・・

やってみるしかないわ」

二型機は防時局の地上ビルのビー達から見て裏側に座っている。

手には先がアンテナのようになったライフルのようなものが握ら

れている。

「いい？」

もう一度言うけど、は空气中に散っているA S T粒子をかき集

めて放つ特殊な銃。

A S T粒子砲を人工的に放つことができるわ。

反面、膨大な量の空気を圧縮して溜め込むから、撃つ周辺はほぼ

真空状態になるわ。

それにキラカゼ内の空気に含まれているAST粒子の量は他の場所より格段に多いと言っても0・01%。

チャンスは一回よ。

わかった？」

「・・・・・・・・」

美月が少しいらつく。

「毎度毎度思うんだけどね、悪い言い方をすれば、あなたは私に操られてる駒と同じなの。

せめて、返事ぐらいしてくれる？私としても困るんだけど」

「・・・・・・・・」

「返事してくれる？」

「・・・・・・・・」

二型機は、のチャージを開始した。

「・・・・まったく・・・・・・・・」

「チャージ1%完了！」

「思ったより、少ないみたいね。

チャージ量上げて！」

「チャージ量、25%UP！」

「チャージ3%完了！」

ほんの少しモニターのグラフが動く。

「埒があかないわ！」

チャージ量全開！」

「チャージ量、全開！」

「チャージ20%完了！」

美月がさらにいらつく。

「リミッター解除！」

自壊ぎりぎりまで上げちゃいなさい！」

に周囲の土や木が飲み込まれていく。

グラフが乱れながら急速に染まっていく。

「チャージ完了！」

「撃て！」

二型機が素早くビルから飛び出し、
見事にツユの頭部をとらえた。
を放つ。

「ツユ、停止！」

「三型機投下！」

「三型機、投下！」

ビイの真上に第二形態の三型機が現れる。

「「いっけー！！」」

三型機が真上から眼球の中心を貫通する。

「ビイ、消滅！」

「ようやく、あと一体となつたな」

「そうですね。いよいよ最後ですね」

「ウジヨグ。やつが私を解放する引き金になる」

「少しでしたが、ありがとうございました。お姉様」

「本当はお前と共に使う能力も必要であることにはあるのだがな、
神埼志隆を呼び出し、この小さき星の決断を迫らせるにはお前が死ぬ
しかないのだ。」

「悪く思わないでくれ」

「別に悪くなどと思いません。むしろ、お姉様がこの星を手に入れら
れるかもしれないのですから」

「全てはそのためにある。」

「これまでの行いも、やつらも。」

「そもそも人類などにこの星を譲っておくのなら、少々豪勢すぎる
のでな。」

「この星にとつても、人類は要るべき存在ではない」

「お姉様が、この星の神になるのですね」

「ふっ……」

「格好の良い言い方をすればそういうことになるな。」

正確に言えば、ただ単に我らが七十七次創考空間の代わりにこの星に住むだけだ」

「では、七十七次創考空間を人類に渡しでしょうか？」

「それはいい考えだな。」

生身では一秒と持たないが」

「しかし、人類を殺すのはほんの少々残念な気がします」

「情でも移ったのか？」

「いいえ。」

ただ、音楽、という物がなくなるのがほんの少し残念なだけです」

「デギウルも気に入っているらしいからな。」

ヴェートーヴェン作曲、交響曲第九番、二短調」

「世紀末にふさわしい曲でもありますしね」

「その考え方は日本人だけだな」

「一応、日本人ですから」

「そういえば、人類が『今年は二十世紀の最後』と言っていたな。」

まさしく世紀末というわけか」

「いいですね。」

二十世紀を人類の世紀末にするのは」

「では、12月31日にしようか」

「ええ。」

人類の世紀末です」

「志隆！」

「うわっ！」

何者かの怒鳴り声と共に志隆の布団が引き剥がされる。

「はっはっは。目が覚めただろう」

「ゆ、由佳里さん……？寒いですよ……返してください……」

・・

志隆がまだ夢の世界にいる声で言う。

「だめだ。起きろ。」

今日が何日かわかっているのか？」

「・・・何日ですか？今日」

「まったく、お前は高校に行かなくなっってからすっかり日にちの感覚を忘れて。」

今日は12月24日だろうか！」

ほんの少し脳を可動させる。

「12月24日？」

ただでさえ普段可動していないがため、こんな時にはますます可動しない。

「クリスマスイブだろうがバカモノ！

指揮室のツリーを見ていないのかお前は！」

志隆がやっと正常に戻りだしてくる。

「ああ・・・そうでしたね・・・」

由佳里さんが飾りつけたんですか？あれ」

「まあ、非番だったオペレーター達も叩き起こしてな。

もちろん、当番も強制参加だが」

「結局全員じゃないですか・・・」

「とにかくにも、だ。

とりあえず、誰かは誘え」

志隆が、仕方がないような顔をする。

「美月を押したいんですか？」

それとも、自分を」

変な音が響く。

「いてえ！」

「僕の台詞です！」

「人を馬鹿にするんじゃない！」

「じゃ、誰がいるんですか？」

途端に黙りこくる。

「いや・・・それは・・・」

「・・・やっぱり・・・」

「べ、別に誰とも過ごしたことがないわけではない」

「過去の人ですか？」

「・・・・・・・・」

途端に由佳里が静まる。

「ご、ごめんなさい。そんなにひどかったとは・・・・・・・・」

「・・・・・・・・まあ・・・・・・・・な・・・・・・・・」

何も知らないこと。

「まあとにかく、だ。」

どちらかは誘え」

「二択・・・・・・・・なんですか？」

「・・・・・・・・選択肢を増やしたいのか？」

「いえ、そんなわけでは・・・・・・・・」

「とにかく、どちらか一方には少し細工をしたからな」

由佳里が足早に部屋を出て行く。

「どちらか一方って・・・・・・・・美月以外ないじゃん。」

それにしても、細工？

サントの衣装とか？あえてトナカイかな？それとも、リボンを結んで本人をプレゼント？

いや・・・・・・・・それはないか・・・・・・・・さすがに。

でも、由佳里さんならやりかねないなあ・・・・・・・・

それより、時野を放って置いてもいいのかなあ？

っていうか、時野と僕の関係って、僕が一方的に好きなだけなよ
うな・・・・・・・・

でも、あの口からみかん以外に『好き』の言葉が出そうな気がし
ないしなあ・・・・・・・・

何考えてるかもまだよくわからないし・・・・・・・・

・・・・・・・・そういえば、あの時の時野って何だったんだろ？

確実に吐いてたよね、血。

蹴られた跡もあったし・・・・・・・・

ま、寒いし面倒くさいから、布団で考えようっと」

この後、志隆は何と丸二日だらだらと寝過ごししてしまつてことになる。

第二十八話

第二十八話 榛

何も無い、宇宙のような捻じ曲がった空間の中。

「・・・志隆」

「ルヴィエシスさん！久しぶりだね」

ルヴィエシスがますます悲しそうな顔をする。

「ええ・・・そうですね。」

でも、二度と会うべきではなかったのです・・・・・・・・・・」

「どうして？」

ルヴィエシスが無視して話を続ける。

「時野神子と同じようなことを言いますが、気をつけてください。

というより、もう気をつけても遅すぎるかもしれません」

「どうして時野を知ってるの？」

「私があなたを知っているのと同じ理由です。

そんなことよりも、志隆。あなたは、この星にいて幸せですか？」

「・・・？」

もちろん、すぐには答えられない。

「すみません。唐突で」

「特に幸せっていうわけじゃないけど・・・不幸でもないよ」

ルヴィエシスに少し笑顔が戻る。

「そうですね・・・」

わかりました。

そのことを忘れないでください」

「うん・・・わかった。」

でも今度はいきなりいなくなったりしないでね」

「いなくなりはしません。」

私はあなたの中にいつでもいるのです」

志隆が押し黙った後、言う。

「ルヴィエス・・うんうん、ルヴィさん」

「別にどう呼んで頂いても構いませんが・・何ですか？」

「僕・・僕・・きつと・・好きだよ。ルヴィさんのこと」

驚いた表情をした後に、笑顔になる。

「ありがとうございます。勇気を絞ってくれて。

でも、多分一日と成立しません」

「そんなこと言わないでよ！」

僕・・僕、別に現実の世界なんて要らない！ここで僕と君さえいれば、それでいい！」

「夢は覚めるものです。志隆。

それでなければ全ての物は夢を見ません。

夢とは現実ではない理想の世界。

そこが覚めなければ、なんと怖いことか、考えたことがありますか？」

「理想論なんて僕にはいらんだ！」

「この後、あなたは私と、時野神子と、神武累奈と、神武里奈と、あなたの本当のことを唐突すぎるほど唐突に知ることになります。

そして、全てのことを知ったとき、全てのことを思い出してください。

一つ一つ鮮明に思い出すことはありません。良いことだけを思い出せとも悪いことだけを思い出せとも言いません。

でも、ぼんやりとでも全てを思い出してください。

そして、選択を・・願いをしてください。

私は、どの選択をしようとも、それが願いというのなら、構いませんから」

気づけば目が覚めていた。

「・・・・・」

そして、夢の続きを見たいと密やかに願うように、再び目を閉じ

た。

また、同じ世界。

誰もいない。

「……………」

「……あの……神崎……さん？」

何年も聞いていないような声が聞こえる。

そして志隆は振り向いた。

「英子さん！」

思わず英子へと抱きつこうとする。

しかし、かわされてしまった。

「神崎さん、本当にあなたは駄目な人間です。」

せめて、好きな人を一人に絞ったらどうですか？

それでは、本当に志隆のことを好きな人が可愛そうです」

「ご、ごめん。反省はしておくよ」

「何にしてもです。志隆さん。」

人物。生物。そして時には死生物も決めなければならないんです。

あなたは選ばれた人間で、選ぶということはあまりしたことがないと思いますが、それでも何とかして選んでください。

あなたの選択しで、また戻ってこれるかもしれないんですから」

「それなら、英子さんが戻ってこれる選択をするよ」

英子が首を横に振る。

「選択肢が無いのに選択をするのは変ですよ。」

捕らぬ狸の皮算用です」

「……どんなことわざだっけ？それ」

「猟師がまだ捕ってもいない狸の皮を売ったときの計算をしていることから、まだしてもいないのに先の損得ばかり考えることです。」

微妙に使い方が間違っているかもしれないね」

「どうなんだろうね」

英子が少し微笑む。

「選択をするときには、主観的に、客観的に、又はその選択によって有利になったり不利になる人の立場に立ったり、本や言葉を思い出すことは重要です。」

どちらかの立場だけにとらわれずに、かつ、自分の意見をしっかりと行うことが大切なのです」

「・・・ルヴィさんより難しそうだけど、とりあえず覚えておくよ」「何となくでも覚えていればいいんです。」

「・・・ところで、かりんはどうしていますか？」

志隆が悲しそうな表情をする。

「英子さんがいなくなってから・・・すっかり変わっちゃったよ」

「そうですか・・・」

せめて、死んでいないことだけでも言いたいです・・・」

英子のはつとする。

「神崎さん。時間が無いので短めに言います。」

この夢のことは誰にも話さないでください。・・・というより、話す時間もなくなってしまいましたね。

自分の心の中だけに取っておいてくださいね」

「うん。わかったよ」

「また、会いましょう」

目が覚めてから数分後。

「キラカゼ内にAST反応！

第三十八型死生物、ウグです！

ウグは既に戦闘を開始しています！

エレクシエスト操縦者は至急格納庫へ向かってください！」

放送が聞こえ始めた瞬間に、志隆は走り始めていた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

球型の本体。

そこから伸びる無数の管。

翼のようにも見える。

「一型機、二型機覚醒！」

「三型機、第二形態へ変体！」

「一体どうしたっていうのよいきなり！」

ウグが管の先を一点に集める。

「ウグのAST反応拡大！」

「今までにない強い反応です！」

「逃げて！」

一直線に放たれたAST粒子砲が山までも貫通した。

「二型機のAST反応拡大！」

二型機が弓矢を構える。

「一型機のAST反応拡大！」

一型機が顔をウグへと向ける。

「三型機のAST反応拡大！」

三型機が筒をウグへと向ける。

「ウグのAST反応拡大！」

ウグが管を三機へと向ける。

三機のAST粒子がウグを襲う。

しかし、周囲のビルが吹き飛んだだけだった。

「ウグ、AST粒子を周囲に展開し、全ての攻撃を防ぎました！」

「ウグのAST反応拡大！」

「何回撃ったら気が済むのよ！」

三機にそれぞれ放たれるが全てを避けきる。

「レオムは！」

「今出撃しました！」

「ウグのAST反応拡大！」

A S T 粒子砲がレオムを撃ち落とす。

「反撃できない……！」

「、μちようだい！」

「、μ、投下！」

二本の槍が投下され、ウグへと投げる。
しかし、軽く避ける。

「二型機のA S T 反応拡大！」

二型機が翼を全て矢へ変換し、角度をつけて放つ。
重力によってウグへと引き寄せられる。
地面に数十万本の光の矢が突き刺さる。
しかしそこに、ウグの姿はない。

「ウグのA S T 反応拡大！」

「三型機の正面です！」

誰も何も言うことなく、三型機の真つ赤な核を一本のA S T 粒子砲が貫いた。

「里奈ちゃん！累奈ちゃん！」

「………」

「三型機第二操縦者の反応無し！」

「神武累奈、死亡です！」

その瞬間にウグが消える。

「ウグ、消失！」

三型機の核が徐々に穴から割れ始める。

そしてそこから、空に向かって一本の巨大な柱が伸びていく。

「ま、毎秒1 k mで伸びていきます！」

「……成長？」

柱がある程度伸びていくと、そこから横に広がっていく。

「三型機、地上約10 k mで横に展開を開始！」

毎秒100 k mで展開していきます！」

昼だというのに太陽が隠され、全く空から光が来ない不思議な夜になった。

「里奈！何をやっているの！」

「みづきしゃん、まだわからないんでしゅか？」

AELの始まりだよ」

その場にいた誰もが震撼した。

「これが……」

AEL……」

「最終死生物が……」

「オルだったなんて……」

人工衛星からの映像が遮断され、三型機の通信機からは雑音しか聞こえない。

「二人とも、オルを止めて！」

「もうやってるよ！」

柱に向かって攻撃しているが、切り裂くことはおろか傷さえつけられていない。

そして、攻撃をやめる。

「……時野」

「……ええ」

一型機が右手で二型機の左手を握り締める。

二型機が左手で一型機の右手を握り締める。

「二機のAST反応を調和させています！」

「脳波、血圧が全く同値です！」

そして、二型機が一型機の指の間を通りながら紐状に変形し、一型機にまわりついていく。

一型機の脚が体に吸収され、代わりに腕の付け根から新たに四本の腕が生え始める。

もう一型機とは呼べないその体の背中から触手が生え、翼が生えていく。

腕と触手からは二型機の爪が生え始め、体全体が浮かび始める。そして最後に、顔に新たな二つの眼が出来た。

「一型機と二型機の反応が完璧に同一化しました！」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

誰も何も見ていない。

ただ見ているのは、モニターだけ。

見ているともいえないのかもしれない。

誰が、こんな状況になると思っただろうか。

と、自動ドア通って清輝を先頭にたくさんの方員が入ってきた。

「美月指揮官！」

「・・・何？」

「乗らせてください！レオムに！量産機に！」

全員が我にかえる。

「あんな状況になって、黙って見過ごせないですよ！局長！」

「英雄になりたいとは思いませんが、時間管理局局員として、日本を、地球を守りたいんです！」

「乗らせてください！お願いします！」

美月の瞳から思わず涙がこぼれる。

しかし、必死に隠そうと袖で拭いた。

「泣くのは終わってからですよ！」

「それに、反省会も、忘年会も、新年会も全部未定のままじゃないですか！」

「あんたはただ単に飲みたいだけでしょ！」

思わず笑いが飛び出す。

そして、静まり返る。

「ありがとう・・・本当に。」

でも、防衛庁からの許可がないと

「防衛庁から緊急連絡です！」

AEL用の全施設、及び全兵器の使用許可がありました！

陸上、海上、航空自衛隊はすでに防衛への準備を整えているそうです！」

美月が全員を見渡す。

そして、言う。

「A E L体勢へ移行！」

「A E L体勢、移行します！」

本局にいる全職員はレオム量産機への搭乗を命令します！」

「了解！！！！」

局員達が駆けていく。

「指揮室をA E L体勢へ移行！」

「第一、第四ブリッジ格納！」

通路が塞がれ、指揮室から離れていく。

「対死生物用設備を廃棄し、A E L用設備を使用します！」

モニターと天井が開き下へ下がっていく。

壁が取り払われ、指揮室は巨大な真つ暗の空間になる。

指揮室に明かりが点けられ、壁に元の何十倍とあるモニターと計測機があらわれた。

「レオム量産機、全機起動準備開始！」

別の何百mとある円形の部屋に明かりがつき、何千機もあるバズーカと長いブレードを装備したレオムが現れる。

通路の手前側から乗り込んでいき、除々に起動していく。

「第一、第二部隊、全機起動！」

「第三部隊、全機起動！」

「第三、第四、第五、第六、第七部隊、全機起動！」

「第八、第二十三部隊、全機起動！」

「第二十四、三十六部隊、全機起動！」

「第三十七部隊、第四十五部隊、全機起動！」

「第四十六部隊、残り一機です！」

「誰よ、こんな時にふざけてるのは」

「私だが？」

モニターに由佳里の姿が写る。

「第三ブリッジ出して！」

「第三ブリッジ、解放！」

第三ブリッジが伸びてくると共に、由佳里が姿を現す。

「美月、代われ」

「何を言っているんですか先輩!?」

「いいから代われ。」

「お前は確実に私より機械関係は得意だろ?」

「……」

「そう思ってたんですよ!」

「美月が意外な答えを出す。」

「私も、みんなと一緒に死生物と戦いたい、ってずっと思ってたまし!」

「それに、先輩の方が指揮がうまいに決まっていますし!」

「そうか。それはよかった。」

「じゃ、行ってくれ」

「了解!」

満面の笑みで指揮室を出て行く。

しかし、ブリッジを走っていく美月の瞳からは、涙が流れ落ちていた。

「……嘘に嘘を重ねたんですね」

「あいつも、大人になってきているということだ。」

「本音と建前を理解してきているんだからな。」

「第三ブリッジ格納!」

「第三ブリッジ、格納!」

「全、対人人型防衛兵器を起動!配置につかせる!」

「了解!」

由佳里が指揮官専用の席に座る。

軽く机を撫でると、しっかりと座り直し、足を組んだ。

「敵はここを知り尽くしている。」

「本部攻撃はほぼ免れないだろうな」

「第四十六部隊、全機起動!」

「指揮室内にいる人員用以外の全機、起動完了!」

「全機体損壊率表示用モニター準備！」

何もなかった壁にモニターが出現する。

「三型機より無数の投下物捕捉！」

推定数、五万個以上です！」

「展開している地域全体に投下されています！」

「死生物か！？」

「いいえ！全投下物にAST反応がありません！」

「物理的質量攻撃・・・？」

「投下物が間も無く地上に衝突します！」

キラカゼ内の映像がモニターに映され、数十の灰色の球が道路に着地する。

と、球に赤色の目玉が出てくる。

「投下物が変体を開始しました！」

「投下の第二波を確認！」

みるみるうちに三型機ほどの大きさの少し奇妙な人が現れる。

そして、自分の体の中に腕を突っ込むと、何かを抜き出す。

肉厚の日本刀だった。

「第二波の投下物も変体を完了しました！」
眼。

二枚の翼。

「海中に投下された物も変体を完了しました！」

モニターがまた切り替わる。

魚。

両脇に長い刀のような刃。

「ただ今をもって、地上に投下された生物を甲型、第二波で投下された生物を乙型、海中に投下された生物を丙型と呼称！」

同時に、融合した一型機と二型機をNEONと呼称！そして、三型機をBABELと呼称！」

「了解！」「」

「各地に投下された丙型が、投下された地点から最も近い陸地へと

移動を開始しています！」

「甲型、乙型も同時に移動と攻撃を開始しました！」

「全兵装ビル起動！キラカゼ内の甲型を攻撃しろ！」

「了解！」

「レオム全機のカタパルトの起動が完了しました！」

「レオム全機、カタパルトへ搭載完了！」

由佳里が手を組み合わせ、祈る。

そして、言う。

「レオム全機、射出！」

第二十九話

第二十九話 灰

「くらえっ！」

量産機のバズーカが甲型の頭部に直撃し、吹き飛ぶ。そして、その場に崩れ落ちた。

「よっしゃ！」

移動した瞬間に横に熱線が放たれる。

乙型が兵装ビルの銃撃を避けながらわきを通過する。

「バズーカ弾切れ？くそっ！」

バズーカをその場に投げ捨てると、背部から巨大なブレードを取り出す。

乙型が移動する先に飛んで回りこむ。

通り間際に分断する。

「おっ！バズーカ！」

着地するとすぐに構え、ブレードを収納する。

「よっしゃ！全弾入り！」

量産機のカメラが一部分にズームする。

「No.1433・・・恵理か・・・・・・・・..
うわっ！」

背部に衝撃。

首のみが回転し、何があったのかを確認する。

「・・・甲型！」

甲型はすでに剣を振りかざしていた。

「・・・もう行くことになるぜ。恵理。純也」
零距离でバズーカを放った。

「甲型、二十体撃退！」

「乙型、三十体撃退！」

清輝とレナだった。

「私・・・まだ怖いよ・・・」

いつも乗ってたはずなのに・・・こんな・・・」

「遠隔操縦とはわけが違うに決まってんじゃないかよ。
来るぞ！」

乙型の編隊がせまる。

熱線が放たれるその前に何とか兵装ビルの陰に隠れ、やり過ごす。
清輝が折れたブレードを発見する。

自分のブレードをレナの量産機に放り投げ、折れたブレードを空
に構える。

「くらえええっ！」

真っ直ぐに空へと放たれたブレードが乙型の体をとらえる。

落ちた乙型に反応し、全体が旋回して清輝達へと向かってくる。

レナの量産機が清輝の量産機にブレードを投げる。

「行くわよ！」

「ああ！」

次々と放たれる熱線を避け、中心にいる二体の乙型を斬り倒す。
編隊が編成される隙を与えないうちに両脇へと旋回し、全体を斬
り倒した。

「「乙型、十体撃退！」」

レナが文句をいい始める。

「乙型の方の報告は私でしょ？」

「まあいいじゃないかよ。本部もそれぐらいわかってるだろうしな」
二人が周りを確認する。

「やばいわね・・・」

周りを二十数体の甲型に囲まれていた。

全体が剣を逆手に構え、清輝達へと向ける。

「・・・」

剣が放たれ、二人へと迫る。

巨大な砲身。

後ろについている極太の電線。

「これは……………」

「対宇宙戦用防衛兵器、陽電子砲……………」

ポジトロンライフルをついに使うのね……………」

レナの量産機に本部から通信が入る。

「……………こちら……………567号機……………」

「レナ……………ポジトロンライフルを頼む」

「NEON、BABELへの直接攻撃と思われる飛行行動を開始！」

「あいつらも、いよいよ決戦をするときが来たと思っているのか。」

しかし、敵はでかすぎだぞ。どうする気だ？」

一型機と二型機の通信機は稼動しているが、言葉が聞こえることはなかった。

「全乙型がNEONに向かって移動しています！」

「志隆！時野！」

声に気が付いてNEONが下を見渡す。

人間にとっては真っ暗でも、NEONの眼には確かに全体が見えていた。

「……………」

ざっと見ても一万はゆうに超えている。

NEONは羽を全て矢に変換し、それぞれへと向け、全ての弓に矢をつがえた。

そして、もう一度翼を生成して矢へと変換し、それを三度繰り返した。

乙型が人間でも目視できる位置に来る。

その時。

数百万本の光の矢が全ての乙型をとらえた。

乙型が太平洋へと落ちていく。

そして、再び飛びはじめると数秒で止まる。
手をBABELへとつく。

「……………」

そして、NEONはのめりこんでいった。

「あれ……なんだ？」

「え？」

シエルターへと向かっている三人が、ふと上空を見上げる。

そこにはほんのりと光っていて、真っ暗な空へと飛んでいく物体があった。

「……志隆？」

篠崎と小暮が鈴木を見る。

「志隆がそれに乗ってるのか？」

「乗ってるんじゃないかって……あれ自体が志隆……？」

「まさか……………」

物体が静止する。

周囲が強く光はじめる。

そして、何百万本の何かが放たれた。

「……何したの？」

「倒したんじゃないのか？何かを」

「あの……飛んでる白いやつを？」

「まさか……………」

そして、また物体が飛びはじめると、空の黒に染められていった。

「消えた……………」

「絶対いるよ。あそこに」

「どうしてそんなことがいえるんだ？」

「わかんないよ。でも、第六感っていうか、そんなのが叫んでる気がする」

「それじゃあ……応援してやったほうがいいのかな？」

丘の上から自衛隊らしき人が声をかける。

「何をしているその三人！早く入れ！」

「はい！」

三人があわてて走り出し、篠崎と小暮が先にシェルターに入っていく。

最後に鈴木が振り返る。

「がんばって。志隆。顔も知らないけど」

「NEON、BABELと融合しました！」

「取り込まれたのか！？」

「詳細は不明です！」

「ポジトロンライフルの扉が567号機と600号機によって開かれました！」

指揮室が静まり返る。

「レナは何号機に乗っている？」

「567号機……です」

「つないでくれ」

しばらくの沈黙。

「……こちら……567号機……」

「レナ……ポジトロンライフルを頼む」

静かに時が流れる。

「……了解」

由佳里が腕時計を見る。

「午後三時に撃つ。準備をしておけ」

「了解」

回線が切れる。

「各国へポジトロンライフル発射要請！」

「了解！」

あらゆる言語のメッセージが一斉に送信される。

「北アメリカ州、全国承諾！」

「ヨーロッパ州、全国承諾！」

「オセアニア州、全国承諾！」

「南アメリカ州、全国承諾！」

「アジア州、全国承諾！」

「アフリカ州、全国承諾！」

「全世界の発電所の使用許可が下りました！」

「各国に使用日時を通達！同時に、各発電所の四次元ゲート発生装置使用命令！」

「了解！」

別々の時刻と少量の文章が打たれたメッセージが一斉に送信される。

「世界平和も、このように簡単に行くといいのだがな……」

「アメリカ、ロシア、イギリスよりポジトロンライフル発射要請が出された模様です！」

各時間は、日本時刻、午後3時5分、10分、15分となっています！」

「ほぼ同時に四回か……発電所にかなりの負担をかけるな……」

各シエルターを予備発電へ切り替え！」

「了解！」

「人類と死生物の直接対決だ。」

キラカゼ内の甲型を午後2時45分までに全体撃退！

その後、中心部より半径10km以内立ち入り禁止！」

「了解！」

「キラカゼ内の全体撃退を確認しました」

「全機につなげ」

「了解」

由佳里がゆつくりとマイクを握る。

「全員、知っているとは思うが、ポジトロンライフルを撃つことを決定した。」

引き金を引くのはレナ・W・スミス。

補助役が二人必要だ。

どうなるかは知っていると思う。

・・・だが、人類のために必要不可欠だ。

私が実際に指揮した『第二次生物絶滅期』の時もそうだった。

最終的に強制的に選ばれてしまった三人が撃つことになった。

無理は承知だ。

決定したら死は免れない。

誰か

「600号機、レナ・W・スミスの補助役を立候補します！」

「お前は論外だ。当然だろうが。」

あと一名

「454号機、レナ・W・スミスの補助役・・・いえ、ポジトロン

ライフルの発砲を立候補します！」

あたりがざわめく。

「何を言っている、かりん。」

代わってやりたい気持ちはわからんでもないが、立場的には全く

「

「いえ、二人を救える方法があるからこそ、立候補しているんです」

「・・・救える方法・・・だと？」

かりんがゆっくりと深呼吸する音が聞こえる。

「ポジトロンライフルを発射する瞬間に、補助役であるレオム二機が、レールガンを一直線上、真逆に撃ちあい、反動で発射地点より

離脱します。

PRMではできなかった方法です」

オペレーターの一人が計算をはじめ。

「確かに、理論上不可能ではありません」

「それで、生かしてやるなら二人がいい・・・と？」

「・・・人生最後の偽善かもしれませんかね」

由佳里が少し躊躇したあと、言った。

「わかった。レナ。かりんと代われ」

「しかし！」

由佳里が間髪入れずに言う。

「人の善行は素直に受け止める。」

それに、お前ら片方が生き残っても仕方ないだろ？」

「でもかりんが」

「誰にしる一人は死ぬことが明白だ。」

その周りが悲しむことは免れん。

これは命令だ。従え」

「・・・了解・・・」

「美月、全機の安全、かつ確実な移動を頼む」

「了解！」

全機、我楼山の裏側へと移動開始！」

「・・・了解！」「」

三機を残して全機が山へと移動を始める。

「地下原子力発電施設をポジトロンライフルからレールガンへと変更。」

お前ら、頼むぞ」

「・・・了解！」「」

「ポジトロンライフル、発射準備時間に突入！」

「各機、準備開始！」

「・・・了解！」「」

ポジトロンライフルの砲身が二機の力で上に持ち上がる。

「砲身角度、55度に設定！」

「・・・了解！」「」

二機が砲身を微調整する。

「発射角度、右45度、左45度、計90度に設定！」

「・・・了解！」「」

二機が持っているレバーを砲身の根元に移動させ、微調整する。

「砲身の絶対零度への冷却を開始！」

脇についているパイプから液体が注入され、先から漏れ出す。

「二機のレールガン設定を開始！」

「了解！」

二人が計算を開始する。

「右機、ポジトロニファルに対し水平、レールガン、本機対し九十度、地面に対し水平！」

「左機、ポジトロニファルに対し水平、レールガン、本機対し九十度、地面に対し水平！」

「了解！」

レオムの微調整はこちらが行います！」

「了解！」

完全にレールガンが一直線上になる。

「現在時刻！」

「午後2時59分19！20！21！22！23！24！25！26！27！28！29！開始！」

カウントダウンがはじまる。

「発射まで、28！27！26！25！24！23！22！21！20！」

「さあ、全世界生産電力、25億kw！」

ポジトロニファル発射電力、50億kwを受けてみる！」

「11！」

10！

9！

8！

7！

6！

5！

4！

3！

2！

1！」

レールガンの閃光は見えることなく、二機が真逆に凄まじいスピードで飛んでいく。

同時に地上に太陽が出来たかのような光が降り注ぎ、吉良風市を覆い、光線となって飛んでいく。

「ポジトロンライフル、BABELへ命中！」

「液体窒素放出後、配線をアメリカに回せ！」

「了解！」

「清輝・・・・・・・・」

「なんだ・・・・・・・・」

「かりん・・・・・・・・死んじゃったね・・・・・・・・」

「そうだな・・・・・・・・」

「でも・・・・・・・・眩しいね・・・・・・・・」

「そうだな・・・・・・・・」

空には、輝く太陽があった。

第三十話

第三十話 紅

「イギリスでの第四射が完了しました」

「全射が当たっても、何も音沙汰無し……か……あいつらが頑張っているのか、それとも様子を見ているだけなのか……」

「BABELに動きを確認！

根元の部分から、何かが生えてきます！」

兵装ビルが全て消し飛んだため、レーダーだけで探知する。何か太いものが伸びている。

「進行方向、本部です！」

「地下移動エレベータを完全隔離閉鎖！

及び、全通路を遮断し、全本部内防衛兵器、起動！」

「了解！」

監視モニターが閉じられていく通路をとらえる。

「地上ビルに到達！エレベータを突き破っています！」

「全装甲板が、数秒とかならずに損壊していきます！」

「役立たずか……！」

モニターは防時局内部の3D全体図へと変わり、突き破っていく根のような物を映し出していた。

そして、止まった。

「本部入り口にて停止！」

3D全体図が根の先にズームインする。

「BABELより、人型の生物が射出されています！」

モニターが監視用へと変わる。

人。

それも、独眼で左腕に極度に巨大化した剣とも盾とも言えないよ

うなものをつけていた。

「以下、本部へ侵入した人型を丁型と呼称！」

「了解！」

丁型が扉への攻撃を開始する。

どうやら、剣でも盾でもあるらしかった。

「丁型が第一通路、第一装甲への攻撃を開始しました！」

「射出はまだ続いています！」

「防衛用第一、第二、第三、第四、第五通路開け！」

対人型防衛兵器を第一、第二、第三、第四、第五の持ち場につかせる！

時間制御装置だけは意地でも守れ！」

「丁型の射出が完了した模様です」

「現在、全一万体です！」

「対人型防衛兵器は！」

「十万機です！」

「数の上では勝っているが、ただか対人兵器でどこまでやれるかどうか……」

「第一通路への最終装甲への攻撃を開始しました！」

「対人型防衛兵器、用意！」

小型化したレオムのような体と、両腕のガトリング。

一万体が銃口を入り口へと向ける。

そして、天井のレーザー防衛兵器五機が起動し、同じく入り口を向いた。

「突破される前に攻撃を開始しろ！」

「全機、攻撃開始！」

一秒間に数十万発という弾が乱れ飛ぶ。

入ってきた丁型が次々に倒れていく。

しかし、盾を構えて出てきた一体の丁型に一万体の力が及ばなかった。

「わずかに出た脚部を攻撃させろ！」

「了解！」

全機が下部に銃口を向ける。

しかし、銃口が下に向けられた瞬間に、盾を構えている丁型の後ろから次々に丁型が飛び出し、攻撃を開始した。

「第一線の近距離戦闘開始！」

レーザーブレードを取り出し、丁型との近距離戦闘に入る。

「後退しつつ体勢を立て直せ！」

「無理です！敵の侵攻が早すぎます！」

「第一通路、突破されました！」

「第五通路、突破されました！」

「対人防衛兵器も最後は何とか役に立ったな……………」

あと何体いるんだ？

「約千体です！」

由佳里が意味深げに考え込む。

「来るな。あいつら。ここに。」

ばらばらの五万機がいくら頑張っても、ここに来るのが百以下なのは絶望的だな……………」

「指揮官……………」

「第五十番通路の第一装甲が破られた時点で、全機器類を自動にし、対人装備の準備を開始しろ！」

「了解！」「了解！」

「第五十番通路、第四十九装甲が破られました！」

途端に、指揮室の第一ブリッジが攻撃されはじめる。

全員が様々な種類の銃を構えた。

「屍、突破された瞬間に撃ちこめ」

「了解」

屍がロケットランチャーを構える。

突破され、指揮室の遙か下にある床に何人かが落ちていった瞬間。
入り口にロケットランチャーが命中し、入り口を塞いだ。
屍は、すぐさまアサルトライフルを構える。

「胤、零、茜、桜、漑、魚、屍、純、詩。」

最後の一人になったとしたら・・・覚悟を決めてくれ」

「・・・・・・」

瓦礫が除々に動き出す。

「撃てー！」

辺りが全て灰色な空間の中。

「里奈ちゃんって、呼んだほうがいい？それとも・・・オヴィルって呼んだほうがいい？」

「好きなようにして構わない。何しろお前は今、神埼志隆だからな。ジヴェル。戻れ」

時野・・・ジヴェルがオヴィルの方へと歩き出し、そして志隆の方を向いた。

「全員、出て来い」

何もない空間の中からいきなり二十九人の人間の姿をしたものが出てきた。

もちろん、全員が死生物である。

「ルヴィエ、来い」

志隆の隣からルヴィエが現れた。

「意味、わかっていただけましたか？」

「もちろんだよ」

ルヴィエがオヴィルの側について志隆を見た。

そして、最後にオヴィルの側から英子が出てきた。

「・・・お久しぶりです」

「・・・・うん」

オヴィルが全体を見渡し、そして最後に志隆を見た。

「まずは、人間以外に意見を聞こうか。賛成か否か。」

賛成は私の側に。反対は志隆の側に移動しろ」

ジヴェルのみが動いた。

「では、英子に意見を聞く。賛成か否か」

英子は移動しなかった。

「反対ではないのか」

「今まであなた方と共にエリインの中で生活をしていて、人類を客観的に見たときにはじめて痛感しました。

あなた方がやっていることは単なる地球が欲しいというだけの欲望ではなく、地球の代弁を果たす役割をしているのだと。

私はこの際、人類の絶滅を選んだ方があらゆる物と生物にとっていいことなのではないかと思います。

それで私が死ぬことになっても、それで構いません」

「主観的ではなく、客観的に見た結果・・・か。

ではジヴェル、お前はなぜ反対なのだ？」

ジヴェルは大きく深呼吸すると、言った。

「人類は過ちを繰り返さない理性があるからです」

「・・・どこからわかるというのだ？」

「確かに人類は私達と比べてもさらに不器用であり、不完全です。人類は平和への帰還を求めているながら、私利私欲のために無駄な金を使い、その結果戦争を引き起こします。

ですが、人類も変わりつつあるのです。

平和への活動人数は確実に増え、さらに生物や地球などにもしつかりとした配慮を行い始めています」

「なるほど。確かに間違いではないな。

しかし、地球が滅亡する瞬間を一番最初に見たお前が言うべき言葉ではないような気がするが？」

「・・・ええ。もともと、デギウルの核を取り戻す任務を与えられる前に私は地球に目をつけていて、その行く末を断りもなく見てきました。

そして、人類を滅亡させる計画をオヴィルシス様に提案し、七十

七次創考空間を捨て、地球へと移住することも提案しました。

しかし、それは単なる予想に過ぎませんでした。

人間は、私達よりも遥かに高等な生物です。

過ちの中から次の成功のための方法を探り、最も可能性の高い方法でそれを実行する。

それは、とても我々には出来ない能力だと思っからです」

「・・・なるほど。これも一意見として捉えよう。

そして志隆。判断はお前だ」

志隆が啞然とする。

「・・・僕が？」

「お前は私達の力によって人類を完全に絶滅させ、元の地球を取り戻すことに賛成なのか？反対なのか？」

「・・・そんな判断が僕に」

「デギウルが何を考えてお前を選んだのか聞くことは、お前がここにいる限り不可能だ。

だからこそ知りたい。お前は何であり、そしてデギウルと共に何をもたらすのか」

「・・・それだったら時野でも」

「時野神子は将来、お前がいる組織内にいることがわかっていたがために選んだのだ。

それは私が決めたこと。それが平塚清輝であっても、滝網美月であつても特に支障はない。

だが、お前は違う。

デギウルが何かの考えを持ってお前を選んだ。

デギウルは私のような能力は持っていないが、始まりはデギウルだ。私達が生まれたきっかけも知っている。

そんなデギウルが何も考えずにお前のような軟弱者を選ぶと思うのか？」

「軟弱者は・・・確かにそうだけど。

でも、僕はそんな運命なんて背負ってない。背負いたくないよ。

そんなこと僕に判断しろって言ったって……」
オヴィルは話を続ける。

「過去は変えられない。だが、未来は変えられる……という言葉
を人類は作ったそうだな。」

だが、それは大きな間違いだ。
過去が変えられないのは当たり前だ。だが、未来も同様に変える
ことはできない。

お前達に『運命』というものがあるとして、それは必然であり偶
然などでは全くない。

限りなく緻密に組み立てられた必然が狂うことはありえない。

もし、そう感じたことがあったとしても、それは必然であって、
自分の努力や、奇跡によって変わったものではない。

何が起ころうが、この先は変わらない。

人類も。地球も。そして我々も」

「……」

「……志隆」

ジヴェルが話し出す。

「……私は時野神子ではなく、ジヴェルシス。」

そして、今まで話していたのは私」

「……!!」

「本当の時野神子は私ではない。」

でも、言っておきたいことは山よりも高い。

志隆……あなたは、何かしらの運命を背負っている。いいえ、
背負わされている。

私は一刻も早くその運命を取り除いてあげたい。でも、私にはそ
れができない。

だからこそ、早く決断をした方がいい。

あなたが迷っている間にも、人類は次々と滅んでいく」

「……」

「あなたが物語の主人公である必要はどこにもない。」

でも、脇役だったとしても物語の中では重要な役目。
その一言で全ての運命が定まると言っても過言ではない。

志隆。逃げてはだめ。そして………」

他の死生物が消えていった。

「さあ。決断しろ。志隆。お前は人類の定められた運命を知っているのだ」

志隆の背中からデギウルの触手が伸び、オヴィルとジヴェルが見えなくなるほど巻きついた。

「仲間内で反乱が起きないよう、賛成の場合はジヴェルを、反対の場合は私をその手で殺せ」

「そんな……!」

「まあ、私も無理に決めるとは言わない。
ただ、決断をしなければ何もせずに両方を殺してしまうことになるがな。」

地球も。人類も」

「決めて……志隆」

「澪!澪!みおおおおおおお!」

由佳里が血だらけになった澪を抱いている。

丁型はもういなかった。

「ん……ん………」

「澪!」

澪がうつすらと目を開ける。

「……由佳里……指揮……官………」

「何も私をかばうことなんて……!」

「パス……ワード……覚えて……ます……よね?」

「ああ……もちろんだ」

由佳里の声は震えていた。

「私……も……同じことを……遺言として……言っておきます………」

「何を言っている！死ぬな！私が困るではないか！！」

「自分の考えに．．．嘘を．．．つくのは．．．よく．．．ないですよ．．．．．」

わかっている．．．はずです．．．．．」

「お前には言わなければならぬことがたくさんあるんだ！

恋も！家族も！友情も！自分のことも！」

漣の目が少しずつ遠くなっていく。

「わかっていきます．．．でも．．．しばらくはこっちに来ないでくださいね．．．．．」

色々、整理したいことが．．．ありますから．．．．．」

「漣！だめだ漣！」

「生きて．．．由佳里．．．．．」

．．．．．

「おい漣。漣？ふざけるなよ」

．．．．．

「どうせ冗談なんだろう？」

．．．．．

「すぐに起き上がって『冗談です』って言うてみる」

．．．．．

「なあ漣．．．冗談にしてくれ！！」

そういうと、由佳里は死体を壊れるほどに抱きしめる。

そして、涙も出さずに立ち上がった。

「．．．．．」

指揮官用の机の引出しに手をかける。

「ILY941230．．．．．」

銃だった。

「再びお前の顔を拝むことになるとはな．．．．．

6年と1日ぶりか．．．．．」

そして、割れているモニターを確認する。

第二部隊が全て射出し終わっていた。

「・・・・・・・・」

パソコンを立ち上げると、すぐさまパスワード入力画面へと切り替わる。

「い、き、ろ、ゆ、か、り・・・・・・・・」

ローマ字で入力する。

「皮肉なものだな・・・本当に。こんなときに打ち込むことになるとはな・・・・・・・・」

Enterキーを押すと、静かにカウントダウンが始まる。

そして、ELYをこめかみに当てた。

「待たせたな。今行くことにする。」

笠羅

「・・・・・・・・どうやら、お前達の組織が自爆したらしいな」

「・・・・・・・・そんな・・・!!」

「さあ、どうする？賛成か？反対か？

それともこのままどちらとも殺さずに二つを滅亡させるのか？

それとも両方殺してお前一人で三十体を相手に戦い、この世界の神になるのか？」

「・・・・・・・・っ・・・・・・・・」

ジヴェルの体が潰されていく。

しかし、完全に潰しきる前に元に戻す。

次にオヴィルの体が潰されていく。

しかし、完全に潰しきる前に元に戻す。

「あなたは私達に拷問をしたいの？」

「・・・・・・・・」

「骨を折る程度では無駄だ。一気に殺せ」

「・・・・・・・・」

「神崎さん、選択をお願いします」

「・・・・・・・・」

志隆の脳裏に再び二人の言葉が現れる。

全てのことを知ったとき、全てのことを思い出してください。
どちらかの立場だけにとらわれずに、かつ、自分の意見をしっかりと行うことが大切なのです。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・決まったの？」

「早くしろ。私も疲れてきた」

「神崎さん・・・・・・・・」

「・・・・・・・・決まったよ。」

ものすごく粗雑で偽善だけど、何とか出せたよ」

「下せ。志隆。その手で」

志隆は今までの躊躇がどこかへ行ってしまったように、一気に潰した。

オヴィルシスを。

そして、ジヴェルを解放する。

「答えは・・・・・・・・それなのね」

「・・・・・・・・うん」

「そうでしたか・・・・・・・・」

と、三人の体に激痛が走る。

「きゃあああああああ！」

「あああ！ああああああ！！」

「ぐっ・・・・・・・・ああああああああ！！」

三人は光となり散っていった。

「・・・・・・・・」

風の音。

「・・・・・・・・」

砂の音。

「・・・・・・・・」

志隆が声も出さずに目を覚ました。

「ここは・・・？」

見てみれば砂漠のような場所のど真中に二人が円状に横たわっていた。

「時野！英子さん！」

二人を揺すってみるが、反応は全くない。

「・・・頭痛い・・・」

志隆は頭をさすりながら立ち上がる。

志隆が辺りを見渡すと、そこはただの砂漠ではないことがわかった。

「吉良風市だ・・・」

少し遠くに見える山。

砂に埋もれかけた兵装ビルの欠片。

「志隆！おい、志隆！」

「無事だったのね！」

「清輝！レナ！」

清輝達が駆け寄ってくる。

「え、英子！？」

「何か、連れ戻しちゃったみたい」

「連れ戻した、ってそんな馬鹿な・・・」

「とりあえず、どうなったの？」

一番気になる質問を志隆にする。

「午後九時少し前ぐらいにいきなり全型の死生物が光になって消えて、その数秒後にBABELも光になって消えた」

「じゃあ今は何時？」

清輝が腕時計を確認する。

「2001年1月1日午前6時ちょい前だ」

「どつりで暗いんだ・・・」

「でもまあ、これで新世紀は無事に迎えられそうだな」

「明日の午後九時になるまでわからないわよ？」

「んなわけねえだろ。勘弁してくれよ」

「そういえば、なんでこんなに荒廃してるの？」

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

どちらとも答えようとし無い。

「・・・・どうしたの？」

「・・・・やっぱり効果はゼロに等しかったのか・・・・・・・・」

「何が？」

「ポジトロンライフルを撃ったせいよ・・・・・・・・」

「ポジトロンライフル？レールガンの強力なやつ？」

「そう・・・・世界の電力を一箇所に集めて放電する銃。

その膨大な熱量による熱風で全て溶かされたわ」

「じゃあ、撃った人はもちろん溶けちゃったんだ」

清輝がいきなり志隆に掴みかかる。

しかし、すぐにその手を離れた。

「な、何？」

「撃つたのは・・・・かりんだ」

「・・・・溶け・・・・たの？」

「正確に言えば気化した。もちろん骨も」

「嘘です！」

英子ができ上がっていた。

「そんな・・・・そんなことがあるわけがありません！

かりんが・・・・かりんが死ぬわけがありません！

そんな・・・・そんな！！」

レナが英子を抱きしめる。

「ごめんなさい・・・・本当は、私が撃つはずだったのに・・・・・・・・」

「

しかし、英子はレナを突き飛ばした。

「嫌です！理由なんて聞きたくありません！

それなら、何で私はわざわざここに！！」

「あいつも、英子が戻ってくることを知っていればな．．．．．」
「そんな！そんな！そんな！そんな！」

うわあああああああああああああああああああ
あん！！」

ためらいもなく英子はなんとかその悲しみを大量の涙で流そうと
する。

「ああああああああああああああああん！」

そんなああああああああ！そんなあああああああああ！

！」

「．．．．．」

「一人にして！！お願いだから、一人にさせて！！」

もう誰とも仲良くなんてなりたくない！！」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

「．．．．．」

第三十一話

第三十一話 無

「・・・・・・・・」

美月が瓦礫の中で何かを必死に搜索している。

近くにはかなり強引に着陸したような量産機が一機見える。

「・・・・・・・・」

ほんの少し泣いているような気もする。

周りを見てみれば、防時局があつた場所である。

「・・・・・・・・」

なりふり構わず探している。

そして、一つの瓦礫をどかすと、ある物を見つけた。

「・・・・あ・・・・・・・・」

銃。

それも真つ赤な。

「これ・・・先輩の・・・・・・・・」

恐る恐る手に取ると、いきなりその場に投げ出し、一気に瓦礫をどかす手を速める。

「先輩・・・先輩・・・！」

手はところどころ切れ、血が出ていた。

しかし、手が止まることはない。

そしていきなり、手を止める。

「・・・・・・・・」

そして、踏ん切りがついたように泣き始める。

「うわあああああああああ！！

あああああああああ！！

あああああああああああ！！」

何も無いのに、泣いていた。

「・・・うして・・・んな・・・せ・・・ばい・・・きに・・・ん・・・
・・・うん・・・か・・・

どうして先に死んじゃうんですか!!
ほとんど教えてもらってないのに!!
ほとんど聞いてもらってないのに!!

これからどうやって生きていけばいいんですか!!

誰に教えてもらえばいいんですか!!

誰に聞いてもらえばいいんですか!!」

悲しみで一氣に言い放つ。

しかし、増幅させるだけだった。

「ばかああああああああ・・・

先輩のばかああああああああああ!!」

そう一氣に言い放つと両手を地面に叩きつけた。

「・・・ひくつ・・・ひくつ・・・ひくつ・・・」

涙をおさえようとせずに、投げ出した銃を拾う。

「・・・行きます・・・今すぐに・・・」

・・・力チツ。

「・・・?」

銃声は聞こえなかった。

ゆっくりと弾が入っているかどうか確認する。

「・・・!!」

弾の代わりに一切れの紙が入っていた。

美月へ

これを撃った、ということは、きっと私は死んでいるのだろう
だが、一つ言っておきたい

私が死んで、お前が悲しんだように、お前が死ねば、誰かが悲しむ

ましてや、局長であり、指揮官のお前が私一人のために死ぬのは
許されることではない

だが、きっとそれをわかっていてお前は撃つたのだろう。きっと
そこまでして死にたい理由はわからなくもない

だが美月

私も死のうと思ったことが一度だけあった

その銃で

お前が私と一緒に見た見た何枚かの写真があつたはずだ

そいつが死んだときだ

だがな、そのとき、そいつからお前と同じ手紙をもらったのだ

だからといって、私がこの銃の中にこの手紙を入れたわけでは断
じてない

行数が足りなくなるから結論を言っておく

生きてくれ。美月

私の分まで生きろとは言わない

だが、せめて自分の分だけは生きてくれ

頼む

新藤

P・S・（遺言に追伸は変だな）

その銃は「ILY941231」という

「・・・・・・・・」

涙を忘れて手紙を読み終えた。

銃を眺める。

「・・・・・・・・ILY941231・・・・・・・・」

そして、袖口で涙を拭く。

「もう・・・泣かないから」

「ん・・・・・・・・」

「時野！」

場所もよくよく考えずに志隆が時野を抱きしめる。

「あ……………」

「時野！…………よかった……………」

「あのさ……………」

志隆が思わず時野を放す。

「あの…………さ？」

「うん。まあ、びっくりして当然だと思うけど、あたし、前までのあたしじゃないの。」

言い換えるなら、今の私は封印されてたあたし、って感じかな？
見てみれば、目は以前のような鋭い目ではなく、どこかしら優しさを持った目になっていた。

「……………」

「っていうか、あいつ、こんな趣味してたわけ？」

髪は長くてチクチクするし、それに好きな男の前でズボンって何よ？

「しかもスッピンだなんて…………ありえないんですけど」

「……………」

時野が志隆の顔を見る。

「ま、まあ、それもそうよね。」

今まであいつがあたしの顔と性格だったんだから、受け止められないのも無理ないわよね」

「時野……………」

「何？」

志隆が時野の両手を握り締めた。

涙目で。

「どうか、どうかその髪は切らないでください。」

それと化粧も、スカートもはかないでください。お願いします」

「な、何よいきなり……………」

「清楚が時野なんです。大和撫子が時野なんです。無口で冷淡なの

が時野なんです」

「は、はあ……」

時野は志隆に圧倒されていた。

その気迫と熱意に。

「よく、あいつもこんな男を好きになったもんだわ……ま、一から十まで見てたから、おおよわからないわけでもないんだけど」

志隆が手を握り締めたまま話す。

「見てたの？ ずっと」

「あいつがあたしの体に乗っ取ってたんだから、仕方なく黙って見てるしかなかったのよ。」

おかげで、あいつの心の声まで丸聞こえたんだけどね」

「……何て言ってた？」

「あんたと会ってる時も、会ってない時も、四六時中あんたのことはっかり考えて、監視者だの、任務だの言ってたわよ。」

最終的に好きだったみたいだけど」

「好きだったんだ……」

志隆が一気に落ち込む。

しかし、気にせず話を続ける。

「そういえば、あんたのことを好きなあいつもあいつだけど、あんたは何であいつのことを好きなの？」

「え？」

完全に別の人物だと思っている。

「そりゃ、そういうさらさらで長くて黒い髪の毛とか好きだし、僕より身長が高いのがいっていうのかなんていうのか……」

「つまり、あんたはMだから、Sなあいつにいろいろな面から言葉責めされたかった、っていうわけ？」

「そ、そんな……」

「意外とロリコンじゃなくて姉好きなのね」

「ロリコンって……」

「そつえば」

時野が強引に話題を変える。

「結局、あんたがあいつのことを好きなのはよくわかってるけど、元に戻っちゃったあたしと付き合うわけ？」

「え！？」

志隆が言葉に詰まる。

「ま、別に容姿は全く同じなわけだし？」

「・・・」

「それに、はじめては取り放題」

「・・・もしそうだとして、付き合ってくれるの？」

時野の顔が赤くなる。

「ば、ばかじゃないの！」

べ、別にあたしはあんたのことが好きだから言ってるわけじゃないんだからね！

あんたがあたしのことが好きで、付き合う気持ちがあるんだとしたら、あいつのためを思って、付き合ってあげるわけよ！

「・・・」

「な、何よ。顔なんか見て」

「・・・なんか、新鮮だよ。」

時野が恥ずかしがってるなんて。

やっぱりかわいいんだね」

時野が沸騰寸前になる。

「い、いいわよ！わかったわよ！」

そんなに言うなら付き合ってあげるわよ！」

「え？まだ何も」

「ごちゃごちゃ言わないの！男でしょ！」

「は、はい・・・」

「もう一度言っとくけど、あ、あたしがあんたを好きになったわけじゃないんだからね！」

あんたがあたしを好きになったんだからね！」

「だから別に否定なんか」

「これはボランティア精神溢れる私の行動なの！」

「わかったわね！」

「わかったよ。時野」

「二十一世紀がはじまってからもう一年か……」

若干せまくなったような指揮室の中には志隆、清輝、レナ、英子、

時野、美月。

そして、見知らぬオペレーターと、なぜか小暮達がいた。

「なあ、そろそろ聞かせてくれよ志隆。」

あの夜、防衛庁時間管制局

「管理局でしょ」

「そうそう。」

「そこで、何があつたんだ？」

「んー……まだ内緒かな」

三人を除く全員がため息をつく。

「まだ教えねえのかよ。そろそろいいだろ？」

「まだだめ。」

あと五年くらい……かな」

小暮が悪態をつく。

「……放置もいいとこだぜ」

「別に話したくないわけじゃないんだけど……ね」

「じゃあ、話せばいいじゃねえかよ」

「それは……ちよつと……ね、時野」

「別にあたしは構わないけど？」

あたしじゃなかったんだから」

結局、時野は今までのままの容姿でいた。

「じゃ、思う存分」

「だ、だめですよ時野さん！」

「何もだめっていうことは」

「志隆さんが話したがってないじゃないですか」

「・・・・・・・・」

「そりゃそうだけど、これを話せば志隆が人類の英雄になれるのよ？」

「「人類の英雄！」「」」

全員が一気に食らいつく。

「死生物を根絶したとか！？」

「地球の運命を変えたとか！？」

「過去に戻って最初の死生物を絶滅させたとか！？」

「ス、ストップストップ！」

妄想が激化してるよ！」

「でも、同意義といえば同意義よね」

「「何！」「」」

さらに妄想が激化する。

「新世界を作って人類を移住させたとか！？」

「じゃあ、志隆は神！？」

「お主、なかなかやるな」

「ストーーーーッブ！！」

周りを黙らせるぐらいの勢いで言い放つ。

「もうわかった。話すよ。」

僕がBABELを倒したのは事実。

里奈ちゃんを殺すことによって・・・ね」

「・・・・・・・・」

全員が後悔しているように見えた。

「僕、選んだんだよ一応。」

里奈ちゃんを殺して人間を守るか。

時野を殺して地球を守るか」

「地球を・・・守る・・・？」

「人間を完全に絶滅させること、だよ」

「・・・・・・・・」

誰も喋らない。

「今さら謝るけど、ほんとにごめん。」

僕、人間を守るのと同じくらい絶滅させようって考えた。

みんなを・・・殺してしまうことを考えた」

「・・・・・・・・」

美月が口を開ける。

「私も、考えると思う。もし、そんな立場になったら。

人間が幸せに繁栄していることは、地球と他の生物にとって害に
しかないもんね。

でも、それをわかっていて生かしているから・・・本当にすごい
と思う。

尊敬、っていうより・・・崇拜・・・かな」

「・・・大袈裟だよ」

「いや、間違ってないと思うぜ。」

お前は神だよ。

あらゆることを考えながら、それでも人間に慈悲をくれたお前は、
神だ」

「俺らのダチにこんなやつがいたとはな・・・・・・・・」

崇拜に値するぜ。な？」

「「うん」」

「誰も、人間を絶滅させようとしたことなんて、責めないと思う。
責める人なんて、いるわけないよ」

「私も、直にそれを見ていて、本当に志隆さんは神様のような気が
しました。」

これが果たして未来にどのような結果を残していくのかは、検討
がつきませんが・・・・・・・・

それでも、素晴らしいと思います」

「ものすごく痛かったけど、それでも迷うに決まってるよね。志隆」

「みんな・・・ありがとう。」

本当に僕・・・心の底からありがとうって言える気がするよ。

・・・ありがとう」

「何？美月」

指揮官室ではなく、美月の私室に志隆はいた。

「・・・今月の31日に、解散するんですって」

「・・・そうなんだ。寂しくなるね」

「志隆は・・・どうするの？」

美月はずっと志隆に背を向けたまま。

「・・・おじさん達のところには戻らないと思う。
変な迷惑かけるの嫌だし。」

それと」

「時野と二人暮らしを始めるの？」

わざと志隆の言葉を遮って美月が言う。

「・・・知ってたの？」

「ものすごくごめんなさいだけど、盗み聞き」

「・・・」

・・・

「もう、言いたいことはわかってるはずよね？」

「・・・」

まだ振り向かない。

「私をフツて」

「・・・」

「初恋の人と最後まで添い遂げたいなんていう、甘い考えは持っていないわ。」

しかも、志隆にもっと好きな人がいるなら、なおさら」

「・・・」

「私自身、そうしてもらったほうが助かるの。」

このまま引きずっていくなんていや」

「・・・」

「決心ついた？」

「・・・いいの？」

「もうとつくに決心はついてるわ。
四年前から」

「・・・・・・」

「あの話を聞いたとき、なんとなくだけど、私じゃ明らかに不足な気がしたの。」

「監禁された人同士としても、操縦者だった人同士としても、最後を見届けた人同士しても。」

「私には不足してるわ」

「・・・・・・」

「それに、私に要らないものもあると思うの。」

「一番は、家族」

「・・・家族を要らないなんて言っちゃいけないよ」

「家族が殺されたもの同士のほうが互いに分かり合えると思う。」

「その方が、絶対にいい人生ができる」

「・・・わかった」

「ええ、言つて」

「ごめん。美月。」

「僕、好きな人ができたんだ。」

「もう・・・付き合えない」

「志隆のほうに居たたまれなくなって、走り出す。」

「志隆がドアを閉めた瞬間に、ずっと流れていた涙が、ようやく一滴落ちた。」

「「・・・ん、んー」」

「二人が冬空の下、同時に背伸びをした。」

「はあ。」

「ついに、解散だね」

「次に召集されるのはいつかしらね」

「まさか。」

僕と時野はありえないよ」

時野が志隆の方を向きながら、後ろ向きで歩き始める。

「これから住むところって、どこだっけ？」

「大都会のと真中だよ」

「籍とかつて、入れる？」

「いいんじゃない？めんどくさそうだし」

時野があからさまに不機嫌な顔をする。

「なんで？レナはもう、平塚レナになったのに」

「まあ、それもそうだけどさ……」

「いいわよ、別に。あたしが全部書いてあげるから」

「そういうのって、本人がその場で書かなくちゃいけないんじゃないのかな？」

時野が再び、志隆と並んで歩き始める。

「そうなの？」

「いや、わかんないけど……」

「で、どうする？」

『あなた』がいい？『志隆』がいい？それとも『ご主人様』？

「最後は絶対無しに決まってるよ」

「えー、そういうの好きじゃん。」

あたしも好きだし」

「冗談で言っただけではないらしい。」

「まあ、そうだけどさあ……」

一応、四月からはプロの小説家として働かなきゃいけないわけだし……」

「ほんとに運がいいっていうのかなんていうのか……」

一連の騒動をまとめて、ちよつとアレンジしたやつを出してみたら、見事に大当たりだったからね。

まあ、そんなに大きな出版社じゃないけど」

「芸は身を助ける、ってね」

「ま、適度に芥川賞とか狙えたらいいんじゃないの？」

「けっこうでかいのね」

ふと、雪が降ってくる。

「寒いから、手でもつなぐ？」

「そういえば、最近二人でどこかに行くことも少なくなったからね」
ゆつくりと互いの手をつなぐ。

「これからは週一だからね」

「それは・・・厳しくない？」

「専業主婦は、いろいろ溜まるのよ」

「改めて言っておくけど、やっぱり時野には和食を」

時野が志隆の手を離して走り出す。

「ほら！女房が逃げてくよ！」

「はいはい。旦那は追いかけますよ」

不思議な二人の声が薄っすらと雪の積もった街路樹の間を抜けて
いった。

初雪の下で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5487c/>

神創兵器 エレクシエスト

2010年10月8日14時10分発行